

Handai

SEASONAL MAGAZINE

NEWS

Letter

Published by OSAKA UNIVERSITY

阪大ニューズレター

対談集 1998-2005

「社会と大学、知の交流」



大阪大学



No.5 (1999.9)



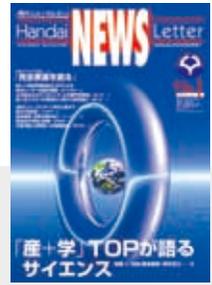
No.4 (1999.6)



No.3 (1999.3)



No.2 (1998.12)



創刊号 (1998.9)



No.15 (2002.3)



No.14 (2001.12)



No.13 (2001.9)



No.12 (2001.6)



No.11 (2001.3)



No.25 (2004.9)



No.24 (2004.6)



No.23 (2004.3)



No.22 (2003.12)



No.21 (2003.9)

阪大ニューズレターの歩み

◎社会と大学の懸け橋として

阪大ニューズレターは、「社会と大学の相互理解を深めるために積極的な情報発信を進める」という岸本忠三前総長の方針により、1998年9月に第1号を創刊しました。以来8年間にわたり、大阪大学の研究成果や教育研究活動の現状を社会に発信し続けてきました。

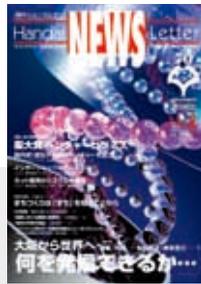
阪大ニューズレターの構成・内容は、最先端の研究現場からのレポート、企業・産業界、経済界のトップや第一線で活躍される学者・知識人の方々と総長との対談コーナー、仕事に役立つ実践的な法律や経済の解説、各分野で活躍する卒業生の紹介など、幅広いテーマとユニークな企画を取り上げています。また、斬新なデザインと工夫を凝らした編集が「垢抜けしている」「国立大学色を感じさせない」として発刊当初から注目を浴びました。このことは、文部省（現文部科学省）が主催する「国立大学等優秀広報誌コンクール」で1999年に最優秀賞（グランプリ）を、続いて翌年、レイアウト・デザイン部門優秀賞を受賞し、関係者から卓越した出来栄の大学広報誌と絶賛されたことにも表れています。同時にアウトソーシング（毎日新聞総合事業局の編集協力）による広報誌の製作手法も他の国立大学の先駆けになるとの評価も得ました。



No.10 (2000.12)



No.9 (2000.9)



No.8 (2000.6)



No.7 (2000.3)



No.6 (1999.12)



No.20 (2003.6)



No.19 (2003.3)



No.18 (2002.12)



No.17 (2002.9)



No.16 (2002.6)



No.30 (2005.12)



No.29 (2005.9)



No.28 (2005.6)



No.27 (2005.3)



No.26 (2004.12)

The History of H.N.L

現在、3カ月に一度の間隔で発行しており、約450社の在阪企業をはじめ、近隣自治体、大学・研究機関、在学生の保護者の方などに約1万2000部を送付しています。今回30号という一つの節目を迎えましたが、これは一つの通過点であり、今後50号、100号に向けてさらにブラッシュアップした内容の広報誌にしたいと考えています。

国立大学は法人化という大きな節目に立ち、その真価が問われようとしています。大阪大学は常に挑戦性、冒険性のスピリットを忘れず、世の中の変化に合わせて前向きに社会の期待に応えるよう努力していきたいと考えています。そして、その一手段として、今後も阪大ニューズレターを通して社会にメッセージを送り続けたいと思います。

大阪大学総務部評価・広報課長 松本紀文

阪大ニューズレター対談集——「社会と大学、知の交流」—— 1998・2005

CONTENTS

阪大ニューズレターの歩み 2

1998

「産十学」TOPが語るサイエンス——対談・新宮康男／岸本忠三 7

「生命現象の謎に迫る」——インタビュー・岸本忠三 13

1999

「狂言師」茂山千作、大いに語る——対談・茂山千作／天野文雄 17

文化は混じり合いから 阪大を交わりの場に——対談・梅棹忠夫／岸本忠三 21

雇用問題を考える——「新産業創出のカギは？」——対談・奥井 功／本間正明 27

日本の大学——「何をしたいか、何ができるか？」——対談・安藤忠雄／岸本忠三 33

2000

産十学、トップが語る——「いい街といい大学」——対談・秋山喜久／岸本忠三 39

大阪から世界へ「何を発信できるか……」——対談・太田房江／岸本忠三 45

「千里文化の丘」から世界へ——座談会・梅棹忠夫／岡田善雄／岸本忠三／花房秀三郎／早石 修 51

2002

「産十学」21世紀の日本を考える——座談会・中村邦夫／西川善文／岸本忠三 57

「科学の時代とこころ」——対談・河合隼雄／柏木哲夫 63

	「大学と社会」	— 対談・山崎正和／鷺田清一	69
	「どうなる？ 法曹界」	— 座談会・津田和明／中野貞一郎／多胡圭一	75
2003	「どこへ行く、何を指すのか 大学？」	— 座談会・宮西正宜／川北 稔／鷺田清一／宮原秀夫／土岐 博	81
	「知の創造」	「日本の大学は進歩したのか」 — 対談・藤原正彦／岸本忠三	87
	「知力、環境、文化 阪大イメージアップ戦略！」	— 新総長インタビュー・宮原秀夫	93
	「阪大発ベンチャー」	— 座談会・吉田健一／秋元 浩／三木弼一／坂 栄次／村上孝三	97
2004	「大学と都市」	— 大阪 — 対談・關 淳一／宮原秀夫	103
	「法人化でどう変わる？」	— 座談会・宮原秀夫／鈴木 直／鷺田清一／馬越佑吉／馬場明道／仁科一彦／北見耕一／橋本日出男	109
	「大学と企業」	「いまからの産学連携」 — 座談会・安達 稔／畑野吉雄／椋本 満／宮原秀夫／馬越佑吉	117
2005	「教養」と「デザイン力」と「国際性」を	— 座談会・小瀧 努／平井和美／河 福子／高橋敬三／秋吉一郎／宮原秀夫／鷺田清一	123
	「メディアと大学」	「世界スタンダードを目指す」 — 対談・出馬迪男／宮原秀夫	129
	「対話のレッスン」	— 座談会・鈴木 直／平田オリザ／伊藤京子／小林傳司／中岡成文	135
	「阪大&大阪 めざそう世界ブランド」	— 座談会・堀井良殿／上村多恵子／宮原秀夫	141
	「学生の教養教育とは 若者の知的欲求を呼び覚ます」	— 座談会・木村智彦／泉谷八千代／高杉英一	147
	「阪大ニュースレター対談集の刊行にあたって」		153

▶「おことわり」――

本書は、阪大ニューズレター発刊30号記念として、いままでに掲載されました対談のみを収録しております。従いまして、対談のなかった号（No.9・11・12・13・14号）につきましては割愛させていただきました。また、本書に掲載しました対談記事の内容は、阪大ニューズレターに掲載した当時のものですので、時間的な表記および肩書等につきましては、現在のものと符合しない部分があります。ご了承ください。予め各号のトピラの発行日をご留意のうえご覧ください。

[産+学] TOPが語る サイエンス

「明るく元気な関西」を目指している点で、大阪大学と関西経済界には共通項があります。その“けん引車”である新宮康男・関西経済連合会会長と岸本忠三・大阪大学総長。お二人に、産業界とアカデミズムの立場から、科学技術の振興と、それに必要な人材育成をどう図っていくべきか、そして、阪大を中心とする関西アカデミズムへの期待——三つのテーマに絞ってお聞きしたいと思います。

●対談

- 関西経済連合会会長
新宮康男 ————— Yasuo Shingu
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— Tadamitsu Kisbimoto
- 司会 渡辺悟・毎日新聞経済部編集委員 — Satoru Watanabe



[阪大ニュースレター No.1] 1998/秋号(創刊号)掲載
1998(平成10)年9月1日発行



大阪のサイエンスは
外国からみても、
よくやっていると評価が高い。



岸本忠三 総長

——まず、新宮会長にお伺いします。日本は科学技術立国を目指してやってきたが、現状をどのように評価されていますか。

新宮 鉄鋼会社の経営者として、技術で他社に負けたら会社の存続は難しい、と徹底して社内で行い続けてきました。日本の科学技術というか、企業のものづくりのレベル、新しい製品を開発する力は世界でも1、2になつたんじゃないかと思つた時期があつたんですが、ここ数年、気がついたら、相対的によそ（の国）に後れをとつていた。そんな危機感が高まっていますね。

——岸本総長には、科学技術立国日本、その中の大学の立場から見た現状を。

岸本 ベーシックなサイエンスの面で、例えば、有名な科学雑誌に出る論文の数という点から考えると、

アメリカに次いでいい線をいつている。ヨーロッパと比べても遜色はないが、何か印象が弱い。平均的にはみんな優秀なんです。論文はたくさん書いているし、その論文は水準を超えている。だけど、「ああ、あの人の仕事」と言われる率が少ない。これや、という突出したものがありません。

新宮 アメリカの金属学会で、日本の鉄鋼関係の研究発表は、昭和40年代から50年代に賞をもらうことが多かった。ところが、このところ賞がもらえない。先生もおっしゃったように、平均点は良いかもしれないが、優秀賞が出ない。

岸本 1960年から70年代、日本人がたくさんアメリカに留学して、学会にも参加、ハングリー精神もあつた。日本人の勤勉さと優秀さがアメリカのサイエンスを支えたが、その立場が今、中国、韓国の



新宮康男氏

教育が余りにも
平等主義でありすぎたのではないか。
今、一番大事なことは、教育の問題。

人に入れ代わっているんです。

日本は設備が整っていて、研究費もある。なにも、アメリカに行かなくても、というわけです。それであまり行かなくなりました。ハングリー精神もなくなりました。だから、賞も減ってきた。トータルでみたら、国のエネルギーを落としていきますよね。

新宮 エレクトロニクスやコンピュータソフトの分野でも韓国、インド、それから中国がアメリカでよく頑張っている。

岸本 中国にしろ、インドにしろ、韓国にしろ、外国へ行けば、みんな、そこで頑張るんや、という気持ち強い。外国でのチャイナタウンのような集団は、日本人には出来ませんよね。日本は住みやすいし、それでいいんや、と。

新宮 確かに、ある時期、いいところまでいったので、安住してしまった。少し、安住しすぎて、気がついたら温泉気分……。国自体も進歩が止まったんじゃないか、な。

——いま、指摘された問題について、関西経済界としてどのような取り組みをされているのか。つまり、安住しないで、活力を持ちながら、どう進めていこうとしているのかを。

新宮 基本的には、基礎的な科学の研究の集積度を関西でどう高めていくか、そして、その成果を使って新しい産業をどう興していくか、の二つの問題があるわけです。

関西には、関西文化学術研究都市、播磨科学公園都市、大阪・千里を中心とするバイオサイエンスの集積地などがある。京都大学、大阪大学、神戸大学など、よい大学もある。経済界では今、広域連携を提起していますが、科学技術を振興する拠点を連携させて成果をどう生み出すようにしていくか。もう一つは、新しいベンチャービジネスを育てること。関経連が97年10月に創設した新産業創出システム（IIS）は、残念ながら今のところ、当初考えていたほどの成果は出ていませんが、新産業育成は、我々に課せられた課題です。

——今年の学士院賞は阪大の柳田敏雄先生で、恩賜賞を併せて受賞されました。賞だけで判断するのはどうかと思いますが、阪大は元気がいいですね。関西のアカデミズムは、科学技術の分野でも頑張っている。

岸本 サイエンスは世界から見れば、大阪も東京も同じ一点。大阪のサイエンス、特に、生命科学の分野では、外国から見ても、よくやっていると評価が高い。例えば、1月号の有名な三つの科学雑誌に大阪大学の先生の論文が同時に出了。こんなアクティブ

なことは珍しい、ということですね。なぜなのか。それは、元気な人を集めてきた、いい人を集めてくることが試みた、ということですね。これからは、自分、よその大学もそうやっていくと思うが、我々はそれを少し、早くやってきたということです。

産業界は連携とか、チームワークが必須条件ですよ。ところが、サイエンスの世界は突出した者がいるとか、競争に勝つとか、が一番大事なことになる。

新宮 私もチームワークを重視するあまり、なあ、やっておればよいというわけではありません。例えば、播磨科学公園都市のSpring8や関西文化学術研究都市に、我々もお金を出して支援している。それは、一つの研究施設や企業でも何もかもそろえようとするのは無理だし、無駄でもある。つまり、人間個々は競い合い、研究施設は連携し合って、全体を高めていけばよい、ということですね。——新宮会長は、大学とか施設の連携とおっしゃいました。アカデミズムの広域連携ともいいまじょうか、総長はどのようにお考えですか。

岸本 無から有は出ないんで、アイデアとかオリジナリティーは、人と話をしているときに、ぱっと出てきたり、浮かんだりするもので、人的交流とか人との交わりは非常に大事なことです。日本の科学技術にとってハンディキャップになっているのは、その機会が少ないこと。日本だけの狭い世界ではなく、世界的な広い意味での共同研究、交流をできるだけ進めていかなければいけない。それが、新しいものを生み出す原動力になると思いますね。だから、僕は、1〜2カ月に1回は外国に行ったり来たりしているんです。いつも言うことなんです、日本がヨーロッパの真ん中にある国やったら、何十でもノーベル賞が出ていたやろう、と思います。

新宮 「21世紀の関西を考える会」という大学の先生

も加わった研究会をつくって丸3年になります。経済や社会的なテーマでいろんな大学の先生が話し合うことは今まであまりなかったのが、予想以上に感謝されているんです。先生同士が、意気投合したり、知り合いになれて、大変な成果だということですね。

——日本の人材育成について、企業内教育も含めてどのようにご覧になっていますか。

新宮 今、一番大事なことは、教育の問題。優秀な人材が育たないと、これからの日本はもたないんじゃないかな。関係連の中に人材育成委員会をつくり、大学の先生など関係各方面から講師を招いて活動していますが、教育が余りにも平等主義でありすぎたのではないかと、思います。私の子供、孫の状況を見ていると、落ちこぼれを出さないような教育、運動会でもみんな手をつないで、日本の平均点を上げることにおいては効果はあったが、ここで一段と抜きこんでた国になっていくには、いかに優れた才能ある人をつくり出していくか、伸ばしていくか、そういう教育のあり方があってしかるべきですよ。大学、高校はそうでもないでしょうが。

岸本 それが問題の根源でしょうね。努力すれば評価される、ということでない人間、頑張りませんよ。速く走れば1等賞だとか、勉強すればなんだとか、我々のころは、優等賞とか皆勤賞とか、いろいろありましたよ。

新宮 今は抜きこんでたら、いじめられる。

岸本 そうそう。

——帰国子女が流暢な英語をしゃべれるのに、わざと下手な英語を使う。日本的な発音をしないと、いじめられる。日本の社会の有り様、というか、根源的なところに問題があるのかなあ、と思うんですけど。

岸本 みんなと同じであればよい、というのであれ

日本がヨーロッパの真ん中にある国やったら、
何十でもノーベル賞が出ていたやろう、
と思います。

ば楽ですよ。しかし、それでは駄目、と言われ出して、皆、戸惑っているんじゃないんですか。

大学の教育にしたって、企業はそれほど期待をしなかった。大学を出た人であれば入ってから、教育すればいいんや、と。しかし、これから年功序列、終身雇用が崩れていくとしたら、企業はすぐ使えるスペシャリストを雇う、大学も専門家をつくって送り出す。企業も、大学も変わっていかねばならない。

もう一つ、大学として大事なことは、文化、教養のある人間をつくること。ただ知識として知っているだけでなく、人間全部としての教養を教える大学にならないと駄目ですよ。学部（大学）の教育の大部分は文化・教養を身につけさせ、大学院で専門を教えてスペシャリストをつくる。両方兼ね備えた教育をして企業がそれを受け入れて利用する。アメリカ的な、ある程度はそっちの方向へいかなないと、あ

きませんよね。

——人材の育成という問題意識から交流をもっと活性化させる装置みたいなものを、きちんとつくるべき、と。

岸本 そうや、と思いますよ。今は、おもに大学院、あるいは大学を卒業した人の留学とか交流ですよ。しかし、学部の早い時期から1年間で半年でもいい、外国へ行く、あるいは、こちらで受け入れる。外国で取った単位も日本の大学と同じように認め、学費も日本で払っておれば外国の大学で払わなくてもよい、というシステムを広げていこう、といくつかの大学とプログラムを始めているわけです。

——若いときに留学して自分を外の世界にさらす大切さを、総長は以前に指摘されましたが…。

岸本 若い時代に身をもって体験することが非常に大事やと思う。世の中には、ものすごく勉強しているやつもいるんや。その代わり、むちゃくちゃ悪いやつもおる。大金持ちも、スラムに住んでいる人も；ああ、こんな世界もあるんや、と自分の目で知ること。

そのために、多くの学生が交換できるようなシステムをつくっていくことが大事やと思う。留学生10万人構想というのがあったが、最近になって止まってしまった。経済の問題があったりして。しかし、日本はそれほど魅力がないという面もあるんです。中国、東南アジアのトップの学生は英語圏へ行きますよ。ある程度、英語で通用する大学にしていかなんと、シンガポールや台北にも負けますよ、日本の大学は。大阪大学は事務の人をアメリカやオーストラリアへ毎年何人か派遣して研修してもらっています。留学生の世話を出来るように、と。そうでないと通用しませんわ。国際化というのは、そんなことです。

——大阪大学に対する期待、注文がありましたら。

新宮 大阪大学は創立の経緯、歴史からみて大阪の街、大阪商人と一緒にやっていくんや、という気風があります。産学交流もうまくいってると思う。国立大学ではあるが、研究施設などをつくるたびに大阪の経済界がお金を出して支援してきた。そういうこともあって、先生方にも成果をお返ししないかなという意識が強いんじゃないかな。一緒にやりましようや、といういい気風を今後とも伸ばしていただきたい。

岸本 僕も同じことです。世界中の人に大阪を知ってもらうための一つのポイントは学問であり、文化であると思っている。

アメリカの都市のランクは何で付けるか。その都市に、どんな大学、オーケストラがあるか、バスケットボールとフットボールの強いチームを持っているか、なんです。ボストンにはハーバード大学がある。ボストン交響楽団がある。こういうフアクターが評価になっているんです。

そういう意味で、大阪大学が大阪の顔として頑張ることで、大阪全体のイメージアップ、基盤を上げることになるんじゃないかな、というふうな偉そうなことを考えているんです。

——暗い話題が多いですが、「明るく元氣な関西」を期待できるでしょうか。

新宮 経済界はこれからも、科学技術の振興のバト

ロンとしてやること、やれることがあるんじゃないか、と思ってる。

それと、この不景気だからといって、経済界はグチこぼすのはやめよう、前を向いて行こう、と言っている。前を向いて行くには目標をもって、実現に向けて邁進していく。一つ実現したら、また一つ、と。それでいいんじゃないかな。当面は、関西国際空港の二期工事、関西文化学術研究都市、播磨科学公園都市の推進、そして、2008年のオリンピックを呼んで大阪、関西の前進に貢献したい。産官学が力を合わせてぜひ、実現を目指したい。

「生命現象の謎に迫る」

岸本忠三総長、文化勲章受章記念インタビュー

岸本忠三総長が1998年の文化勲章に輝いた。
免疫調整物質サイトカインに関する総長の研究はこれまでも
日本学士院賞・恩賜賞（92年）など数多くの受賞につながっているが、
「文化の発達に関し勲績卓絶」（文化勲章令）な功績が認められての今回の受章は、
一連の研究成果の深さと広がり、将来性の豊かさを改めて浮き彫りにした。
受章直後の岸本総長にサイトカイン談義や今後の抱負などをうかがった。

●インタビュー

- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— *Tadamitsu Kishimoto*



文化勲章を胸に皇居で記念撮影する（左から）
平山郁夫、村上三島、山本達郎、芦原義信、
岸本忠三の5氏（毎日新聞社提供）



【阪大ニュースレター No.2】1998／冬号 掲載
1998（平成10）年12月1日発行

免疫は生命にとって最も大事であり
それなしで人間は絶対生きていけない。
そのメカニズムを解明することは、
決定的に重要である。



岸本忠三 総長

——文化勲章受章おめでとうございます。お祝いなどが立て込んで、「サイエンスな生活」もままならないのでは。

岸本 名譽なことですから、まあ、少しくらい（研究生活が）邪魔されても。（笑い）

——岸本総長の研究されているサイトカインの領域は我々にとって難解なのですが、一般の注目、関心を集めるという点で今回の受章の意義は大きかったと思います。

岸本 そうですね。テレビがなぜ映るかを知らなくても生きていけるけど、免疫は生命、健康にかかわることですから、すべての人が関心を持つ必要があると思います。

20世紀が物理学の時代だったのに対して21世紀は生命科学の時代になると言われています。科学者たちは知的好奇心に導かれて生命現象の謎にどんどん

ん迫って行くでしょう。でも、それがどこまで社会的に許容されるかという問題は政治とか社会が決めていくわけです。その時に、クローンって何？、では困る。

——ところで、免疫と言えば18世紀後半のジェンナーが有名ですが、免疫の仕組みとか、それにかかわる物質が分かってきたのは1960年代と意外に新しいのですね。

岸本 私が大学を卒業して免疫学を始めたのは65年でした。当時分かっていたのは、抗体というものがあり、それが防御の働きをする、四つのタンパク質の鎖から成っている、そしてリンパ球がかかわっている、といった程度でした。

——黎明期の免疫学に飛び込み、60年代後半から始まるまさに爆発的な発見レースの中で見事な成果を上げられたわけですね。

岸本 リンパ球にはTリンパ球とBリンパ球の2種類あって、Bが抗体を作るのですが、Tと一緒にしないと抗体は作られない。そこで考えたわけです。TがBに対して抗体を作るよう指令を出しているとしたら、何らかの物質を媒介しているに違いない。その物質を見つけよう、と。免疫は生命にとって最も大事であり、それなしで人間は絶対生きていけない。そのメカニズムを解明することは決定的に重要である。だから、それを見つけよう、と。それでやり始めたわけです。

——それがインターロイキン（IL）6の発見につながる。

岸本 Tリンパ球の上澄み液を加えたBリンパ球と、上澄みを加えないBリンパ球を培養させて抗体を量るのです。月曜にスタートし、金曜夜にガンマカウンターで計測したら、まさに予測通りの結果になりました。Tの上澄み液の中に抗体を作るよう指令する分子があることが証明された瞬間でした。米国の大学に留学中でしたが、カウンターの数値がバツバツパーと跳ね上がるのを見た時は本当に興奮しました。これではばらくメシが食えると。

——しばらくどころか、だいぶ長く食えましたねえ。（爆笑）

金曜夜の発見が72年。早くから本質、核心に着目し、一気に到達されたことに驚きます。

岸本 で、帰国してからその物質を取り出す作業を始めるわけです。後で分かったことですが、IL6は100万個のTリンパ球が1ナノグラム（ナノは10億分の1）しか作り出さない。当時のレベルでは取り出すのは不可能だった。生命科学に革命をもたらした組換えDNA法を利用することで、目指す物質のDNAを大量に作り出し、その分子を取り出すことに成功したのは86年でした。

——試行錯誤が14年も続いたわけですね。

岸本 それだけじゃなくて、他の研究者によって思いもかけないことが分かり始めたんです。

体に炎症やがんがあると血沈は早く、CRPは高くなる。肝細胞刺激因子が炎症に対応する各種のタンパク質を肝臓に出させるためですが、刺激因子が何かは分からなかった。それが実はIL6だったのです。

また、60年代の免疫学は抗体の構造研究からスタートしたのですが、大量の抗体はそう簡単に手に入らない。白いネズミの腹にパラフィンを打ち込み、強烈な炎症を起こすことで均一な抗体産生細胞を大量に取り出す方法が開発され、利根川進さんの成果も含めて抗体の研究は飛躍的に進歩します。しかし、なぜパラフィンを入れるとそうなるかは分からなかった。ネズミの腹にできた抗体産生細胞のがんを調べたら、増殖因子はやはりIL6だった。20年来の疑問が解消したのです。

血小板を増やす物質もIL6でした。脳中枢に働いて発熱させるのもIL6だったし、IL6をなくしたネズミはリュウマチが起きないことも分かりました。まったく無関係と見られてきた現象が一つの分子で説明がつくようになったのです。

——共通項は「炎症」ですね。

岸本 それで今度はIL6の受容体の構造と、シグナルがどう伝達されるのかに取り組みました。IL6をモデルにしながら、免疫調整物質であるサイトカイン分野で一番先頭を走ってきたわけです。私の論文はサイトカインで世界トップ、生命科学では8番目に引用回数が多いということになった。最も基本的な所を押さえれば、後は他の人が汗を流して研究をしてくれる。資本家みたいなものですね。（笑い）

——特許の方はどうですか。



(毎日新聞社提供)

岸本 I L 6 の受容体は世界中で特許を取っていません。I L 6 と受容体の間をブロックするとか、シグナルを抑えるとかで新しい抗炎症剤につながりやすから。

——免疫学の課題と可能性をどうお考えでしょうか。

岸本 10 年ほど前、感染症は終わったと言われたものです。でも世界の病気で亡くなった人口の 8 割が感染症で亡くなっている、いかに有効なワクチンを安く簡単に作るかは地球レベルでは依然として大きな課題です。O 1 5 7 に代表されるように、日本もむろん無縁ではありませんし。

それと、アレルギー、アトピー、リュウマチなど、免疫が体を攻撃することで起きる病気が増えている。

環境の問題もからんでいます。免疫学はこれに対処していかなければなりません。

そして、がんです。これも免疫機能が弱まるのと比例して急カーブで増えていく。遺伝子治療によってサイトカインを入れるといった研究が始まっています。いかにして免疫機能を強くし、がんを克服するか、21 世紀の大きな課題です。

——大阪大学への期待も大きいですね。

岸本 ウイルスも賢いですから、うまく免疫の仕組みをかくぐらうとします。やることはまだまだたくさんあります。阪大には優秀な研究者も多数いますし、世界の COE (Center of Excellence) として頑張っていきたいですね。

「狂言師=茂山千作、大いに語る」

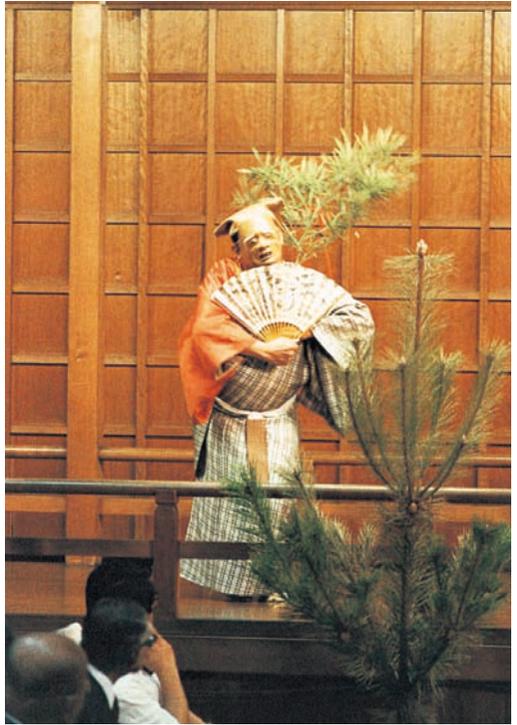
600年の歴史を誇る古典芸能の狂言。世代を越えて今、若い人たちにも大変な人気という。喜寿を過ぎてますます魅力的な舞台を楽しませてくれる芸道75年の重鎮・大蔵流狂言師（人間国宝）の茂山千作さん（79）と能楽史が専門で、大学では能・狂言の歴史や魅力を講じている文学部教授の天野文雄さん。お二人に狂言の今・昔や狂言を通しての若者気質などについて語っていただきました。

●対談

- 大蔵流狂言師／人間国宝
茂山千作 ————— *Sensaku Shigeyama*
- 大阪大学文学部教授（芸術学講座）
天野文雄 ————— *Fumio Amano*
- 司会 宮辻政夫・毎日新聞編集委員 — *Masao Miyatsuji*

〔阪大ニュースレター No.3〕 1999／春号 掲載
1999（平成11）年3月1日発行





「枕物狂」を演じる茂山千作氏

—— 98年秋には東京・国立能楽堂と京都観世会館で、大曲「枕物狂」を演じられるなど、大変お元気。場内をほのぼのとさせる千作先生の芸の魅力は何なんでしょう。

天野 千作さんの舞台を見るようになったのは昭和50年代の後半からですが、私の記憶では面白くなかったことはありません。いつも面白い。その面白さがどこからくるのか、説明は難しいのですが、例えば、ちよつとした仕草が大変おかしい。意識をされているのかどうか分かりませんが、これは他の狂言役者にはみられない特徴ですね。別の言い方をすれば、どの場面にも狂言が描こうとしている人間の本質が出ているということだと思います。

茂山 (狂言は) 天職やと思っています。どの舞台も一生懸命、いつもお客さんに喜んでもらえれば、それが舞台に出てくるんでしょうか。伝統的な

注・狂言面と「枕物狂」

狂言は、能と異なり、面は普通は用いない。しかし、顔をメイクアップしないため、老尼や醜女に扮する場合は面を必要とする。100歳の老人が乙女に恋をする物語で、秘曲といわれる「枕物狂」は、面をつけて演じられている。

型や言い回しを守りながら、自分なりの狂言を演じるような心がけています。じいさんの二世千作は、大きな声を出し、お客さんサーブিসも旺盛で、大きな芸をしました。それに比べ父は、小さいとは言わないうが、真面目に面白い芸をしましたよ。私は、じいさんの影響があると思います。

—— 師匠役だったその二世千作さんの思い出を。

茂山 父は養子さんです。私は、茂山家の「久しぶりの男の子や」というので、じいさんが可愛がつてくれまして、物心がついた頃は、じいさんの傍で寝起きしていました。三つ頃になって、2日か3日に一度、10分ぐらい、じいさんの前に座らされて、わけわからぬのに、口うつして稽古をしますんや。次は、立ち稽古、そうしているうちに、一番の狂言が出来てきますわな、そしたら、「どこぞへ出したいなあ」。初舞台は四つときで、小学校3、4年になる



茂山千作氏

「仲良く、上手な 狂言をやってくれたら、一番や」

と狂言を50番ぐらい覚えていましたね。弟と兄弟でやる狂言が人気がありまして、婦人会の余興や、当時は結婚式に呼ばれたりしました。

天野 先々代の稽古は厳しかったのでしょね。

茂山 稽古になると、よく怒られました。叩くのが好きでしたなあ。きついのは、舞台で間違ったりすると、舞台から下りるなり、パッパッ、と叩きよるんです。みんなの前ですよ。「人の見ている前で思い切り恥をかかせると、間違わんようになるから」と言って。良かっても「ええけど、まだ、あかん」でしたな。今は、良かった、ようやった、ですよ。私も孫を褒めませ。

天野 98年末に99歳でお亡くなりになったお母様はいかがでしたか。

茂山 『まだ、あかんなあ。おじいさんは、もっと上手にやりはった』『今日は、お客さんが喜んでくれました』『また、あかん』という程度でした。狂言をやっている家は大変、家内工業みたいで。母も主婦業以外

に衣裳の管理など裏方を務め、父にもよう尽くしてました。

——「枕物狂」を直面（ひためん）で演じられたのは、狂言史上初めて。

茂山 わりと、うまいこと、いったらいいすなあ。私の、このおかしな顔が良かったんと違いますか。

天野 直面だったのですか。良い思い付きでしたね。

茂山 申し合わせ（舞台稽古）のときに、国立能楽堂の主幹が「直面でやってもええんやろか。面をつけるより効果ありませ」と。思いもかけんことでしたが、傍に野村万蔵さんいまして、「やれ、やれ」ですわ。実は、これには下地があったんです。「枕物狂」の前に、「護法」という能を狂言師にやらせたら面白い、ということの前ジテをやったんです。

その時に、直面の方が、もうひとつおもしろいさかいに、と（シテ方観世流の梅若 六郎さん、(演劇評論家の)堂本（正樹）さん、(シテ方観世流の大槻)文藏君が言い出しましてね。これが、読売演劇賞にノミネートされて、後で、ビデオで見ると、まあ、不自然でもなかったもんですから。

歴史はさかのぼりますが、井伊家の江戸屋敷で「枕物狂」が演じられた時のこと。シテ方が倒れたので後見役の茂山家の九世千五郎（当時33歳）が代わって、そのまま「枕物狂」を見事に演じ続けたところ、井伊大老に気に入られ、それがきっかけで、茂山家は井伊家抱えの狂言師になったようです。東京で戦後初めてあった狂言会でも、じいさん（二世千作）が80歳を過ぎていたのに、「枕物狂」を演じて大賞をとったんです。私はそのとき孫の役で出たんですよ。そんなわけで、茂山家では「枕物狂」を大事にしているんです。

天野 私は常々、東京の狂言と関西の狂言の違いが気になっていましたが、この点はどうお考えですか。



茂山 武士がたしなむ芸能として東京では伝承されてきたが、関西では庶民的になっていったんでしょうね。大蔵流も町衆に教えたり、御所出入りになったらしい。格式張った芸能やしに、面白い芸を楽しんでもらう、といったふうには…。

天野 観客も東京と大阪、京都では違いますね。そういうことを演じていて感じられることはありますが。

茂山 京都は、古い町であることを自覚しているのか、「分かってるわい」という顔して見ている、反応は薄いすな。大阪は、面白かったらええ、というお客さんが多い。気風でしょうか、演じやすおすなあ。それに比べ、東京は、狂言を学術的と申しますか、評価をしながら見ているような気がします。雰囲気によって演じ方を少し変えることもあります。あんまり変えたらいかんが…。

天野 今、狂言は若い人たちにも人気があつて、観客の裾野が広がっていますが、お客さんの反応などは、今と昔とは違いますか。

茂山 京都市では、市民狂言会をやってくれて、お客さんもだんだん、増えましたなあ。狂言会を見たお客さんは、能舞台もと観世会館に来てくれる。映画と同じ安い料金にしていますし、大抵、満員ですわ。でも、今のお客さんにとっては、狂言の言葉が難しくなつてきていると思います。台本を現代言葉にしてしまうと狂言になりませんが、分かりやすいようにする工夫はありますね。例えば、二通りの言い回しがある場合、「二人大名」という狂言の「汝らエノコロの…」は「汝らイヌコロの…」にするなど。
天野 それは能でも歌舞伎でも古典劇に共通する問題ですね。ところで、千作さんは、戦後間もない頃から、地方の小中学校を回られているということですが。

茂山 今もやっています。昭和24、25年頃からです。

からもう50年になります。当時、狂言をやる所が少なくなつて、生活に困つたこともあつて学校に頼んで始めたのです。最近は企画会社が古典落語や狂言を学校で見せる企画がはやりましてね。所にもよりますが、このごろの生徒さんは、静かに、おとなしく、よく見てくれます。鑑賞態度は良いが、反応はありません。同じ高校でも、盛り上がる時代もあればおとなしい年も、いろいろですね。

天野 古典劇の場合、そういう普及活動は大変大事ですね。私も最近、研究を志す学生ではない一般の学生に能や狂言の魅力をどのように伝えていくかという点で、責任を感じるようになりました。千作さんは若い方々への稽古はどうなさっていますか。

茂山 私は二世のじいさんから教えられたが、今の若いもんはビデオで私の狂言を見て、ある程度覚えて私の所へやつてくる。始めから教えることは、今はしませんね。力強い、迫力のある狂言をやつてもらわないとあきません。人氣に溺れて薄っぺらな狂言をやつたら消えてしまいます。品良く、ほのぼのとしたおかしさの狂言を求めていた দিয়ে、それに応えるようにしていきます。

——茂山家は総勢20人。明るく仲良く、理想的な家族に見えます。円満の秘訣は？

茂山 みんな、狂言を発展させよう、共々、栄えようとの気持ちがないとね。テレビで売れている者もおりませんが、妬みなどないようにしてやっけないとあきません。1年に一度、茂山一門のみんなが集まりますが、私は「仲良くしてや」と言うているだけ。仲良く、上手な狂言をやつてくれたら、一番や。

——お孫さんの世代も順調に育っているようですね。
茂山 家の狂言には皆さんが期待しています。本日はどうもありがとうございました。

文化は混じり合いから 阪大を交わりの場に

「関西・日本そして世界と文化」

「文化は混交から生まれるもの。文化のないところに経済も産業もない。
そのことに大阪の人も気がついてきたんでしょね」
「人が集まり、混じり合える魅力ある大阪大学にしたい」——。
大阪21世紀塾名誉塾頭の梅棹忠夫・国立民族学博物館顧問と岸本忠三・大阪大学総長。
文化勲章受章者のお二人に、歴史をひもときながら
「関西・日本そして世界と文化」について語っていただきました。

●対談

- 大阪21世紀塾名誉塾頭／国立民族学博物館顧問
梅棹忠夫 ————— *Tadao Umesao*
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— *Tadamitsu Kishimoto*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞経済部編集委員 — *Satoru Watanabe*



【阪大ニュースレター No.4】1999／夏号 掲載
1999（平成11）年6月1日発行



孤立のなかからは雄大なものは出てこない。
文明は多様なものの混じり合いから
出てくるもの。
文明は混交の中からは出てこない。



梅棹忠夫氏

▼自信を失ったことは良いことだ

——日本は今、自信を喪失しているのではないかと
言われていますが、どう思われますか。

梅棹 自信を失ったことは、いいことです。日本は、
経済的な成功の上にあぐらをかいて傲慢無礼になっ
ていたと思います。60年代から80年代にかけては自
信過剰ですよ。そのバチが当たった。それで財界の
人は、ちよつと謙虚になった。謙虚さを取り戻した、
と見ているのですが。

岸本 僕らも、経済が強くなれば科学も強くなる、
と信じていましたからね。

——自信喪失から何か芽が出始めた、ということでは
しょうか。

梅棹 芽が出てほしいのですが、経済界の自信喪失
が学界や文化界を巻き添えにしないかと、心配して

います。財界の人は、財や物が最高だと思っている人
が多いですからね。本質はなかなか変わりませんよ。
岸本 自然科学の世界でもそうなんです。大阪大学
はよくやっているのに世間の評価は低い。実験・研
究はよくやっても、そこから先の、それに基づいて
全体の概念を構築することに欠けている面がある。
自然科学も文化ですから、研究もそこまでいかに
とね。そこが、日本のサイエンスが世界に受け入れ
られにくい理由なんではないかと思えます。それが大阪大
学にもあるんじゃないか、と言われる。ですから、一
に東大、二に京大、三・四がなくて五に阪大、と言
われましたからね。

梅棹 私はそうは思いません。私に言わせれば、学
術面では、一に京大、二に阪大、三・四がなくて…。

▼概念を表す言葉がバリエーション

——総長が言われた自然科学にも文化が欠落してい
るというのは、日本の文化が抱えている欠陥という
意味ですか。

梅棹 どうでしょうね。日本の学問は、江戸時代か
ら自然科学は深く強いものがあると私はみていま
す。特に、本草学です。私もその系譜に属するもの
のひとつですが、適塾(びと)もそうです。それに日本
の数学、特に代数学がいい。ただ、日本の数学には
実用性がなかった。19世紀、伊能忠敬という地図学
者が出ていますが、三角法測量術がないのでただひ
たすらに歩いた。また、日本の科学には物理学が欠
如しているんです。

岸本 物理学は概念です。概念、考えを表すのは言
葉ですが、それが不足していると言われます。サイ
エンスの世界では英語なんです。言葉は非常に重要
な意味を持ちますが、その言葉がバリエーションになっ
ている。言葉のないものは世界に通用しているのに。



岸本忠三 総長

10年単位ではなく
50年、100年のサイクルで考えた方が
よいのでは。本当に良いことを
やっておれば必ず栄えてくる。

▼文明は混じり合いの中から生まれる

例えば、アニメ。ゲームソフトもそうですね。文科系はどうですか。

梅棹 日本の文科系の学問も、一般に信じられているよりもはるかに程度の高いものです。例えば、18世紀の懐徳堂（懐徳堂）の学問はたいしたものですよ。山片蟠桃などは雄大な宇宙論を展開しています。

——日本の文化は、オリジナリティーを持ちながら、完成までゆけない何かがあるのでしょうか。

梅棹 それは、孤立のせいです。孤立の中からは雄大なものは出てこない。文明は多様なものの混じり合いから出てくるものです。文明は混交の中からしか出てこない。

岸本 個人もそうですね。一人ではよい研究成果は出てこない。よい連中の集まりから出てくる。ヨー

ロッパもそうですが、アメリカの西海岸や東海岸には世界中から人が集まっている。情報も集まってくる。アメリカは強いはずですよ。大阪も人の集まる中心地 shouldn't といけません。サイエンスの世界でも同じ。学会に行つて、みんなと混じり合っていると、「あっ、こんなことがあったのか」「こうすればよかったのか」とちよつとしたことに気がつき、新しい発見につながることもあります。ここ（総長室）に一人いて大将どりしては駄目ですよ。

梅棹 ヨーロッパがそうなんです。ヨーロッパは一国とは違うんです。ゲルマン系とラテン系という異質なものが対立していて、しかも、ゲルマン系の中にも東ゲルマン、西ゲルマン、北ゲルマンがあつてみな違う。そういう相互干渉の中から文明が出てきたのです。さらにアラブという全く異質な文明も混じっている。

——言語は別にして、日本の島国的な閉鎖性もバリバリになつてきたのではないですか。

梅棹 島国根性というが、歴史をひもといてみてもそうではない。江戸時代の鎖国も大穴があちこちに開いていた。物産にしても密貿易がいっぱいあつた。思想的なものも、ヨーロッパの本はいくらでも入つてきていた。鎖国といつても孤立していたわけではなかつたのです。

▼ヨーロッパでは、いろいろな交流がある

——ヨーロッパのように、侵略したり、されたり、戦争も含めたダイナミックな混じり合いの中から生まれる壮大な文明でなく、日本は限定された中で交流ということですね。

岸本 東京の人が関西ではなかなか住みにくい、ということもありますね。「バカ」と言うのと「アホ」と言うのの違い、文化が交わらない。

梅棹 それはヨーロッパでもあるんです。東ドイツと西ドイツは今でも没交渉といってよい。ドイツ文化を一本化するには、まだ時間がかかりますね。イタリアもローマを境に北イタリアと南イタリアはまるで違う。

岸本 行ってみるとそうですね、イタリアは。北は南のことを、南は北をぼろくそに言うし、学者の交流もないです。

梅棹 一国内でのローカリズムはありますが、それにもかかわらず全ヨーロッパでは、いろいろな交流があるんです。

岸本 お金を一つにするくらいですからね。

梅棹 ユーロはようやくやりましたね。土着の人は随分文化が違うんですがね。

岸本 外国の学者の集まりには、音楽を聴きに行つた話とか、展覧会を見てきた話題などが多い。日本の学者は仕事の話は盛んですが、外国との違いはそこです。ヨーロッパなどは、学者はエリートというか、学者の集団からの文化も出てくるということでしょうね。

梅棹 私の友人には洋楽に非常に詳しい人もいます。

岸本 自然科学の分野ではそういう学者が少ないですね。特に、大阪大学には少ないかもしれません。だから大阪大学には文化が少ない、と見られるんです。

▼自然科学では名前が大事

——話を戻しますが、関西、あるいは日本の文化に対する評価を。

岸本 関西は文化が少ないといわれますが、日本全体もやはり、基準が低いという感じがします。先にも言ったように概念、思想をつくり世界に発信する面からすると、我々日本は言語のハンディを抱えている。自然科学の分野では、新しい発見が仮に同時

期でも、名前をどう付けるか、また、誰が付けたのかで、学会の評価、認知のされ方が随分違ってくる。

梅棹 ビタミンがそうですね。ビタミンは、はじめ鈴木梅太郎がビタミンB1を発見してオリザニンという名前を付けたが、後から付けられたビタミンという名前が世界に通用するようになった。どちらもラテン語ですが、オリザというのは米のことです。西洋では一般的には米は食べませんからね。オリザニンでは対抗できないですね。

岸本 そういうことが、いっぱいあるんです。自然科学の世界では、名前が大事なんです。オリザニンであったか、ビタミンであったかの違い。ビタミンの発見者はノーベル賞になった。

梅棹 何語で発表するかも大事です。インターフェロンがそうだった。長野泰一さんが論文をフランス語で書いたが、後から出てきた英語のものにやられてしまった。ヨーロッパでも英語が強い。ドイツでも英語でないと駄目なんです。

岸本 我々にはそんなこと、分かりますからね。英語文明の中に育ってないので…。

梅棹 岸本先生は、発見されたものにどうしてインターロイキン6という名前を付けられたのですか。

岸本 免疫を調整する分子はインターロイキンという名前にしましょう、ということが学会の約束事だったのです。

梅棹 私は、動物学をやりましたから、ラテン語が多少分かるんですが、言語のバリアーは大変ですよ。

ヨーロッパにおけるラテン語は、極東では古典中国語にあたりますが、国際的には通用しない。

▼交流がないと駄目

——孤立は大きいのかかっている、といえますか。

梅棹 我々の先祖は何百年も孤立した中で文明をつ



くって来た。今は、日本も諸外国も共通基盤の上に立って、スタートラインについた、ということでしょう。いろいろなハンディキャップはあるでしょうが、競争はこれからですよ。

——大阪大学もダイナミックな交流、異質なものの交流のための仕掛けが大事になってくる。

梅棹 そうですよ。私は、京都生まれ、京都大学出身でしょう。大阪に来て、いかに孤立感を感じたか。大阪は、大学は大阪大学、旧制高校も浪速高校が圧倒的、三高では駄目なんです。近寄りがない。阪大と京大の人事交流があるのも事務官だけ。阪大理学部の生物学教室が京大の動物学から本城市次郎教授をはじめ、大量に人を入れたのは異例のことですよ。岸本 医学部もそうですよ。病院も阪大系、京大系に分かれていますね。

▼関西は二つでなく、三つ

——阪大はいろいろな大学から優れた人材を登用することに腐心されていると伺っていますが。

岸本 交流がないと駄目ですから。ただし、医学部も臨床面では他大学からの人材登用はほとんどありません。なかなか難しいですよ。

梅棹 国立民族学博物館は創設以来、教官の3分の1が京大、3分の1が東大、3分の1はその他の大学から来ていますが、その中に阪大はほとんど入っていない。同じ関西にありながら、えらい違いです。京都と大阪の間には、高槻・枚方ライン、というのがあって、そこで分かれている。文化圏が違うんですね。

岸本 天王山ですね。東京一極主義に対して関西は一つというのは成り立たない。

梅棹 関西は一つ、と言うがそれは違う。関西は一つ一つ。大阪、京都、神戸、それぞれが違う。それ

はそれで面白い。その中で交流が起こればよい。私は身をもってやっているわけです。

岸本 交流が大事。いろんな人が集まってくるのが大事。集まってくる魅力のあるものを持っていると駄目ですよ。

▼アメリカの強みは人が集まる相乗効果

——テレビで見たのですが、ソ連の崩壊後、30万人がアメリカへ移り住んだ、ということですか。芸術家、学者など優れた人が多いという。アメリカは理想国家ではないが、まだニューワールドで、魅力があるんですね。

岸本 皆が集まってくるから相乗効果が出るんですね。その仕掛けが大阪にも必要。海を越えて、学生も先生も大阪に集まってくるよう、ソフトもハード面でも引き付けるものを持たないと駄目ですね。言葉のハンディを乗り越えて。アメリカへ留学すれば世界に通用するが、日本では難しい。しかし、それを乗り越えても日本というふうには。

梅棹 アメリカには第一次大戦前から大量に文化人が移住しています。だから、今日のアメリカがある。——阪大だけ努力しても駄目なんだろうが、アメリカの大学には学ぶことの喜び、心をウキウキさせる雰囲気があるように思います。

梅棹 おっしゃる通りです。

岸本 どう変えていけばいいんでしょうか。難しい。

▼文化の無いところに経済、産業も無い

——「我々は、何かが欠けていた」との反省から2年ほど前、関西経済界の有志がヒューマニティーズ研究会という会をつくり、シカゴ大学の先生を招いて勉強をはじめました。「大阪21世紀塾」も、実用、実利一本でやってこられた人たちに、知的な刺激、



交流を図る装置としてはじめられたものと理解して
います。成果の方はいかがでしょうか。

梅棹 手応えはあったように思います。大阪財界人の
研究会も成果の一つではないでしょうか。今までの
の、物を作りさえすれば、金さえ儲ければよいとい
うのではありませんか、という雰囲気が出てきたのではあ
りませんか。

岸本 ソフト面の文化が栄えることは、経済を押し
上げることもなると違いますが。

梅棹 文化の無いところには経済も産業も無い。文
化が基礎です。大阪の人も多少、それに気がついて
きたんでしょうね。私は大阪に来て二十数年になり
ますが、最初のころは、民博の説明をしても「文化
なんて、何の役に立つんや」という反応が強かった。
しかし、大阪21世紀協会でも、大阪21世紀塾^{注3}
が出来るようになった。10年前では、とても考えら
れんことでした。

岸本 大阪が発展すれば大阪大学が良くなる。大阪
大学が大阪の顔になれば大阪も発展する。良い都市
に良い大学がある、アメリカのようになればと願っ
ています。

▼阪大が関西のリード役を

——中国に先富論というのがありますが、大阪で言
えば、阪大がその役割をすべきでは。

岸本 大阪大学は、その意味では重要な位置にある
と思いますよ。

梅棹 まず、阪大に先頭を切ってもらいましょう。
——阪大は実力より評価やイメージが低い。

梅棹 日本の学問もそうだ。実力より評価が低い。
岸本 だから、学外へ向かって情報発信をしなけれ
ばならない。大学のやっていることを。阪大の実力
も知ってもらわないといけない。

梅棹 最近になって、大学は広報を大事だと気づき
ました。今までは、大学は広報をすべきとは思って
もみななかった。教官の顔写真までつけてPRしてい
る大学も増えてきたようですね。

岸本 大学には、分からないなら、分かってもらわ
なくてもよいと思ってきた部分があったが、最近は大
阪大学もインターネットで教官の業績を検索でき
るシステムをつくりました。

▼関西には実力がある。長いサイクルで考えよう

——最後に一言ずつ。この10年間の関西経済の地盤
沈下はかなり進んでいる。21世紀に向けての関西の
あるべき姿についてのお考えを。

岸本 10年単位でなく、50年、100年のサイクル
で考えた方がよいのでは。本当に良いことをやって
おれば必ず栄えてくる。サイエンスでも、ちよつと
流行に遅れてやっている、その時は、いいことに
みえることがありますよ。しかし、後に残らない。
後から振り返って本当に残るもの、歴史的に長い年
月で見ると、その時は分からなかったということが
よくあります。関西は気候も風土も良いし、歴史的
にも恵まれているので、短い期間で心配しなくても、
着実に、良いものを求めておれば、それでいいので
はないでしょうか。

梅棹 関西には実力はある。プライドを持ってやっ
てほしい。私は東京に移り住もうなんてことを思っ
たことは一度もありません。

岸本 誇りも、愛着もあるし、消滅はしませんよ。
梅棹 話は違いますが、阪大・医学部の跡地に、大
芸能センターを、と提案しているが、なかなか実現
しない。舞台芸能のセンターのない世界都市なんて
ナンセンスです。阪大は、芸能の学問、研究では日
本でもトップです。音楽学、演劇学、芸能史が文学

部にある大学はほとんどありません。いい人材も生
んでいる。大事にしてください。大阪は経済だけで
はないということです。21世紀の阪大は、巨大学術
センターになってもらいたい。

「注1」適塾：

1838年（天保9年）に緒方洪庵が開いた適塾は、蘭学塾として大村益次郎、
福沢諭吉など日本の近代を切り開いた人物を多数輩出した。

「注2」懐徳堂：

1724年（享保9年）に設立。特定の学派・学説にとらわれない、自由な学風
を誇りとする町人のための教育機関で、明治維新まで展開された独自の学
校。その思想は当時の日本をリードした。適塾とともに懐徳堂の自由な精神や
先見性は、大阪大学の精神的支柱として今なお受け継がれている。

「注3」大阪21世紀塾：

懐徳堂の精神を現代に引き継ぎ、世界を舞台に活躍できるニューリーダーを育
成するための教育講座として1998年5月に、(財)大阪21世紀協会が開講し
た。人文、社会科学、自然科学、芸術などの学術分野や政財界などの第一線
で活躍する人材を講師に招き、会員を対象にした年3回の通常講義と、一般市民
の参加を募る年1回の公開講座を行っている。梅棹忠夫・国立民族学博物館顧
問が名誉塾頭を務める。

雇用問題を考える—— 「新産業創出のカギは？」

日本の経済は、先の見えない不況にあえいでいる。中でも深刻なのは雇用問題。かつてない高失業社会に直面、政府も雇用創出に取り組んでいるが、この危機を乗り切れるのか。雇用問題を当面の最重要課題にする日経連副会長で、関西経営者協会会長の奥井功・積水ハウス会長と政府の政策決定にかかわる審議会のメンバーとして関西経済界にも大きな発言力を持つ経済学者の本間正明・大阪大学副学長に、雇用問題を中心に新産業創出のカギとされる産学連携、そして大阪大学の果たす役割について語っていただきました。

●対談

- 積水ハウス取締役会長
奥井 功 ————— *Isao Okui*
- 大阪大学副学長
本間正明 ————— *Masaaki Homma*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞経済部編集委員 — *Satoru Watanabe*



【阪大ニュースレター No.5】1999／秋号 掲載
1999（平成11）年9月1日発行



阪大は貴重な情報発信源ですから、それを、もっと高めてもらいたい。阪大の先生方には、もっと社会に出て提言、啓発をお願いしたいですね。



奥井 功氏

▼雇用問題…「日本的雇用の良さは残すべき」

——景気は持ち直しているようですが、雇用情勢は悪い。失業率は5%に迫っています。まず、この現状をどうみておられるのか、産業界からの実感を。奥井 景気は最悪の時期が、98年で過ぎて、今は自律反転と言いますか、回復基調にあるのは間違いがありません。ただ、失業率はもう少し上がるのでは。2001年には6%との予測もあるが、5%は十分考えられる。しかし、そう悲観することはない、という自己満足説もあります。米国は景気が最高潮で失業率42%、日本は最悪の時期で49%、そういうこ

とからみてということです。

本間 今の不況は複合的な原因で生まれたと思います。バブル崩壊後、資産価格が下落して企業は大きな損失を受け、経済に大きな痛手となった。経済成長率は95、96年度に4%台に急激に回復、バブルは克服できたと思えたが、橋本内閣の行財政改革、国際的な金融不安等で需給のバランスが崩れ、成長率も再び落ち込んだ。構造的、循環的な要因によるものですね。過剰資本、過剰雇用をどのように克服するか、政府はシナリオを描いているところですが、高度経済成長を前提にしてきた雇用形態を今後、どう維持していくかは大変な問題です。

——企業は新規採用を極力抑えるなど、学生の就職状況も極めて厳しい。

本間 今の学生は、昔と違って、(大学から)薦められたらどこでもいいや、という傾向が薄れてきて、気に入らなければ就職しない、という風潮があります。大学が門戸を開いていることもあって、モラトリアム的に希望する就職先がなければ大学院へ行くケースが増えています。ただ、バブルの頃に比べると、学生の授業態度は向上しています。私は、これを不況の効用と言っているのですが、大学に入れば一流の企業に入れて一生が保証されるという安心感、意識は、この10年間の経済の激動の中で変わりつつあります。

奥井 企業は今、三つの過剰問題を抱えている。雇用と設備と債務。設備と債務はともかく、人の問題は政府にも対策をしてもらわないといけない。労働省が特に問題にしているのは、中高年の失業者対策です。ホワイトカラーで、手に職がない人はつぶしがきかん。関西の経済5団体でも企業経営者は、この半年か1年、歯を食いしばってでも失業者を出さない努力をしようと、申し合わせをしたところで。



本間正明 副学長

本間 終身雇用という側面から、中高年層の雇用確保はきちんとしなければいけない。しかし、雇用対策は難しい。

奥井 釈迦に説法ですが、雇用対策は五つあります。まず、社会的責任として企業は失業者を出さないよう努力すること・新産業を創出して雇用の場を増やす・失業者を再教育して世に送り出す・ミスマッチの解消に努めること・それでも駄目な人に、失業保険など社会保障制度、セーフティネットを設けることです。

雇用対策は中長期的なもので、即、効果が出ないが、戦後のように、失業者が街にあふれるようなこ

とになれば大きな政治問題ですから、何としても防
止しなくてはならない。

—— リストラをすれば企業の評価になる。株価にも
反映する。その反面、失業者を出さないようにしな
いといけない。ジレンマを感じませんか。かつての
米国に比べてまだ手ぬるいとする声もあります。

奥井 持論ですが、僕はアメリカ流には反対でね、
市場経済主義偏重の風潮はどうも。ROE（株主
資本利益率）にしても、どこが高いとか低いとか、
とアナリストがランク付けしたり。あれはアメリカ
のユニバーサルな哲学ではないと思う。仮に、50億
円儲かっている会社が、さらにリストラをしてROE
Eを高くしても余り意味がないですよ。

日本の雇用の特徴は、終身雇用・年功序列・企業
内組合—の三つ、これは、長年にわたって築き上げ
た日本に適したシステムなんです。慶応義塾大学の
先生が「日本人には不安を感じる遺伝子を持った人
が多い」と書いているが、安心させて働かせるのが
日本の雇用、労働システムなんです。「日本的な経営
の良さは残し、悪い所を直していけばよい」とドラ
ッカーも言っているが、まさにその通りですよ。

—— 潜在失業者は200万人とも400万人とも言
われていますが、産業界一般としてリストラはまだ
進む、と考えていいのでしょうか。

奥井 その通りだと思います。ただ、リストラよし、
の風潮があるが、自然減なんですね、実態は。自然
減でなければ希望退職を募るとか。うち（積水ハウ
ス）は99年の春、800人を新規採用しましたが00
年は600人、それだけで200人の減です。設備
投資でもそうですが、過剰になったり不足したり、
経営の傘の中で繰り返しながら調整してきたこと
です。雇用もそうですよ。それを、ことさらリストラ、
リストラと強調することはないですよ。

我々は、狭い意味での書齋派から
社会派へ確立し、研究成果を
還元せざるを得なくなってきました。



▼関西の課題…「活性化には視点を変えて」

——関西の失業率は、とりわけ悪い。平均を約1ポイント上回っています。

奥井 失業率の悪さは、地盤沈下を反映しているわけですが、関西の地盤沈下、活性化を妨げている第一の原因は、東京一極集中主義にあると思います。経済、政治、文化、情報…全部ですよ。大阪は明治以来第二の都市でしたが、今や、東京以外はみな地方都市。大阪も、名古屋も鹿児島も。これを打破するには、地方分権です。基本的には、日本の経済構造を変えないといけないが…。これは、ある人の受け売りですが、サミットを大阪で開催するとかオリーブピックを誘致するというが、それは一時のお祭り

騒ぎ、だと。首都圏を関西の近くに持ってくる運動も必要になってくるでしょうね。

本間 高度成長の最大の犠牲者は関西だったと私は思う。都市として東京と競争性があるような状況の中で、本社機能が（東京へ）出て行くとか、地方交付税で税金を吸い上げられるとか、都市としての制約を受けてきたように思います。それはさておき、会長がおっしゃったように、今後は、地方分権を政策的に取り組むよう強く主張していく必要があります。その際には大学の高度な研究機関としての集積度を取り込んで、総合的な地域力向上に努めることが最も重要だと思います。大学の役割は、ここにもあるんです。

——前から言われていますが、地域力というか、関

西のコアが落ちてきている。新聞の経済記事も関西からの発信が少なくなっています。新産業創出についての提言を。

奥井 ここ当分は、東京一極集中は止まらないんじゃないかな。我々のように、関西に本社があっても、(私らは)月の3分の1は東京にいないと駄目なんです。ですから、長期的には観点を変えて文化、教育の面で特長を出していかざるを得ませんね。幸い、関西には文化遺産が多いですから、それを活用すれば、ある意味での新産業創出に結び付くかもしれません。新産業創出も方向を誤つては駄目ですね。例えば、関西に工場を造るには土地が高いから、九州へ行く。極端に言えば、東南アジアへ行つてしまふ。関西での産業創出には無理がある。産業のソフト化をしないと。

本間 関西は、高密度、高集積で生産性を高めていくという従来型のやり方でなくて、これからは、むしろ、技術の変質に合わせて、高度の情報拠点としてどんなコアをつくれるか、高いネットワーク社会を形成できるかを、志向する必要があると思います。キーワードは、高度情報と生活。最後に文化、伝統を総合的にうまく生かした集客力を持つ地域に、どう高めていくかですね。従来型の港湾、道路、空港；といった没個性的な企画にかけたお金を総合評価し、関西広域連携の中で、どのように経済的につなげていくかを戦略的に、他の地域に先駆けて、つくり上げていかなければならない。生活を基盤に再構築をしていく必要があります。

奥井 阪大は貴重な情報発信源ですから、それを、もっと高めてもらいたい。そして、教育産業という新産業の創出があってもよいと思っています。大学の影響力は大きいですから。我々、経済団体としても関西の活性化を日ごろから念頭においてやってい

るが、阪大はじめ関西の大学の動きによって大きく変わると思うので、阪大の先生方には、もっと社会に出て提言、啓発をお願いしたいですね。

本間 一部(の先生)を除いて社会的にコミットすることはしなかったが、学問が多様化し、現実とセツトになった形の領域が増えてきています。我々は、狭い意味での書齋派から社会派へ確立し、研究成果を還元せざるを得なくなっています。

奥井 日本の政治を動かしているのは大学の先生方だと思えますね。大蔵省の審議会に出席していても分かりませんが、大学の先生方が官僚に提案して受け入れられることが多いようです。日本には大学尊重の気風がありますし、大学の社会的活動は高く評価されている。本間先生を見てもそれを感じます。





▼産学連携と阪大への期待：
「個人の能力、内性的なエネルギーを
ビジネスの場に」

——新産業創出のカギの一つは産学の連携。大学の研究機関の成果を産業界に移転するための技術移転（TLO）が動きだしましたが、産学連携についてはいかがでしょうか。

奥井 率直に言って、うまく行っていないですね。業界によっても違うかもしれないが、米国のように産産を大学に寄付すると免税になる特典が日本にはないなどシステマ的な問題もあって、どうも。それと、企業も独自の研究はしているが、どうしても自分に役立つことしかしないですよ。本当の意味の技術革新的なものには大学に期待するところが大きい。そういう意味でも産学連携をもっと緊密に強めていかなければいけない。

——産学連携を妨げているものは？

本間 一つは、狭い意味での研究至上主義的な考え方、業績主義的なところがあり、社会に貢献するスタンスが少なかつたと思います。しかし、基礎的な研究では、バイオやデジタル技術の問題にしてもシステム自体を大きく変換させるところがあっ

て、米国の持つダイナミズムと戦略性に、どのようにキャッチアップして具体化していくか、大学側の果たす役割は大きくなっているし、我々も意識を持ち始めました。今までは、兼業規定の問題もあって、コミットも個人レベルで、システムとして全体に波及しなかったが、これからは個人の能力、内性的なエネルギーをビジネスの場に花咲くような仕組みを作っていくかといけません。大学としても技術革新、システムの変革が進んでいる今、研究機関、啓発機関として、さらに社会的な媒体機関として機能せざるを得ないところに来ています。

——具体的な取り組みを。

本間 2001年で創立70周年を迎える大阪大学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとしてきましたが、地域に生きていくために、医学部の跡地に中之島センター（仮称）の建設を構想中であり、中之島センターは「平成の懷徳堂」あるいは「平成の適塾」といったような観点で、大阪大学の大阪市内におけるエクステンションとしての役割を果たすようなものにしていきたいと考えています。物真似では社会の流れは止まらない。文化、生活面で総合大学としての大阪大学が、地域とどのようにかわっていくか、反省も含めて取り組んでいきたい。

日本の大学—— 「何をしたいか、何ができるか？」

大学のあり方が問われている。勉強しないと言われる学生、学力低下が問題にされ、大学で何を学ぶのか——の疑問符まで付けられている。
そうだとしたら、どう改めていけばよいのか。ハーバード大学などで客員教授を経験し1997年から東京大学教授を務める建築家の安藤忠雄さんと、
免疫の研究では世界のトップランナーである岸本忠三・阪大総長に
「日本の大学」について語っていただきました。

●対談

- 建築家／東京大学教授
安藤忠雄 ————— *Tadao Ando*
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— *Tadamitsu Kishimoto*
- 司会 中島耕治・毎日新聞学芸部長 ————— *Kohji Nakajima*



【阪大ニュースレター No.6】1999／冬号 掲載
1999（平成11）年12月1日発行



学力とは知識の量でなく
考える力の意味、知恵のことです。
知識はあっても知恵がないと
社会には役に立たない。



安藤忠雄氏

▼大学に入ったら力が尽きてしまう

—— 大学生について、いろいろな指摘されています。何が問題？

安藤 大学生の学力が低下していると、よく言われる。しかし、平均的な知識レベルは高い。個人差があつて一概には言えないが、突出した人が少ない。**岸本** バラエティーに富んでいない、ということでしょう。大学入試センター試験の影響もあるのではないかと思います。ここまでは東大、ここからは阪大と輪切りにして、行きたい大学へ行けなくなつた。**安藤** センター試験の前が共通一次学力試験、それ

から学生を仕分けしてきた。1番は東大、2番は阪大。同じようなレベルの者が一緒になっている。似た者同士、強弱も、変化もない。刺激もない。学生たちにエネルギーがないのはそのせいもある。学部によっては東大でなく九大であつてもよいのに。僕らの若いころは、医学部といえど阪大でした。個性のある人材を育てよと文部省は言うが、目標を立てて好きなことをしていく人ではないと個性は出ない。**岸本** 偏差値で決められて、問題がありますね。こんなことをやりたい、と目的意識のしつかりた学生は、ちよつとぐらいい入試の成績が悪くても、大学が受け入れるようなテストの仕方に変えて行く必要があるんじゃないですか。

安藤 幼稚園から塾通い、勉強しすぎですよ。それで、大学に入ったら力が尽きてしまう。学問は生涯続くと言われるが、そのスタートラインである大学に入ったら勉強はストップ。一流大学に入学したら成功、親もまるで名作でも出来上がったように思つてしまう。アルバイトもいいが、大学では真剣に勉強することです。自分の選択した学問で一生やって行けるかどうか見極めるぐらいに。

岸本 大学は知識を詰め込む受験勉強と違っているんな勉強が出来て、学問をすることは楽しいんだ、ということをおつかつてもらおうと入学してきた学生を対象に「知性への誘い」というタイトルで素粒子や考古学や生命科学のトップが入学記念講義をしたが集まりが悪い。そんな話を聞いても単位にならないとか、正規の授業ではないから、というように考える学生が多いんです。入つてしまえばそれでええ、ということなんだと思う。欧米の大学は、成績のほかに面接をして何をしたいかなど学問に対する学生の考えも聞いて、特色ある人を集めている。授業も厳しい。入れば卒業できる、というわけにはいかない。

学問は産業のように前もって計画が立ちません。
好きなことを好きなようにやらせておけばよい。
創造の世界には思いがけないところに
思いがけない発見があるものです。



岸本忠三 総長

▼決められたコースを 決められたとおり進んで行く

—— 阪神・淡路大震災のとき、被災地の子供は元気だった、と安藤さんが話されていましたが、今の教育に通じるものがありませんか。

安藤 避難地で大人の手伝いをしている子供は生き生きとしていました。学校は休みだし、勉強しなさい」と親に強制もされない。人間、規制から離れ

安藤 一流大学から一流企業に入り、定年まで終身雇用。その間に厳しい自己鍛練や努力が必要でないシステムになっている。そこには本当の意味の競争の原理は働かない。競争原理が無いと頭も冴えませんが。国際社会に通用する教育システムではなくなくなりました。

て初めて新しい発想が生まれるものです。子供は親の過大な期待に精神が圧迫されている。

岸本 学生は今、騒いでもいいような法改正が国会で問題になっていても関心を示さない。僕らの頃は国会議事堂に行つて日本が変わるのではないかと思うほど騒いだけど。何が大事か、どう生きるか、など考えないんですかね。決められたコースを決められたとおり進んで行く、というのが大勢を占めるように感じますね。

安藤 国家や政治については考えないが、どういう会社に行くかは考える。親は子供が疑問を持たないように育てた。子供もその通りに育つた。だから学生は自立心がないし、教えたら覚えるが、教えなかつたら考えない。考える力がなくなつた。学力とは知識の量でなく考える力の意味、知恵のことです。

良い大学から良い会社に入れば安泰、
という考え、図式は崩れてきている。
これからは大学に関係なく、
何をしたいか、何が出来るか、が問われる方へ
間違いなく流れが変わっていくと思います。



知識はあっても知恵がないと社会には役立たない。
岸本 大学案内も中学生や高校生、母親の目線に合ったものをつくらないといけない。こんな面白い質問ができますとか、こんな人が育っています、こんな分野で将来活躍できますなど、よく分かってもらせる内容に工夫する必要があると思います。
安藤 家庭教育にも問題がありますね。生命力がない学生が多いのもその一例。生命力とはこれをやりたい、こう生きたいという強い意志のことですが、これは親の責任でもある。しつけや物の見方、考え方を教えないければならない幼稚園から小・中学校の頃に、親は子供にそのことについて話をし、言い聞かせる時間が少ないのですから。塾へ行かせておれば安心では、親の務めを放棄しているのと同じですよ。

一番気になるのは、前にも言ったが、小さい時か

ら勉強をしすぎることに。子供の時に、自然と共に生きることを学び、犬や猫と生活して命の大切さを知り、命への慈しみを覚える。おじいちゃん、おばあちゃんが側にいて、人間は歳を取るんだ、ということを感じる。人間は人間になる順番があるのに、人間になっていない。大学に入ってくる学生を見ていて、これで大丈夫かな、と思うんです。人間として根源的に持っていないなければならないものは感性だと思いが、その感性を豊かに養う時期である幼稚園から小学校の頃に知識勉強ばかり。感情や疑問がないのに怒りや悲しみは出てこない。感情や感性のないまま成長するとどうなります。外科医でありながらメスを持つのが怖いとか、我々の建築でも現場でドロドロした土を持ってない者がいる。土で靴が汚れると、ウロウロするんです。

▼必死にもがいているのが エネルギーになっている

——独学で建築を学び、20代に船でヨーロッパを旅したり、安藤先生は若いころからさまざまな体験をされた。
安藤 家庭の経済力不足と、僕の学力では阪大や京大に入れなかった。大学へ行かなかったのではなく、行けなかったのです。独学の道もたまたま。設計をしたから勉強しないといけない。通信教育でも学びましたが、大学と同じ建築学科の本を読みました。学校と同じように、1年間でこれだけは読もうと決めて。理解できなかつたが読み切ったですね。しかし、社会は認めてくれなかつた。学校と違って卒業がない、終わりが無い。それと大学は卒業して成功すると先輩や同窓生とか周りで支えてくれる人がいますが、僕はそれが無い。頑張らないかん、と必死でもがいている。それがエネルギーになっているんです。



人間は人間になる順番があるのに、
人間になっていない。
大学に入ってくる学生を見ていて、
これで大丈夫かな、と思うんです。

▼流行を追っても
流行をつくった者を追い越せない

岸本 大学へ行くよりエネルギーが要りますね。ところで、建築家の評価は日本でつくられるものですか、世界からの評価が先ですか。

安藤 基本的には外国の方が評価してくれました。岸本 我々、医学の世界もそうですね。世界に向けて論文を発信する。認められれば評価として跳ね返ってくる。日本には遅れて入ってくる。

安藤 日本は西洋の社会に目を向けているが、そろそろ日本独自の価値観を持たないとね。

——総長が医学の道に進まれた動機、なぜ免疫を？

岸本 小学校の時に野口英世に憧れ、それで、医学なら阪大、とごく自然に。私が卒業したころの医学の中心は内分泌学でした。ほぼ頂点にきているとい

う感じで、その内分泌学だと人の後についていくだけや、と免疫を。免疫は当時日本に学会もなく、まだよく分かっていなかったですから。

学生にも話をするのですが、欧米の流行を追っ掛けるだけではあかん、と。日本は往々にしてブランド志向ですが流行を追っても流行をつくった者を追い越せません。流行にとらわれないで、好きな研究をする。国には十分な研究費を出してもらおう。その代わり、報告はきちっと行う、というシステムにしておけばよい。学問は産業のように前もって計画が立ちません。好きなことを好きなようにやらせておけばよい。創造の世界には思いがけないところに思いがけない発見があるものです。

——特異な才能をどうやって伸ばしていくかは難しい。

岸本 さっきも言ったように欧米では競争の原理がちゃんとして、やりたい人がその人の好きな研究をする。その中からいいものが出てくる。そうした基盤、システムをつくらないといけない。よい意味での競争原理が働けば、必死になるから能力のある者が出てくる。アメリカの有名私立大学でも国からの研究費は大きな部分を占めている。しかし同じ国の予算でも決まった額が大学に支払われる日本のシステムと取り方が違います。学問の世界はシビアな競争があつていいんじゃないですか。

安藤 能力には上下はないですから。イェール大学やハーバード大学で(客員教授をして)建築を教えながら、学生は先生をファーストネームで呼ぶんです。僕はどうも調子が悪いですが。

岸本 一人の人間を個人として尊重、日本のように「総長」とか「社長」とか職名では呼ばない。日本はその地位をレスペクトしてらるんであつて、極端に言えば、そのポストには誰が座つてもよいということです。(日米の)個人と組織の関係がよく表れてい

ますね。

安藤 日本は言わないことを美德とされるところがあがるが、外国の学生は自分の意見をしっかりと言い、先生もしっかりと答える。考えに違いがあれば、どこが違うのかを確認し合っている。先生が教えて生徒がそれを筆記して覚えていく日本と違って、厳しいですよ。そして、先生は半期の講義のテーマを公表し、生徒が内容で選択するんですが、学生が集まる講義もそうでない講義もあってシビアです。評判が良くないと学部長に「あの先生はつまらん」などと言いにいく。それでお払い箱になることもありまますから先生も必死です。

岸本 うまく回転すれば、先生も自分の評価が分かり、頑張るので良いことなんですが、日本はそれが緩い。立场上、あまり言えないが。安藤先生も東大の教授なんですけど、

▼特色ある先生を世界から 阪大に連れてこられるようにしたい

—— 阪大を開かれた大学、特色ある大学へ、と総長は大変努力されています。具体的にはどんなことを。
岸本 突出した研究をしている人とか、特色ある先生に来てもらうことで学生も集まってくる。大学が求めるそんな仕組みづくりを考えているのです。外国の大学ではよくやっているんです。

安藤 大学の先生も例えば、東大から九大へ、というように自由に交流が出来ないんですか。

岸本 大阪大学の場合は、例えば経済学部はそうなっています。医学部の教授も基礎医学は半分近くは他の大学の先生ですよ。日本に限らず、世界から連れてこられるようになればと思っています。そうしたシステム特色ある先生を早く見いだして。そうしたシステム

ができてくれば、自然と全体の制度も変わってきますよ。

安藤 今の国立大学のシステムでは、外国の先生を呼んでも宿舎がない。自分の給料で賄っていくのは難しい。客員教授の制度をつくって国際的な先生に3年とか5年来てもらって教えてもらう。学生はアジアの先生に学べばアジアが近くなる。ヨーロッパの先生に学べばヨーロッパが近くなる。学生の頃から交流しないと国際社会についていくにはしんどいですね。日本の総合商社は世界に強いといいますが、それはビジネスの交流で、本当の人間の交流はしていない。文化、教育、芸術の面から交流をもつと思うと日本もグローバルな世界に出ていけると思うんです。でも、今は難しい。

岸本 大阪大学は少なくとも学生の1割、教官の1割が外国人であるようになればよいと思います。大学が生き残るにはそれぐらいは必要。少子化といっても世界からみると需要は、なんぼでもあるわけですよ。オーストラリアは、その点、努力して外国から迎え入れている。日本に来て学べば母国に帰っても日本を大事にしますから、それが交流になる。留学生は未来の大使といいますが、その通りやと思います。国も宿舍の充実等留学生交流などにもっとお金をかけんとね。

▼幅広い人間をつくるのに大学が必要

—— 遺伝子の解説が進むなど医学の分野も大きな過渡期。その反面、人間が忘れられがちな時代になっています。社会全体がターニングポイントのようにも思われます。

岸本 21世紀は生命科学といわれるが、遺伝子組換え食品やクローン動物が話題になっている。SFでなく、受精卵の一部の遺伝子を変えて頭のよい子供

が出来るいわゆるデザインベビーの時代が来るかもしれない。30億年続いていた自然の生態系が人間の力で一瞬にして変えられてしまう危険性ははらんでいる。現実にはそうなると、どうなるかは皆で考えていかなければならない。知識はどんどん進む。だからこそ、人間の知恵ははぐくむ教養教育が大事になってくる。先端技術の部門だけをやっていては駄目で、医学も文学も幅広く知っておくことが物事を判断するのに重要になってくる。幅広い文化を持つ人間をつくるために大学が必要。その際、基礎知識は学部で、先端部門は大学院で、と棲み分けが出来ればと思うんです。

安藤 デジタル化は進んで大変な速度で広汎な知識は得られるようになったが、デジタルを生かすのは人間です。情報化社会の落とし穴はそんなところにあるのでは。デジタルだけで事が済むと考えるのは間違っている。建築の世界もデジタルとアナログがあるが、創造的な分野を担うのは人間、アナログ。デジタルとアナログがぶつかり合って、社会が今後、どのように変化していくか、学生もしっかり考えないといけない。センサー試験だけよければ、後はうまく行く、という時代ではなくなった。社会の変化に学生は敏感になってきているが、意識を変えるのは難しい。
岸本 確かに、良い大学から良い会社に入れば安泰、という考え、図式は崩れてきている。これからは大学に関係なく、何をしたいか、何が出来るか、が問われる方へ間違いなく流れが変わっていくと思います。広く世界の人と交わり、地球レベルでの体験をすることはこんな考えをする人もいる、こんな生き方もあるということを知ろうえにも大事なことから、若い人たちは海外にもどんどん出て行つてもらいたい。

産＋学、トップが語る—— 「いい街といい大学」

いい街にはいい大学がある——。この関係を大阪と大阪大学に置き換えてみるとどうなのか。「産」と「学」のトップである秋山喜久・関西経済連合会会長（関西電力会長）と岸本忠三・阪大総長に、「いい街といい大学」をテーマに現状と課題、今後について語ってもらった。「我々は100年先を考えて研究しなければならない。そのための大学の壮大な無駄を」。理解と支援を求める岸本総長に対し、秋山会長は「大学があって産業の発展がある。大阪の再生のために一緒に頑張りましょう」と共存共栄をアピールした。

●対談

- 関西経済連合会会長（関西電力会長）
秋山喜久 ————— *Yoshibisa Akiyama*
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— *Tadamitsu Kishimoto*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞経済部編集委員 — *Satoru Watanabe*

【阪大ニュースレター No.7】2000／春号 掲載
2000（平成12）年3月1日発行





——まず、秋山会長に関西経済から実態をお伺いします。

秋山 日本経済の中で、関西の位置付けを量的な面、GDP比率で見ると1965年に全国の20%だったのが今は16%台にまで落ち込んでいる。地盤沈下はこのことを指している。経済が成長している時は、GDP比率は下がっても関西の一人一人の所得水準は、緩やかではあるが増えている。ところが、最近のように低成長が深く、長く続く中で地盤沈下すると一人一人の所得の絶対的な水準が落ちてくる。このまま推移すると非常に厳しい。政令指定都市の人口が増加しているのに大阪は減少している。日本全体が都市化が進んでいる中で、いかに、魅力のない街、住みやすい街になりつつあるかの表れ。街の衰退は経済の衰退にも関係している。

岸本 日本の大きな都市に国立大学がないのは大阪市だけでは。高度経済成長時代には多分、大学はどこにあってもかまわない、という考えだった。アメリカは大学があつて街が出来て、その周辺にはベンチャーも企業も集まって栄える。いい頭脳、若い人の集積もできる。いい街にはいい大学——というのがそういうことで、大学の集積効果は大きい。それが郊外へ出てしまった。

——大阪に対する市民の意識は？

岸本 私は阪大を出て、九州大学の助手になりましたが、福岡では、「九大の先生ですか」とレスペクトがある。大阪は少ない。京都と比べても、京大の学生さんは、街の飲み屋でも大事にされるのに、大阪はそうではないと言われます。だから、京大はキャンパスを市外へ移らないで、街の中で第三キャンパスを見つければいい。

しかし、大阪大学も学校が出来た時はそうではなかった。関西には京都大学があるので、なぜ、と時

の政府に反対され、財界の人たちがお金を集めて陳情し、議員立法で大阪大学をつくったようです。大学への思いが庶民の間にはあつたが、段々とレスペクトする率が少なくなつてしまった。そんな感じがします。

——関経連が99年12月に打ち出した関西経済再生プランと阪大の位置付けをどのように考えていますか。
秋山 都市の過密化が社会問題になったところ、人、物、金が集まることは悪いという前提で、過密化を防ぐための工場制限三法ができ、エンジンキーである工場、大学が街から出て行つてしまった。その結果、大阪の出荷額は減少した。これが衰退の一番の要素でもある。アメリカのマサチューセッツ州が経済危機に陥つたとき、教育法を変えていい人材を育て、いい人に街に残ってもらうことで産業を復興させた。関西にとつて今、大事なことは学校の知恵と産業界の知恵が交流を深めて産業を育成していくことです。

そのための「住みよい地域」をつくりあげるためには、地域の文化を大事にすること。文化のないところに人は魅力を感じません。次に、「面白い社会」言い換えると、大学との交流を深め知的冒険が出来る街をつくること。その上に立って「強い産業」を育てる。このような発想で再生のプランをつくりあげました。

岸本 江戸時代をみても、大阪には米屋敷、蔵屋敷がたくさんあつて経済は栄えたし、井原西鶴や近松（門左衛門）、文楽という大阪特有の文化が栄えましたね。文化が先か経済が先かは別にして、相乗効果だと思えます。産業界は物やお金につながる直接的なことをし、大学は大きな無駄をしながら、無駄の中から役に立つもの、思いもかけないものをみつけていく。産学連携も、同じ方向を向いて行うのでな



秋山喜久氏

企業にとって大事なことはコミュニケーションです。
自分のやっていることを他の人に理解してもらう。
他人のやっていることも自分が理解する。
このことが大事。

く、違った二つのものが共存し合って発展するもの。
その間を国立の研究所とかベンチャーがつかないで、
うまくファンクシヨン（機能）していけばよい。
秋山 産業界としては、まず、国際的に通用する人
づくりをしてもらうことが何よりです。そのうえで、
先生がおっしゃった、基礎的な研究を地道にやって
いただく。昔、セルン（ヨーロッパ諸国の共同出資
による原子核・素粒子物理学の研究機関）を見学し

た際、「この研究は何に役立つのか」と聞いたら、
「何に役立つかわかんから基礎研究で、それに金
をかけるのが大事なんだ」と言われました。

岸本 そういう意味で、大事なことは、（大学の研究
には）金を出すのが口は出さない、という姿勢で支援
してもらいたい。今、コンピュータやバイオなど先
端技術の部門に関心が集まっていますが、それらは
50年前、100年前のDNAの発見や量子力学が今、
役に立っているものだと思います。我々の仕事は、
次の50年、100年先に役に立つことを考えて研
究することです。そうしないと、先人の財産を食
いつぶすことになる。大学の壮大な無駄はそのための
もの。産業界の方々にも認識していただきたい。

——優れた基礎理論、基礎研究こそ真のオリジナリ
ティーがある——が岸本先生の持論ですが、それを
実践されておられるから先生の言葉には非常に重み
を感じます。

秋山 ニューエコノミーと称してアメリカが成長を
遂げているのは過去の実績、蓄積の結果です。長い
目で見ないと、基礎研究も長期的な発展につなが
らないということですね。

岸本 そうなんです。しかし、多くの人にこのこと
を分かってもらわなければ、何してんねん、と世間
から批判を受けます。ソツポを向かれます。です
から、大学はこんな研究をしている、研究すること
はこんな大事なことなんです、と情報を発信して理
解してもらわなければならない。もう一方で大学に
求められているのは、そのことだと思います。

秋山 どちらかと言えば、産業界は応用研究の分野
ですが、いいシーズがうまく産業化されていない面
があります。スタンフォード大学とかハーバード大
学の先生は、私学ではあるが、半分は学校にいて、
半分は実社会に出ている。この間、お会いしたスタ

基礎研究部門には、国も企業も金は出すが、
口は出さない方がよいと思う。
シーズを具体化していく川下の部分では、
もっと連携を深めないとせっかくの成果が
世の中に生かされない。



ンフォード大学の先生は三つの会社の社長をしておられた。自分たちの研究したシーズが世の中のニーズにどう応えているか、そして、変化する世の中のニーズの中から新しいシーズをつかもうとしている。基礎研究部門には、国も企業も金は出すが、口は出さない方がよいと思う。しかし、シーズを具体化していく川下の部分では、もっと連携を深めないとせっかくの成果が世の中に生かされない。

—— 国立と私立の違いはありますが、総長の裁量の範囲でアメリカのようなことは可能でしょうか。

岸本 医学部の先生が、遺伝子治療のためのベンチャーをつくるのにノウハウを提供していますし、LSI（大規模集積回路）の研究・開発のためのベンチャーの会社を産学連携で立ち上げた先生もおります。基礎でも応用でも、やってもらって結構ですが、コンピュータやバイオなど流行のものだけに日が当

たつて、哲学や数学、物理学や文学がさびれてしまったら大学は駄目になります。全体のバランスを保ちながら100年先にひよっとしたら何かが生まれるかもしれない、という分野も守っていかねばならない。

生命科学の分野でしたら、遺伝子暗号の解読が進むことで、馬の筋肉と人の筋肉の一部を入れ換えて、オリンピックで金メダルが取れるような選手や頭のいい子供もつくれる。しかし、我々は、30億年も永々と続いている人類の一時をつないでいるようにない。一瞬をリレーしている間に人間を変えるようなことをする権利はないと思う。ものすごい頭を持った人ばかりをつくっていけばどうなるか、ですね。

—— 自然科学の根底には哲学とか、ヒューマニティーズがなければならぬ、ということですか。

岸本 将来、どうなるかわからないものも先端科学と同じようにやっていかないと駄目です。それが先程から言っている壮大な無駄、ということですが、

秋山 壮大な無駄を決して否定するものではないが、企業にとつて大事なことはコミュニケーションです。自分のやっていることを他の人に理解してもらう。他人のやっていることも自分が理解する。このことが大事。そのためにも歴史を勉強し、人間とは何かを理解する。今は哲学、文学より理工学、経済学部などが前に出てしまっているが、この発想を変えないと、企業も基礎研究もうまくいかないと思う。

岸本 僕もそう思うんです。大学4年間の学部教育では文化など教養を身につけ、大学院で専門分野の知識を身につける。医学の世界でも、世界の人たちと話をするときには音楽の話も、美術の話もできる素養が求められる。それが日本には少ない。最近の学生には特に、そう感じますね。センター試験では難しいことはやっているのに…。



岸本忠三 総長

我々の仕事は、
次の50年、100年先の人に
役立つことを考えて研究することです。
大学の壮大な無駄はそのためのもの。

秋山 チップ（IC）であれば、ほんのちよつとで記憶できるものを一生懸命記憶しているわけです。それよりも、人間の情緒とか判断力を勉強する時間が少ないのはおかしい。

岸本 企業も、これからは深い専門と広い教養を持った人を求めるでしょうね。

秋山 専門性と広い人間性を兼ね備えた人ですね。

——シカゴ大学へ99年、その前年にはハーバード大学へ関西経済界の方々に同行して行ってきましたが、キャンパス、学生から学ぶ楽しさ、真剣さのようなものをひしひしと感じました。午前1時まで図書館が開いていて勉強している。そのすぐ側のパブでは学生が談笑している。こうした雰囲気、光景は日本の大学にはありません。

岸本 学生がたむろして談笑する場所が（国立）大学にはないですね。私立はあるようですが、とこと

ん勉強する姿勢も少ない。非常に厳しい競争社会でなく、ある程度、まあまあで許されるところが日本にはあるからでしょう。良い面でもあるが、ある時にはぎりぎりの所で競争してみることが必要。大学はそういう場所ではなくてはならない。

秋山 アメリカはハード面とソフト面で大学がコミュニティの中に入っている。逆に、コミュニティは大学を中心に出来上がっている。街の中に溶け込んでいて、一体感があるんです。日本では、ここからは学校でここからは街、と境界線がはっきりしている。マサチューセッツ州の企業はできるだけ地元大学の卒業生を受け入れる。それで学生は集まってくる。卒業式も街の一つの行事、お祭りのような感覚ですから、市民も式に出席するんですね。

岸本 街が栄えるために大学が重要である、という意識がみんなにあるということです。誰かの言葉に、「一国が栄えたとき、そこには世界の先端を行く大学があった」とありますが、そういうことだと思いません。日本にはあまり定着していない。関経連の再生プランにも先端医療の研究開発促進を重点項目に入れてもらっていますが、21世紀は心の豊かさとは違った意味での豊かな社会、街が求められるのでは。

秋山 それに、向こう（アメリカ）は、一生懸命勉強した人が報われる社会になっている。知的挑戦を受け入れる雰囲気もあります。だから、アメリカの発展がある。

岸本 日本の産業界も、そう変わって行くでしょうね。

秋山 これからは平均的な人を採用するのではなく、挑戦をしたいという人をどう探っていくかでしょう。失敗を恐れない、前向きな社会をつくっていくかなければならない。大学のあり方も大事になってきます。

——最近の報道や関経連の再生プランにも、交通の便のよい都心に衛星型の小さなキャンパスを、という構想が出ています。

岸本 これからは社会人もリフレッシュしたり、文化を身につけることが大切になる。勤め帰りの人たちの勉強する場として大阪大学も街の中へ出ていくことは良いことです。その最初のステップとして、医学部の跡地に中之島センター（仮称）を建設する構想がある。ここに大学の知的なものを持つて行き、大阪の活性化に役立てればと。そして、将来的にはサテライト的なキャンパスに波及すればよいことです。

——産業界はどう関与されるお考えですか。用地と資金の問題もあります。

秋山 じっくり教育するのは郊外のキャンパスですが、街の活性化と社会教育には街の中でのいう意味ではもう一度、街のなかに大学を復活させることは良いことです。冠講座やコミュニティーカレッジ的なものによればよいのでは。企業の中でも再教育、

社会人教育が大変、重要になってきますから。

これは、最近の統計ですが、わが国でインターネットを利用している層は20代、30代に集中していて45歳以上は急激に低い。企業でインターネットの使用について権限を持っている年代の利用者が少ないということ。これも、再教育をしないと、インフォメーションテクノロジーといっても前に進みません。

——関西は東京に比べてコミュニティー的にも再構築しやすいかも。規模もまとまりなどからみても。

秋山 50^{*}圈内に1500万人が住んでいる関西は、東京のように単一の方向性ではなくて、大阪、京都、神戸、奈良とそれぞれの都市が個性と特徴を持っている。互いに切磋琢磨して共同的な地域として発展していけば、これからの時代、ネットワーク社会にマッチしたものになる可能性が大きい。グローバル化の時代とは個性を持つこと、その個性をいかに活用、利用するかです。そういう意味では関西の時

代ということになります。

——最後に、大阪大学に期待するものを。

秋山 先生がおっしゃったように、大阪大学は市民の力でつくられた大学で、市民と共に歩んできた。これからも一緒に歩んで行きたい。国立ですが私立的な要素も強めていただいて、大阪の発展のために一緒に手を携えてやって行きたい。関経連の中には大阪大学後援組織がありますし、我々も交流を盛り上げていきたい。

岸本 ありがとうございます。先にも言いましたが、ポストンがニューヨークやワシントンとは違った香りを持っているのは、ハーバード大学があるからで、大阪大学も大阪の顔としての役割を果たさないといいけない。我々としては突出した研究を世界に発信して、大阪を世界に知ってもらうことです。多くの人に知られることは、長い目で見れば大きなプラスになる。そういう観点からも大学は重要。産業界と大学が一体となるのが関西の、大阪の復活にもつながると思うのです。応援をお願いします。

大阪から世界へ 「何を発信できるか…」

大阪ルネッサンスは阪大との連携で

都市の空洞化が止まらない大阪。
街に活力を取り戻すにはどうすればよいか…。
世界の大阪、を標榜する太田房江・大阪府知事、
いい街にはいい大学がある、が持論の岸本忠三・大阪大学総長。
お二人に、「大阪ルネッサンスは阪大との連携で」をテーマに、語ってもらった。

●対談

- 大阪府知事
太田房江 ————— *Fusae Obta*
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— *Tadamitsu Kisbimoto*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞大阪本社経済部長 — *Satoru Watanabe*



【阪大ニュースレター No.8】2000／夏号 掲載
2000（平成12）年6月1日発行



大阪は日本で2番目の都市、
というのもうやめて、
世界で何番目の都市・大阪へと
発想の転換をしないと。



太田房江氏

——経済効率からみて、大阪から企業が出ていくのは仕方がないとしたら、それに代わる、何かを創出しなければならぬ。その際、大学をどう巻き込んでいくかという視点が重要だと思います。そこで、太田知事に伺います。大学を、阪大をどう見ているのか。街づくり、地域づくりの観点から。

太田 大学にもいろいろ色彩があります。象牙の塔にこもっていたり、実学に熱心であったり、さまざまだと思います。典型的な例は東北大学。西澤（潤一）前総長によって随分、変わりましたね。大学も地域も。GDPに占める比率までは分かりませんが、地域に極めて大きな役割を果たしておられる。大阪で言えばそれは阪大。大阪を変えようとするれば、阪大の力がぜひとも必要。幸い、実学の大切さにもご理解のある岸本総長がトップについておられるので、大阪を変えるチャンスだと思えます。東北よりもっ

と大きな波を起こすことができれば……。

——西澤先生の存在は実に大きい。シベリアとの学術交流も出ていて、ローカルな大学としてでなく、世界にも発信している。

岸本 大学に身を置く人間ということではなしに、（一般論としても）街にとって大学は大事。なかでも一番大事な人は人です。東京へ集中する傾向がありますが、例えば、関西の大学の学生は、どの大学の講義も自由に受けられるようにするとか、若い優秀な人を集める仕組みが必要。産業界とも連携し、そんな受け皿づくりの仕掛けをしなければならぬ。東北大学もそうだと思いますが、阪大も長岡半太郎・初代総長や八木秀次・第4代総長のように日本の経済にも大きな影響を与えた方々がおられた。こうした先人たちによって築かれた伝統や流れがあつて今日の阪大がある。阪大があつて大阪がある、というようにならないといけない。

太田 最近、一橋大学と東京工大などが連携して大学教育の充実を図ろうという動きがありますが、制度的にみて、魅力的なことですね。

岸本 大学の一番のメリットは、毎年学生が入ってきて、社会に巣立って行くこと。若い人の流れ、活発な動きが常にあるということです。「大学がなくなると駄目になる」、と地方の都市が危機感を持つのは当然のこと。大阪も地盤沈下がよく言われますが、大阪は東京の小型であつてはいけない。言葉も違う。駅のエスカレーターだつて通過する人のために右を開けるか左かは所によって違う。多様であつてええやないの。ユニークさを発揮することですよ。いろんなものが混じり合うことが肝心なことです。

太田 おっしゃる通りです。（選挙を戦つて）痛切に感じたことは、「東京に負けるな」「東京に勝つて」というこだわりでした。大阪はこれで金縛りになつて



岸本忠三 総長

世界が評価したら日本でも評価してくれる。
世界にユニークなものを発信しなければならない。
本当の学問、フロンティアとなる学問を
積み重ねていけば必ず認められる。

いる、と思いましたよ。こうしたこだわりも一方では大事ですが、日本で2番目の都市、というのはいやめて、世界で何番目の都市・大阪へと発想の転換をしないと。東京に比べて何が低いとか、劣っている、と比べてみてもあまり意味がない。情報の発信量が東京より少ないのは仕方がないこと。それより、世界に向かって大阪が何を発信できるかを皆で考えればよいと思う。

岸本 東京にないものをすればよい。

太田 長期低落傾向はGDPに占める割合でおっしゃっているのですが、地域の元気を測る指標はそれだけではありません。文化の蓄積であったり、大学の集積であったり……。そのためには、先生がおっしゃったように若い人をどんどん囲い込まないとね。
岸本 最近、女性がマラソンや水泳で良い記録を出しています、それに比べて男性はよくない。これ

は、東京へ一極集中する世の中の傾向と共通するものがあるように思いますね。男性はいい大学を出ていい会社に入って、と個性を埋没させている。例外を除くと、枠の中で行動するのに比べ、女性は既成のものにとられないで、自分の力を発揮している。オリジナリティーがある。例えばよくありませんが、大阪も女性のマラソンや水泳と同じようにメンタリティーを変えればよいと思います。

太田 本心にそうですね。世の中が変わるときは枠の外の人が変えることが多いですね。私がよく例に出すのは、イギリスのサッチャー、アメリカのレーガンです。経済改革や社会の仕組みを変えて強いイギリス、強いアメリカにした。レーガンは政治、経済の舞台が東海岸を中心に置くなかで西海岸の出身。
岸本 大阪は中小企業の街で、ベンチャー企業も多い。官から離れた所に位置している。それをデメリットと考えないでメリットと考える。そうすれば変化が出来る。

——10年ほど前ですが、経済評論家の大前研一さんが、住まいを求めて「関西人宣言」をされたが、結局、大阪から去ってしまった。大前さんがその時に言ったのは「大阪ほど都心部を粗末にしている都市はない」。その象徴は、阪大医学部があつた中之島だと思う。若い人にとって居心地のよい場所がなくなつた。工場等制限法という法律で、大学を都心から追い出してしまつて……。知事はどう思われます？

太田 この法律が、大学に限らず、大阪の空洞化の原因になつたことは否めません。ただ、実際面で、法の運用は随分と緩和されています。これからの都市再開発では、やはり内容が重要。都市開発の良い事例があれば、法に対する見方も違ってくるんです。その点、岸本総長が提唱されている阪大の「第二キャンパス的」な中之島構想は、生涯教育などが

できるサテライト教室があつてよい考えだと思いません。平凡な出来合いのものでなく、これだけのものをやれば大阪が良くなる、そういうインパクトのあるものが重要です。岸本総長の発想力と大阪を思う気持ちに期待します。

岸本 大阪は国立大学がない街になってしまった。ヨーロッパでは街の中に大学キャンパスが点々とあり、社会人もそこで学んでいる。大学は18歳から22歳までの学生が学ぶ所という固定した考えでなしに、いくつになっても勉強ができる場所であるべきです。ヨーロッパの大学には、リタイアした人たちがたくさん学んでおられる。中之島もそういう環境にできたらと考えてのことです。阪大の発祥の地でもあり、そういう意味では、平成の「適塾」になればいいなあ、と。

太田 グローバル化が進むなかで、都市がいかに知的生産力を持っているかがこれからは重要。街中に大学があり、図書館や美術館も、というような都市。大阪は大学も多く、ポテンシャルが高いので、その可能性は十分にあります。

岸本 文化が大事という気持ち、認識が大阪には少ないように感じます。我々の努力が足りない面もありますが。

——中之島が通り一遍のハコものが出来るということだけでなく、サブカルチャー的なものがあつて若い人たちが集える場所になればと。そこに阪大の「第二のキャンパス」を、というのが私の願い。中之島を変えれば、大阪もかなり変わるような気がします。

岸本 国際会議場ができ、それだけでも相当人が集まってきますよ。さらに充実させるのはやはり人。どう集めるかでしょうね。

——知事として、府としてどのように活用されますか。

太田 知的生産をする装置をつくらないといけないのですが、中之島はその拠点。情報発信、情報収集の基地として考えています。北は府が建設を進めている国際文化公園都市（通称・彩都、南は和泉コスモポリス、そして都心の中之島周辺。これらを有機的にどう結び付けるか。特に中之島をいかに機能させていくかでしょうね。とは言っても、（都心の）再開発は難しい。再開発をすると人のおいがない。そうならないよう都市の活力を考え、調和のとれたものにしていくためにビジョンが必要。大阪市と連携しなければならぬが、大阪府全体でどうするかということも課題です。中之島は全体の枠組みの中のコアになっていくと思う。

——国際文化公園都市の話が出ましたが、熊谷（信昭・第12代）総長が以前、「千里にある生命科学の集積は世界に冠たるものだ」と言われました。知事の認識は？

太田 世界に冠たるものと私も認識しています。国立循環器病センター、大阪バイオサイエンスなどの研究所と阪大附属病院。しかし、全国的にあまり知られていませんね。

岸本 世界の方が知っている。だから、情報発信が必要。私はそれをいつも言っているのですが、大阪大学はこんなことをやっている、と研究成果を世界に発信してちよつとでも多くの人に知ってもらうことが大事なんです。

太田 マスコミも、大阪で大きな国際会議があつても、あまり書きませんもの。もう少し大阪の記事を取り上げてくれないとね。

——東京の新聞には大阪発の情報は大きく扱われない。東京との差はかなりのものです。

太田 それがいけない。



大学の先生方はまだ論文至上主義。
学術・研究だけでなく企業に、
もっと視点を置いてもらいたい。
研究の先には事業家との連携があつてほしい。

——本題から逸脱してしまうので、話を本日のテーマに戻しますが、世界は知っているが、日本は知らない、というそのギャップについて阪大の立場から総長のご意見を。

岸本（我々の分野では）世界での地位を高めれば、日本での地位も高まる。世界が評価したら日本でも評価してくれる。日本で評価されるのは何年か遅れてからですが、我々としては世界にユニークなもの発信しなければならぬ。本場の学問、フロンティアとなる学問を積み重ねていけば必ず認められる、と学内の皆さんには言っています。行政や産業の分野とは違うでしょうが。

——行政はボトムアップをいかに図っていくか、という建前の世界だと思いが、エリートをどう育てるか、抜きだしたものをどう評価するかも大事？

太田 産業政策の面では最近、考え方が変わってきました。昔は皆、平等。護送船団方式でしたが、メガコンペティション（優勝劣敗）というすごい波の中ではエリートを育てないと激しい競争に淘汰されてしまう。競争力をつけないと世界に飛躍できない。産学連携も含めて、これからは大阪も、大阪の強みをより強めていくことが重要。それが産業全体の競争力を強めていくことになり、（行政も）そうしたことに手を差し伸べることに産業、経済の面では理解が得られるようになってきたと思います。そうは言っても、大阪は中小企業の街。そのバランスをとるのは難しい。

——森政権が誕生したとき、街の声を取り上げていた新聞記事を読んで驚いたことがあります。『中小企業の加工賃がこの20年間変わっていない。何とかならないか』と悲鳴をあげていた。その苦勞は分かるのですが、政治のレベルになると産業政策と福祉政策が混同されがちです。知事の立場としては公然

とは言えないでしょうけど、いかがです。

太田 伸びるものを伸ばしていくことも、いろんな波及効果があつて良いと思うのですが。

岸本 大学としては伸びる者を伸ばしていくよう努めている。（学問、研究の世界では）皆、平等であつてはいけません。横並びであつてはならない。違いがあつていいのです。秀でた人材を育て、突出したものをつくっていくかなければならない。

——阪大は生命科学の分野で世界的なレベルにありますが、研究を産業化していくことが重要。その接点として国際文化公園都市が期待されている。

岸本 国文都市の中のライフサイエンスパーク周辺には世界に誇るライフサイエンスの研究機関がありますが、生命科学（の目的）は病気を治すこと。ただ単にDNAだけをやっていくと、ライフサイエンスでなく、バイオロジーになってしまう。遺伝子治療にしても病院がなくては成り立たない。阪大附属病院もあり、そういう意味では良い条件が整備されている。

——ポスト関西空港のプロジェクトとして国文都市が位置付けられたのは中川知事の時代。当時とはいろんな面で違いはあるでしょうか？

太田 医療、福祉、バイオに関しては世界に冠たる研究拠点、基礎研究と実学との接点となる地域として、既にいろいろな施設が点在しているわけですから、長い目で見ていきたい。総長がおっしゃるように、もう一度、「0」と「1」では割り切れないポストデジタルのビッグサイエンスへと広がる世界が期待できるのかもしれない。話は現実的になりませんが、総長にお願したいのは、大学の先生方はまだ論文至上主義。学術・研究だけでなく企業に、もっと視点を置いてもらいたい。研究の先には事業家との連携があつてほしい。国文都市はそんな願いを



大学としては伸びる者を伸ばしていくよう努めている。
（学問、研究の世界では）皆、平等であつてはいけません。
横並びであつてはならない。違いがあつていいのです。
秀でた人材を育て、
突出したものをつくっていくかなければならない。

込めたフォーラムになれば、と。

岸本 どちらがどうというのではなく、産・官・学の間をつなぐ人が必要ですね。アメリカではうまく機能している。大学の先生がベンチャーを興したり、企業の経営に参画していたり…。論文至上主義と言いますが、日本も研究面では良いものもあります。ただ、治療に直接つながるような画期的な薬の開発など先端的なものになると外国に負けてしまうことが多い。いろいろ規制があったりして。

——総長はかつて、立场上ベンチャーに参画できず巨万の富を得るチャンスを見逃した、という体験をされたと同っています。今はどうなんでしょうか。

岸本 今は出来ますよ。法律も変わって。しかし、

日本は寄れば大樹、官が大事。そういうメンタリティーが東京一極集中になっている。夢を買うのではなく、現実を買う。それが無くなって個性が尊重されるようになれば大阪も変わってくる…。

——最後に、まとめとして、総長には大阪府と連携して阪大が何を目指していくのか。知事には阪大に期待することを、一言ずつ。

岸本 先にも申しましたが、できるだけ優秀な若い人が多く集まってくる大阪大学にし、突出した学者を育てること。そして、世界に発信する。そのことが、大阪、そして社会に対する貢献につながっていく。

く。知事には大阪の科学、文化が大事だということ。これからも示してもらいたい。

太田 基礎研究は底力ですからもちろんですが、実学の精神を大事にして大阪の新産業育成に結び付くように、産学連携の日本の最先端となるモデルを阪大につくってもらいたい。そのためには、私も努力を惜しまないつもりです。

「千里文化の丘」から世界へ

文化勲章受章者座談会

2001年5月で創立70周年を迎え、21世紀もさらなる飛躍を目指す大阪大学。幸い、大阪・北摂の南山麓、千里の丘に広がる国際文化公園都市（通称・彩都）の一翼を担う恵まれた環境に立地、そのポテンシャルに大きな期待がかかる。阪大の将来に重要なかわりを持つ、「彩都」の核となるライフサイエンスの研究機関は日本が世界に誇る施設。そのトップを務める阪大出身者、あるいは阪大にも関係の深い文化勲章受章者5人による座談会「千里文化の丘」を開催。ノーベル賞の話題から日本の大学、国際交流、そして阪大に対する期待へと展開して談論風発、ビッグな座談会は発言者の何気ない一言にも重みと深みがあり、「千里文化の丘」からの示唆に富んだ発信となった。

●座談会 出席者（50音順）

- 国立民族学博物館顧問
梅棹忠夫 ————— Tadao Umesao
- (財)千里ライフサイエンス振興財団理事長
岡田善雄 ————— Yosbio Okada
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— Tadamitsu Kisbimoto
- (財)大阪バイオサイエンス研究所所長
花房秀三郎 ————— Hidesaburo Hanafusa
- (財)大阪バイオサイエンス研究所名誉所長
早石 修 ————— Osamu Hayaisbi

【阪大ニュースレター No.10】 2000／冬号 掲載
2000（平成12）年12月1日発行



▼ノーベル賞に思う

早石 筑波大学名誉教授の白川（英樹）先生のノーベル化学賞は、日本からは久しぶりですから、大変喜ばしいことです。最近では、実際に応用されるものが選ばれる傾向があるようですね。昔は、理論的、基礎的な研究、成果が対象でしたが、そういう意味で最近のノーベル賞はNYタイムズなどの外国の新聞でも指摘されていたようにプラクティカル・テクノロジーに重点が置かれているようですね。それにしても、毎年、選ぶ作業は大変。評価をどうするのがますます難しい。

梅棹 私にはノーベル賞は遠い世界のこと。専門が違いますので、よく分かりません。皆さんは可能性を持つておられますが…。

花房 私のいたころの阪大にはノーベル賞の対象になるような方が集まっていたんですけど。今はかなり歳をとっておられるが、まだまだ、頑張っておられる。**岸本** 湯川（秀樹）先生のノーベル賞は、大阪大学の物理学教室にいた頃の研究が評価されたのですね。大阪大学の創立当時は、初代総長の長岡半太郎先生など錚々たる人たちがいました。「それに反して、今は」とよく言われるんです。

花房 阪大は今も強いですから、今のままでいいんじゃないかな。そう思います。

岡田 白川先生本人は、偶然だと言っておられるが、面白い発見ですね。これは、余談ですが、白川先生のノーベル賞についてジャーナリズムの人たちは全くマークしてなくて、（受賞の知らせが入った時に）記者は誰も白川先生のところには行っていなかったようですね。

梅棹 それは面白い。

早石 数年前もPCRというDNA増殖の新しい技

術を開発してノーベル化学賞が贈られた。理論的には従来からありましたが、実際に応用した点が認められたのでしょう。それに對し、ちよつと首をかしげる声もありました。でも、PCRに恩恵を被った人は多いと思います。白川先生のユニークな発見に恩恵を受けている人が多いわけで、立派な業績です。

▼阪大について

岸本 自分が研究者として専念していた時はええ線行つてる、と思つていましたが、今の（総長という立場に立ってみると、違うんです。「東大、京大など」の「など」の中に大阪大学がひっくるめられてしまつて、自分が思つているよりも、大阪大学に対する世間の評価が低いんです。

早石 昔より今は元気がないような気がします。赤堀（四郎・第7代総長）先生などがおられた頃に比べてですが、僕らが入つた頃の微研（微生物病研究所）は多士濟々でした。

岸本 ですから、その頃と比較して今は、となるんです。錚々たる方々の集まりだったが、歳をとられると、若い者が頼りなく思われる、それも多少は関係するのでは…。

花房 基本的にはそうだと思います。ただ、阪大が出来た当時は、優秀な人を集めてこられ、素晴らしい大学だった。しかし、それは特別な事情というべきで、それと比べて今はどうかというと、僕は、悲観していません。

岡田 僕は、今の微研に行くとき寂しい気になります。学問的にですか？

花房 微研という特色が薄くなって平均化した感じに気になってるんです。

岸本 感染症の分野の研究で微研は、ウイルス・細菌や寄生虫をテーマにしてきました。難しいし、時





●岸本忠三 大阪大学総長。
1939年生まれ。米国・ジョージズ・ホプキンス大学リサーチフェロー及び客員助教授、大阪大学医学部・細胞工学センター教授・医学部長を経て97年、総長。91年米科学アカデミー外国人会員。95年日本学士院会員。98年文化勲章受章。

**サイエンスには
集積効果というものが
あります。
人が集まって、新しい
発見も生まれる。
特に若い人たちが
沢山集まってこない
と駄目です。**

間もかかるが、大切な研究。しかし、泥くさい。だから最近では華やかな方向へ走る傾向があつて感染症を研究する人が少なくなっている。私は、微研は感染症と免疫中心の研究所であつた方がいいと思う。歴史と実績があるから大阪大学の微研は日本でも評価されているわけです。蛋白質研究所もそうですよ。ゲノムの後の研究テーマとして注目されています。

岡田 (時代の) 波があるから、また、(微研が) 注目される時がくるでしょうね。

早石 岸本先生、どうなんでしょう。大学としての長期展望に立つのであれば、阪大としての特徴を生かして実学に力を入れていく。その一方で、阪大は

日本を代表する大学として国際社会にも通用していかなければならない。そのためにも、人文系にも力を入れていく必要があるのではないのでしょうか。
梅棹 阪大は正直に言つて、人文系が弱いですね。立派な人はいるんですが、自然科学のようにはいかないんですかね。

岸本 一つには、歴史の深さがあります。大阪大学は2001年で創立70周年、文系が出来たのは戦後で、99年に50周年を迎えたところ。京都大学の文系の100年との違いもあります。あと、50年たつたらどうでしょう…。

梅棹 そう、学問は時間をかけないと。それにしても、文系は大阪に向いていないんですかね。

岸本 良いとか悪いとかは別にして、(大阪大学は) 司法試験の合格者は最近少しずつ増えてはいるが、国家公務員上級試験の合格者は少ない。

大阪大学の強いところを伸ばしていけばよいのか、弱い面の強化を図っていくべきなのか。限られた資源の中でどうすれば、と試行錯誤しているところです。

梅棹 人間科学部はユニークな学部ですね。まだ、開花期までは来ていないが、着想はいいですね。文学部の中の比較的科学的な分野を引っ張り出したいい学部です。

岸本 人間科学部は、わが国の大学では初めての学部でした。基礎工学部も他の大学に先駆けてつくつたのです。人間科学部のボランティア学は、日本における国際ボランティアの中心として活躍しています。

早石 金をかけるといふ点では文系はあまり要らないでしょう。

岸本 金をかけたから出来るというものでもありませんが、やはり、人でしょうね。突然変異みたいな偉い人が出てきたら栄えるとか。

早石 それとも、よそから優れた人をとってくるとか。
花房 理系は優れた人を集めてグループを強くしたいという考えが非常に強い。文系はそのような考えがあるのかどうか。
岸本 個々がそれぞれでやるようですよ。
梅棹 私はもともと理学部の出身で共同研究になじんでいます。文系はそうはなりません。孤立して部屋に閉じこもりたいという人が意外と多い。どちらがいいとは簡単に言い切れないが、しかし、リーダーは必要でしょうね。
岸本 リーダーとなる人が(阪大から) 生まれてくるのか、(外部から) 引っ張ってくるのか、いずれにしても大阪大学にもリーダーは必要です。

▼阪大と京大

岸本 先ほど、京都大学との文系の歴史の差を例にあげましたが、京大と比べて大阪大学はどうなんでしょう。

早石 どちらも特徴があつて、曰く言い難いですね。昔から言われていることですが、京大は、いい意味でも悪い意味でもインディペンデントです。これは医学部だけでもインディペンデントです。これは議論したりしますね。京大は建物が学科ごとと違つていて、帰るところが別々ということもあるのです。私が、京大の(医学部) 医化学教室の教授をした時に、医化学と薬理学が同じ建物で、仕切りがされていたので、「仕切りを取りましょうよ」と言つたら、薬理学の教授にえらく叱られました。「医化学のお前が薬理学へ侵略してくるのか」つて。非常に、インディペンデントですよ。よそのことは干渉しない、自分でやっていく、という気風があります。



●早石 修 (財)大阪バイオサイエンス研究所名誉所長。1920年生まれ。ワシントン大学医学部微生物学教室助教、米国立健康研究所毒物学部長、京都大学・大阪大学・東京大学医学部教授、京都大学医学部長、大阪医科大学学長を経て87年(財)大阪バイオサイエンス研究所長。72年文化勲章受章。米科学アカデミー外国人会員。74年日本学士院会員。

日本の大学には外国人教授が少ない。
もっと多くしないとね。
長期にこだわることはないと思う。

梅棹 京大は教室(学科)ごとに建物が違い、講座ごとに仕切りがされている。講座間の交流はほとんどありません。講座が違えば、全くよその人、です。
岡田 私のイメージにある大学らしさは、阪大より京大にあるように、現役の頃から思っていました。京大には私の友達も何人かおられますが、好き勝手なことをやっている、という感じはありません。
岸本 サルに算数を教えたりすることは大阪大学では考えられません。
梅棹 京大には、ストンキョウな人がおります。そういう人を育てる土壌があるんですよ。
早石 (阪大と京大の)両方を見てこられたことは、ありがたいと思っています。東大でも4年教授をしましたが、東大もまた特色がありますね。

▼大学はいかにあるべきか

岸本 大阪大学を含めて日本の大学はどうあるべきか。アメリカで長年、研究生活を続けられ、アメリカの大学を見てこられた経験から花房先生、どうでしょう。

花房 私は今、自分の研究のことで精いっぱいですが、日本の大学は今の状況、今の積み重ねを進めていけばいいんじゃないですか。大学はそれぞれ自分の大学を大切にしていって、お互いが競争して良くしていく。アメリカの大学は基本的にはそうですが、日本の大学もそうなっています。

梅棹 いずれにしても、これからは、純粹培養では駄目でしょうね。その点で、京大と阪大はもっと人事交流が出来ないものですか。組織間で人間を交流させることが、どの組織にとっても一番いいことなんです。こんなに近くにありながら、この二つの大学はおどろくほどに交流がない。

花房 教育に関してですが、日本の大学院教育がどうも、おざなりになっている感じがします。アメリカの先生は、教えたがりなんです。学生とやり合い



●岡田善雄 (財)千里ライフサイエンス振興財団理事長。1928年生まれ。大阪大学微生物病研究所助手・助教、教授を経て大阪大学細胞工学センター長、91年大阪大学名誉教授。93年日本学士院会員。87年文化勲章受章。

阪大のキャンパスは、
非常に良いポジションに位置している。
新しい、前向きな計画を進めていく上での
立地条件としては、一番だと思っています。

ます。そういう雰囲気は日本にはないですね。私のいたロックフェラー大学でも学生から突き上げがありました。

岸本 アメリカでは学生も先生について、よく知っていますよ。幅広い知識を持っていないとやっていけないような仕組みになっているんですね。日本では情熱を持って学生に講義する先生は少ない？

花房 アメリカの学生は大学に入ってからが大変。苦しみですよ、卒業するまでは。そこが日本とは違う。
岡田 会議が多くなって先生も研究や勉強する時間が少なくなった、ということはありませんか。

岸本 大学院重点化になって学生の定員を増やしましたが、教官の数は増えない。外から見ると、大学院を出た学生はどないなるんや、という声も聞きま



●花房秀三郎 (財)大阪バイオサイエンス研究所所長。1929年生まれ。大阪大学微生物病研究所助手、パリのコレージュ・ド・フランス実験医学研究室研究員を経て73年米・ロックフェラー大学教授、98年に帰国。82年、ラスカー賞、85年、米科学アカデミー外国人会員、86年、米・癌学会クルー賞、95年文化勲章受章。

す。大学は何をしているのかの疑問に答えるには、先生方も世間に向けて自ら発信する努力をしなければならぬ。

梅棹 基本的には元気がなくなった。部屋に閉じこもってしまっただけじゃない。今は環境が良すぎるのかも知れない。阪大には元気をだしてやらねえと。

岸本 セミナーをしても学生が集まってこない、と先生方は言っておられる。我々の頃はそうでもなかったが。今は、常時いろいろとやっているから、「いつでも聞くことができる」という気持ちで学生にあってありがたみが少ないのでは。

早石 岸本先生が医学部で講義をしている頃は、いつも教室から学生があふれていた、と聞いていました。

岸本 あふれていませんよ(笑い)。ただ、一生懸命

日本の大学院教育がどうも、おざなりになっている感じがします。アメリカの先生は、教えたがりなんです。学生とやり合います。そういう雰囲気は日本にはないですね。

に聴いてくれました。その頃の学生は今、いい仕事をしています。良い講義をすると、優れた人が出ます。

花房 これからの大学は競争ですよ。

岸本 先生方の研究費も一生懸命やる者でそうでない人の区分けがされるようになってくるでしょうね。やってもやらんでも一緒では駄目。成果のあるものには、今まで「100」だったのを「200」にするとか、そうすることでインセンティブが出てくる。アメリカの大学では既にそのような仕組みになっている。日本にも競争原理を取り入れることは良いことですが、きちんとしたシステムを事前に組み入れる必要があります。

▼**阪大は環境に恵まれ、進展の可能性大**

岸本 関西は大学の数、学生の数は、人口比でみると東京と変わらないが、研究所は少ない。シンポジウムなど学会の集まりを大阪で開くと、同じプログラムであっても東京の半分しか集まらない。研究所が少ないからです。サイエンスには集積効果というものがあります。人が集まって、新しい発見も生まれる。特に若い人たちがたくさん集まってこない



●梅棹忠夫 国立民族学博物館顧問。1920年生まれ。大阪市立大学理工学部助教授、京都大学人文科学研究所助教授・教授を経て74年国立民族学博物館長、93年同顧問・同名誉教授、96年京都大学名誉教授。94年文化勲章受章。

駄目です。大阪大学も優秀な学生、先生を集める、という点ではしんどい思いをしています。

梅棹 大学の共同利用機関は全国で17あるのに関西には二つしかない。東京に偏っている。人文系の研究所も、大きな研究所は国立民族学博物館と国際日本文化研究センターしかありません。新たに千里(彩都)に造ろうという話があります。地域研究のセンターとなる研究所ですが、こういうものを支える資本が大阪にはあるのでしょうか。大阪の財界は千里を支えてくれるのでしょうか。

岸本 昔は、それで栄えました。

梅棹 かつては、先端的な仕事は大阪から生まれたものです。国家資本を入れないで。「官」がやらんから仕方なしに「民」がひっかぶっていた、というこ

(日本の大学も) これからは純粋培養では駄目でしょうね。京大と阪大はもっとと人事交流をすれば一番いいことなんです。

とでしょう。国は関西に投資する気はないですね。
岸本 ライフサイエンスは西（関西）が、よう頑張っています。

花房 バイオサイエンスは、西高東低ですよ。

岸本 千里の丘の、大阪大学に隣接するライフサイエンスパークの周辺には早石・花房先生の大阪バイオサイエンス研究所や国立循環器病センター・生物分子工学研究所など多くのライフサイエンス研究施設が集積しています。大阪大学の附属病院もその一つですが、ここを学術・文化の拠点（国際文化公園都市）にしようとしているわけです。山村（雄一）先生が総長（第11代）の頃から言われている構想ですが、大阪大学がどのようにかわっていくべきか、外から大阪大学を見ておられたいかがでしょう。

花房 これだけの施設を集められたのは立派だと思います。大学のサイズ（大阪大学の規模）は、このぐらい（でよいの）かもしれませんが、これからの広がり、何とでもなりますよ。

岡田 阪大のキャンパスは、非常に良いポジションに位置している。それに空間がある。土地が狭いと圧迫感を感じて嫌なんです。新しい、前向きな計画を進めていくうえで立地条件としては、他の大学に比べ一番だと思えます。

岸本 緑が多くて、空間があつて、その点は満足しています。

▼真の国際交流

梅棹 国立民族学博物館は阪大と隣組ですが、外国から私のところに来られる客員教授の宿舎として阪大の国際交流会館を利用してもらっています。しかし、一般に日本の大学は外国人をもてなす仕掛けが貧弱ですね。国際交流といながら実質的なものは出来ていません。

岸本 国の留学生10万人構想が以前ありましたが、最近はまだ言わなくなりました。「留学生は未来の大使」と言いますが、ちゃんとした受け入れをして、「日本に留学して良かった」と言つて帰つてもらわないといけない。そうすることが、日本の評価になって跳ね返ってくるのですから。そういう意味でも、人を育てることが国際貢献になると違いますか。

早石 外国の留学生は学位を取つて次のステップにしようとの意気込みが強く、朝から晩まで頑張るの（研究室の）戦力になる。日本の留学生も、かつては評判が良かったが、今は評判が良くない。留学しても、車を買つたり、観光に出掛けたり。それもいいが、時代のせいでしょうか。韓国や中国の留学生と比べるとかなりの差を感じます。

岸本 我々の時代とは逆になってしまった。若い（研究者の）人たちの留学も少なくなりました。豊かになつたからでしょうね。

早石 そう、豊かになつた。ところで、日本の大学には外国人教授が少ない。もつと多くしないとね。外国人の教授については、長期にこだわることはないと思う。外国から訪問してきた優秀な研究者に2、3週間でもよいから、朝から晩まで、講義やゼミナールをしてもらい、周りの人たちとディスカッションをしてもらうシステムを作つたらいいかでしょう。外国の大学ではそういう制度があつて、なかなか有効です。インターナショナルになるには、まず語学力をつけて、英語でディスカッションが出来ないと駄目ですよ。千里が国際化に向けて羽ばたこうというのであれば、実質的な国際化を実践することですね。
岸本 大阪大学には現在、海外のいろんな国から多くの留学生、研究者を受け入れています。その一方、うちの学生も短期留学をさせて交流を深めています。

大阪大学と学生交流協定を結んでいる大学はたくさんあります。外国で取った単位は大阪大学の単位とし、その逆も行う単位互換を取り入れています。若い時に、いろんな国の友達を作るとは将来のためです。

▼連携を密にして世界に発信

梅棹 ところで、阪大と民族学博物館は隣組ですが、もう少し交流があつてもよいと思つています。

早石 民博だけでなく、うちの研究所（大阪バイオサイエンス研究所）もですよ。もつとインタラクティブがあつてもよい。うちのセミナーは阪大にも案内を出しますので、教官や学生がよく聴きに來られます。まあ、いい人（講師）の場合ですが、阪大からもセミナーなどの案内を周辺の研究所に頂けないでしょうか。

岸本 NIH（米国の国立衛生研究所）がやっているように、大学全体のセミナーのカレンダーを毎週発行し、配ることで。いろいろないいセミナーをたくさん学内ではやっているのですから。私が医学部長の頃はやりかけたのですが、今はやっていない。キャンパス内にポスターを張つたり、ペーパーを置いておくだけではあきません。

梅棹 ITの時代でもありますから、その活用も大いにやつてもらいたいものです。

岸本 千里には日本が世界に誇る有数のライフサイエンスの研究所があり、大阪大学もその一角にあるのですから、もつと交流・連携をし、ネットワークをつくつていかなければなりません。恵まれた環境をより生かすことが、我々の使命でもあり、ぜひ、そうありたいものです。そして、千里から世界に情報をどんどん発信していく。大阪大学も大学としての役割を担っていきます。

「産+学」 21世紀の日本を考える——

ヒトづくり、モノづくり

● 経済のけん引役だったIT（情報技術）不況、生産基地の中国へのシフトで進行する製造業の空洞化、そしてグローバル化——日本の経済・産業構造は大きな転換期を迎えている。長引く不況。不透明感は一掃されるのだろうか。厳しいバックグラウンドを認識しながら、製造・金融界のリーダーである中村邦夫・松下電器産業社長、西川善文・三井住友銀行頭取と生命科学の分野では世界的な学者である岸本忠三・大阪大学総長の3人に、「21世紀の日本を考える——ヒトづくり、モノづくり」をテーマに、それぞれの立場から、これからの企業、大学における人材育成のあり方、役割などについて語ってもらった。

● 座談会

- 松下電器産業株式会社社長
中村邦夫 ————— *Kunto Nakamura*
- 株式会社三井住友銀行頭取
西川善文 ————— *Yosbifumi Nishikawa*
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— *Tadamitsu Kishimoto*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞大阪本社経済部長 ——— *Satoru Watanabe*

【阪大ニュースレター No.15】 2002/春号 掲載
2002（平成14）年3月1日発行



ピラミッド型では傑出した人材を輩出させることは難しい。自由な発想で議論を戦わせることによって創造的なものは生まれるのです。



西川善文氏

——本題に入る前に、大阪大学の同窓である西川頭取、中村社長に母校での思い出からお聞かせください。
西川 1957年に入学して61年に卒業しました。文科系の学部が創部されてまだ、10年になるかならないかの頃で、講義は木造校舎で受けました。大変立派な先生方がおられて、研究テーマも、その後のわが国の発展に貢献されるような内容のものだったと思います。

中村 私は62年の卒業です。ゼミの先生の恩師が関西経済界にも影響のある方で、その先生から「就職は大阪の企業だぞ」と言われていました。そんなこともあって松下に入ったのです。今、思えば、影響が強すぎましたね。

——鉄の団結みたいに母校愛の強い大学もあります。卒業後の阪大との接点は？

中村 ゼミの先生の同窓会に1、2回出た程度です。西川 私の場合は、阪大の教授になり、学部長もされた友人がおりましたので、その友人を通じていくらか接点はありました。

岸本 アメリカの大学は、4年在籍しただけで卒業生には寄付を要請したり、つながりは強いんです。大阪大学の卒業生は約9万人おります。すべての方にというわけにはまいりませんが、今回（大阪市北区に予定している大阪大学中之島センター建設のため）は卒業生の皆さんに大変協力をいただいたいております。これまで卒業生との関係を深めることに大学はあまり努力をしておりませんでした。私立大学と違って国立大学は大抵そうでしょうが、もつと絆を強くすることは大学にとっても大事なことです。

——この1、2年に特定してもよいと思いますが、日本の社会は激しく変わってきました。かつては大学レジャーランド論が言われ、人材の教育は企業で行うという風潮がありました。一転、大学に即戦

力を求めるようになってきたように感じます。

西川 急速に変わってきていますし、変えなければならぬ。我々の仕事も生産性を上げないといけない。人員も極力絞って。そうなる、新入社員といえども、見習でよいというわけにはまいりません。厳しくなっていますね。

中村 企業は即戦力を求めますが、大きな変化はIT（情報技術）のインフラが整備されたことです。今の学生は卒業した時点でITに対するスキルを高めている。即戦力を持って入社してきます。その点では頼りになるといえるか、頼りがいがあります。我々の頃は、スキルは会社に入ってから学んだ、教えてもらいましたね。

——ITと大いに関連する家電業界の実感として受け止めたが、いずれにしましても企業はじっくり時間をかけて人材を育てることをしなくなってきたこと。人材像は変わってきました。大学はどう対応されますか。

岸本 レジャーランド化を改めるといった単純なものではなく、大学も社会も変わらざるを得ないでしょうね。一つの典型的な例ですが、東京大学法学部中退で外交官試験に合格し、イギリス大使になられた方がおられる。それが一番良いエリートだったと思います。大学での教育はあまり評価されなかったという例だと思えます。アメリカではビジネスマンになるにしても、専門的な知識を身につけるため、（大学院の）ドクターコースまで進む学生が多い。政治、経済、外交のトップの多くはPhDです。大学は研究者を育てるところ、専門的な高等教育を行うところとして社会的な評価も正当にされています。日本の企業は極端に言う、これまでは大学を出ておればよろしい。うちの家風（社風）に合ったように、しっかりと育てるからといった感じでした。余裕が



中村邦夫氏

就職活動に入ると学生は別人のように変わる。これは日本人しか持っていない能力かもしれません。

あったということでしょう。大阪大学の場合も、理工系でも就職するのに修士課程は修了するが、博士課程に進学する学生は少ない。ユニークなもの、オリジナルなものを創造していくには、教育に時間をかけないといけない。大学が求められているのはその点です。大学に求められる即戦力は、例えば、専門学校でコンピュータ技術を学ぶということではありません。もっと高度な即戦力という意味です。

——今の若者は、大学生は、とよく揶揄やぶされますが、それは、現代社会の反映でもあると思います。若い人たちに希望が持てるのでしょうか、持っていないのでしょうか。

思われます。能力はあるのに。我々は、こういう人たを鍛えなければなりません。鍛えれば能力を発揮してくれるものと期待し、希望は持っています。

中村 絶望的なものではありませんね。飽食の時代が長かったから、大学生活もその影響があったのでしよう。ところが、冬の時代を迎えると、敏感に反応する。例えば、就職活動に入ると学生は別人のように変わることです。これは日本人しか持っていない能力かもしれませんが、いずれにしても、私は、あまり心配はしていません。

岸本 我々戦後の時代は、何かをしないと食いはぐれる、という気持ちがありました。今の人たちには、そういう面でのハングリー精神はありませんね。能力は悪くないのに。大学入試センター試験の問題を解く力はすごいですよ。あれは難しいもの。違うところは、やる気、気概かな。私たちはノーベル賞の湯川秀樹に憧れて、「僕らもやるぞ」とその気になって頑張りました。その辺が希薄です。メジャーリーグでのイチローの活躍に感動はしても、「あれは、イチローやから。自分とは別のこと」とクールです。豊かになつたせいもあるでしょうが、(若い人たちを)駆り立てる何かが出てくれば変わってくるでしょう。世の中が変われば、一生懸命に物事に取り組む人たちが出てくるでしょう。

——学生の能力ということでは、中国の大学生の迫力、やる気はすごい。目の輝きも違います。

中村 50年前の日本人のようなハングリーさで勉強していますね。それと、学生の数が多いことです。人口が日本の10倍ですから学生も10倍、これはすごいパワーですよ。中国は今、日本がかつて歩いた道を全速力で走っている。日本はどう対応すればよいかと言われますが、日本人も独特な能力を持っており、



それを伸ばしていけばよい。それぞれの特徴が出てきたと思えばよいのでは…。

——02年は中国の年とも言われます。学術研究の世界でも中国は視野に入っているのでしょうか。

岸本 中村社長が言われたように、我々の医学界でも30年、40年前には、米国の生命科学を支えたのは日本人の科学者でした。東洋人といえば日本人でした。それが今、研究現場には中国の研究者が目立ちます。日本のたどった道を中国が現

在、たどっています。目の輝きは違いますが、能力的には変わりはありません。それと中国は計画的です。計画的なシステムは創造的なものを生み出すのには向いていません。一定レベルまでは到達し、難しいと言われているバイオテクノロジーの分野でも、やがて（日本に）キャッチアップしてくるでしょう。しかし、突出したものは、それを経てからの段階。我々も、同じような経過をたどってきました。

——突出した教授を生み出すには、大学のシステムをどのように変えていけばよいのでしょうか。

岸本 先進国にキャッチアップし、発展してきたこれまでの国立大学のシステムは間違いはなかったと思います。公務員制度や年功序列などは、それぞれに機能してきましたが、これからは、それらに特有なものを加えた仕組みにしていかなければならない。学生にきちんとした講義をする先生の給料は保

証するが、研究成果を上げる人とうでない人が同じということではなく、研究費を多く確保して研究領域を広める人にはある程度、自由な時間や場所を提供するなど環境整備が必要でしょう。育てるということではなく、そうした積み重ねを行うことで、自然発生的に傑出した研究者、突出した研究が出てくるのではないのでしょうか。みんなと同じことをする、みんなと同じであれば安心、という今までの仕組みから、人と同じでなくても構わないという仕組みに変えていくことだと思います。

西川 合併前の住友銀行では、特定のテーマについてはある者に任せ、それをやり遂げる過程で能力を発揮し、抜けていくというやり方をしてきました。しかし、基本的にはピラミッド型組織。ピラミッド型では傑出した人材を輩出させることは難しい。フラットな組織にし、自由な発想で議論を戦わせることによつて創造的なものは生まれるのです。ITの進展によつて情報は誰でも、いつでも取れるようになりました。組織もそれに合わせてフラット型にし、競わせないといけない。現実はそのようになっていますが。

中村 西川頭取と同じように、ピラミッド型の組織では若い人に責任を任せることはできません。フラットにしないと。技術者の世界では既にそうなってきていますが、日本の社会は今、古い組織構造が崩れつつある段階ですね。

西川 まさしく、過渡期ですね。三井住友銀行でも、能力のある若い人に責任ある仕事を任せています。ところが、管理する立場の者に理解されなくて、ストレスがたまり退職、転職先で力を発揮するケースがよくあるのです。私どもにとつては苦い経験ですが、人の使い方と、これをうまく機能させるよう徹底させるようにしないと大変な無駄になってしまいます。



岸本忠三 総長

世界の人たちに
「日本人も捨てたものではない」と思われたら、
それは日本の地位の向上、ひいては
経済の活性化にもつながるでしょう。

——岸本総長が言われたように専門学校的な人材論でなく、大阪大学には何を期待しますか。

西川 グローバル化へ急進展している時代ですから阪大には世界のトップを狙った研究をぜひ、お願いしたい。岸本先生はそうした研究をされているわけですが、医・理工系だけでなく文科系にも世界の頂点を目指して努力してもらいたいものです。

中村 国立大学の中でも阪大は、産・学の近い関係を刻んできた歴史があります。この特色をもっと強くしていくことが求められる。もう一点は、学生ベンチャーを育てるよう努めてもらいたい。米国は大学の先生が会社を起こしたり、役員になっていますが、大学では自分のゼミで学生ベンチャー育成に努力をしておられる。日本の国立大学ではそのようなケースは少ないでしょうが、阪大でそれが出来れば、面白い大学になると思います。

岸本 現内閣の都市再生プログラムの柱の一つが生

命科学の国際拠点づくりで、大阪圏がその中心になるうとしていきます。生命科学の分野は西高東低ですが、我々生命科学の研究では、英語で世界に発信していますから、関西も、東京もありません。評価も世界が相手です。関西経済は地盤沈下がよく言われますが、我々は大阪にいても60億人を相手にすればよいわけです。このことが大きな意味を持ちます。世界を相手に研究に取り組む大学があることは産業界にも波及して



いくと思うからです。大阪大学は、初代総長の頃から実学を重んじ、産業界との連携に努めてきました。政府は最近になって産学連携の推進を言いますが、目の前のすぐに役立つことをすればよいというのはなしに、もっと大きなものに影響を及ぼしていくことが大事。米国では学者の研究が大きなマーケットを生み出し、利益を上げれば立派と評価されます。日本はやつと、大学の先生も社外重役が認められるようになったばかりです。

——この30年間に日本の大学生は2倍に増えたのに、大阪市内の大学は10大学が5大学になり、学生数は4万2千人も減りました。良い街には良い大学がある、の関係がなくなりつつあるようで気がかりです。その点で、空洞化していく大阪のアカデミックな核となり得るのが大阪大学中之島センターだと思います。岸本 中之島センター一つではあきません。現在、



国際会議場や大阪市立科学館がありますが、大阪市中之島周辺に市立近代美術館や舞台芸術総合センターの建設も計画している。さらに、教育・研究の機能を持たせたセンターをつくるなどして集積効果を高めていけば、大阪の知的活力創造の拠点として期待ができます。中之島センターは、その一つの引き金ですね。

——やはり気になるのは関西です。関西論について一言ずつお願いします。

西川 ちよつと前は東南アジア、今は中国へと産業がシフトし、空洞化の面があります。しかし、関西はバイオサイエンスの研究とその関連の製薬会社、食品会社が多く、その集積地といえます。それに、松下電器産業をはじめIT関係の会社、そして大学も集積しています。成熟したこれらの研究、先端産業分野をもっと充実させて世界に発信していくことが重要だと思えます。伝統産業の衰退についてはどの地域も同じこと、それによる構造転換が行われているのであって、決して悲観する必要はありませんよ。

中村 関西、特に大阪は製造業の町で、現在は技術

の転換期ですから苦労しているわけです。しかし、日本がアメリカに勝てるものが大阪にはあります。そうしたものに特化していけば希望は持てます。

岸本 例えば、オーケストラの指揮者の小澤征爾さんやイチローが外国で活躍することで、世界の人たちに「日本人も捨てたものではない」と思われたら、それは日本の地位の向上、ひいては経済の活性化にもつながるでしょう。関西からも多くの文化人が世に出ていますし、世界の舞台でもいろんな方が活躍しておられます。大阪はどうも目立たないように仕向けられているような感じがしますが、西川頭取や中村社長が言われたように、関西にはポテンシャルがあります。あれも悪い、これも悪いと、悲観的にならないで、良い面をもっと生かすようにすれば、良い方向へ向かうのではないのでしょうか。大阪大学も、もっともっと世界に発信していきます。そのことで、地域に生きる役割を果たしていきたい。

「科学の時代とこころ」

心の世紀における『いのち』の教育

IT（情報技術）や生命科学をはじめとする科学の飛躍的な発展が産業構造やビジネスのあり方を根本から変える一方で、殺伐とした事件が相次ぎ、人間関係や社会のあり方を規定してきた規範やルールを脅かすような問題も生じている。そういう意味でも、21世紀は、「科学の時代である」と同時に「心の世紀」でなくてはならないと言われている。そこで、日本の臨床心理学の草分け的存在で、豊富な臨床経験から、子供論、教育論、日本人論などを展開し、最近では文化庁長官としても発言する河合隼雄・京都大学名誉教授と淀川キリスト教病院名誉ホスピス長の肩書を持つ柏木哲夫・大学院人間科学研究科教授に「心の世紀における『いのち』の教育」をテーマに語っていただきました。

●対談

- 文化庁長官／臨床心理学者
河合隼雄 ————— Hayao Kawai
- 大阪大学人間科学研究科教授
柏木哲夫 ————— Tetsuo Kasbiwagi

〔阪大ニュースレター No.16〕 2002／夏号 掲載
2002（平成14）年6月1日発行



心やいのちがかかわることには、
苦しみや悲しみが関係してくる。
それが必要であるなら引き受け、
その中から幸福が生まれてくる。

▼「今までより忙しくなったが、
心のエネルギーはそんなに要りません」

柏木 本題に入る前に一言、お尋ねします。素朴な質問ですが、文化庁長官になられて何が一番変わりましたか。

河合 健康で普通の生活をしていることですね。月曜から金曜まで勤めていますので、今までとは生活サイクルが大違いです。私は自由人で、マイペースで仕事をしてきましたから。

柏木 東京と関西での滞在日数の比率は。

河合 どうしても東京（中心）になってしまいます。関西は週のうち1日、2日おられたらありがたいのですが。

柏木 それでは今までより多忙になられた？

河合 今の方が忙しいですね。ただ、拘束される時間が決まっただけで、決まった仕事が多いですから、消耗するエネルギーとしては楽です。心のエネルギーがそんなに要りません。

▼「[Soul]と[生命]」

柏木 最近、心の教育と、よく言われますが、もう少し、いのちの教育を大事にしてみたいと思います。私は62歳ですが、還暦を過ぎて言葉にこだわるようになりました。間違った表現が気になって、聞き流しておれなくなりました。「頭痛が痛い」という看護師さんもおられる。それはそれとして、「いのち」と「生命」（せいめい）は違うのではないかと思うようになりました。生命は有限で閉じ込められているのに対し、いのちは、無限の広がり（開放性）があって、閉鎖されるものではない。有限性と無限性、閉鎖性と開放性のような違いを感じるのです。

中川米造さん（大阪大学名誉教授・故人）が言っ

ておられた言葉が非常に印象に残っています。「私の生命は間もなく終焉を迎えるが、私のいのち、すなわち、存在の意味、価値観は永遠に続くでしょう」と。そして「今までの医学は、生命は診てきたが、いのちを診てこなかった。これからの医学は、生命といのちの両方を診ていく必要があるだろう」。教育の面でも、いのちの教育が今、不足しているように思えてなりません。

河合 中川先生はすごい方でした。今、言われた言葉もすごいことですね。その通りだと思いますが、先生が言われていることを正確に理解しておれば、いのちの教育は良いことだと思います。ところが、いのちの教育を、生命の教育だと思っている。これは違います。心の教育も誤解されているところがあります。いのち、といえは、動物愛護と結び付けられたりします。そうではありません。割り切った言い方をすれば、いのちは、宗教の問題で、生命は医学の問題、医学があずかってきた。中川先生の言葉にも、そういう意味が込められているのでは。

古代の人間が生き残れたのは、イネが、いのちを持つていたからです。古代の人たちはイネを、いのちのあるものとして接してきたからです。ところが、今は、イネは収穫すると、どのように料理すれば、おいしく食べられるか、どのようにすれば儲かるか、と即物的に考え、イネの、いのちを忘れてしまっています。即物化によって、いのちとの関係が疎遠になってしまった。科学は即物化によって進歩するが、いのちのことを忘れてしまった。極端に言えば、自分自身の、いのちが分からなくなってしまう。人間のいのちが分からなくなってしまう。今はそういう状態になっています。では、どうすればよいか、なかなか難しく、言いづらいが、「ここ



ろ」のことを考えたらどうですか、と話している。そうすることで、いのちの教育につながっていくと思っ
ています。ところが、心の教育は浅いレベルに止ま
って、いのちの領域に届いていなかった。それでは
意味がありません。

柏木 17歳少年の問題など、殺伐とした事件の新聞報道では、よく「いのちを大切に教育を」という記事を読みますが、狭い意味の「いのち」ではなくて、もう少し広がり
と深さを持った概念の、いのちの教育だと思
います。逆に、そのレベルまで到達しないと
いけないのかな、と考えます。

河合 その通りです。深い教育をするには、まず、先生から教育をしていく必要がありますね。

柏木 私は人間科学研究科に所属していて医学部のカリキュラム編成にも関心を持っていますが、生命を診るために必要な医学部の知識は膨大です。それを消化するのは大変なことで、心の教育、いのちの教育のレベルまで届いていない。危機感を感じますね。じゃ、どうすればよいか、はつきりとした解答はありませんが、医学教育だけでなく、日本の教育全体にかかわる問題でしょうね。

河合 日本だけの傾向ではないでしょうが、知識がどんどん増大して、その知識を蓄積し、上手に使う者が社会的な地位を得る。しかし、そうでない者との間にエアポケットができる。それが、いろんな問題の元凶になったりする。教育全体を見直さなければならぬ。

▼教育UNION

柏木 話がそれるかもしれませんが、私は精神科医として心の悩みを抱えておられる方々と接してきました。そこで感じるのは、現在の教育の弊害として
の問題を抱えているケースが意外と多い。そういう

側面から、心に悩みを持っておられる方を先生はどうか
うみられますか。

河合 今の教育路線に乗っている子供は（それをなんとも思わないので）平気だが、こんな場合はどう
だろうか。例えば、肉を食べることに子供が、「牛を殺してまで」と疑問を持って周りの者に質問すると多分、「変なことを考えるのはよさない」という答えが返ってくると思う。そうすると、その子供にとっては、一番求めていた答えが否定されてしまうわけですね。

これは、あるスクールカウンセラーの話ですが、茶髪の女の子を担任の先生が連れて、「何とかやめるようにしてくださいませんか」と相談にやってきました。カウンセラーにその女の子は「先生は何のために生きていますか」。その質問に一瞬、詰まったカウンセラーは「そのことを分けることが大事なこと」と答えると、「だったら、また話しに来るわ」と言っ
て、その後何度かやってきました。女の子は、人間は何故、生きるのか、死んだらどうなるのかについて話
がしたかったのに、同級生は相手にしないし、先生も受験やスポーツの話ばかり。それで、この学校で唯一私が違うということを主張したくて茶髪にしたという。しばらくして女の子は茶髪でなくな
っていました。「私には話し相手がありましたので」と話
していたようですが、この子には、なにくそ！という
力があります。ところが、この子のように張り合
えない子供は閉じこもってしまう。

柏木 こんな話もあります。学校の授業で古い卵と新しい卵を食べる時、「どちらから食べますか」というテストがあつて、正解は新しい方だった。しかし、日常生活では、普通は古い方から食べますね。知識と本質の間の遊離を感じます。教育の本質について考えないといけない。



河合隼雄氏

少しぐらい学力が低下してもいいじゃない。
それよりも知識をどう生かすかの方が
大事な教育ですよ。

▼ **幸せは幸福より**

河合 知識を蓄え、その知識を自分の力で消化していくのがゆとり教育だと思うのですが、学力低下、つまり知識の問題ばかりに集中するでしょ、今は。極端ですが、少しぐらい学力が低下してもいいじゃない。学力低下をあまり心配することはないと思う。それよりも知識をどう生かすかの方が大事な教育ですよ。ノーベル賞を受賞した学者や大芸術家と言われる人たちの、小・中学校での学力は、必ずしも良くなかったのでは…。

柏木 今の学生は、私らの学生の頃と比べると、喧嘩をしないで、和気あいあいと、仲良く、上手に付き合っている。しかし、一個人としての親密さ、深いかかわり方をしません。心の中に入っていないか、実に表面的です。自己開示もしません。親兄弟

の話や自分の生い立ちなど個人のプライバシーに関する話は話題にしない傾向が強い。これは、現代社会の大きな特徴かなと思います。

河合 これが大問題です。昔は逆でした。関係が深くなり過ぎて、困るようなこともありましたがね。しがらみ、という人間関係で、相手の要求を断ることも断りきれなかったりして。現代社会では、お金ですべてを解決することが多くなって、人間関係は希薄になってしまった。スピードディーに、効率よく、能率的に物事を進めようとして、心の関係を切ってしまうのです。しかし、人間関係には、いのち、が存在することを、若者にも分かってもらわなければなりません。努力すれば、その辺のことが分かると思いますよ。

柏木 どういう努力をすればよいのでしょうか。

河合 分かりやすい例は、失恋をしたとか、身内に不幸があったとか、あるいは、名作を読んで感動するなどして、精神的にショックを受けて、いのちとの関係を体験する。その機会を生かすことでしよう。そんな時は、我々の方からも若者の心の中に入り込んでいかなければいけない。(若者は)そうした体験を求めてむちゃをする場合もあるのではないのでしょうか。

柏木 いのちの関係を持つことに、親の方が躊躇しているのかもしれない。

河合 昔は、お金がないから心を使わないといけなかった。経済的に裕福になって、今は、心を使わなくなってしまう。

柏木 私は、父親が早く亡くなり、貧乏な少年時代でしたから、我慢することの大変さを体験しました。そのことよって得たものは大きかったですね。アルバイトをして車を買う時代ではありませんでしたから。



柏木哲夫 教授

生命は有限で閉じ込められているのに対し、
いのちは、無限の広がり（開放性）があって、
閉鎖されるものではない。

河合 これだけ、経済的に豊かになったときの幸福とは何かを考えるべきです。昔、僕らは、金さえあれば幸福になれる。極端に言えば、白いご飯さえ食べられたら幸せ、それだけでよいと思いましたが、あれは、白いご飯を食べるために心を使ったからですよ。それが、段々と本当の幸せ、何が幸せかを不問にされてきましたね。

日本人は福祉に関心を持ちますが、モノをあげよう、お金をあげよう、と思いついて福祉の本質を忘れてしまった。そうでなくて、私は福祉も文化も同じだと思って、文化ボランティアと一緒のことで、出したのです。福祉ボランティアと一緒のことで、困った人に何かをしてあげるのがボランティアという考えではありません。ボランティアは困った人がいないと出来ないというのは大間違い。ボランティアは福祉の延長線にあるというのが僕の考え方で

す。もつと言えば、文化ボランティアは自分のためにやっているということです。「福」も「祉」も、幸せのための仕事です。

柏木（ということは）与えることと、受けることの双方向性があるということですね。

河合 若者たちに、そういうことを、もつとやらさないといけません。僕らの子供の頃は、不必要な苦労、苦しみを少なくすることが幸福と思つた。今は、必要な苦労を引き受けることを忘れていた。子供たちに必要な苦労をさせることが大事です。子供たちに、そうさせるには、まず、先生が自分で苦労を引き受けることです。苦労は先生からしなければならぬ。

柏木 それには時間がかかるし、工夫も必要です。先生方にとっては、しんどいことをせずに、ワンウェイのレクチャーをしていた方が楽という気持ちがあるでしょうね。

河合 先生の方が、いのちとかかわりのないことをしようとしているような気がします。先生も生徒も必要な苦労をしないとね。

柏木 先生の意識改革は、大学の先生も含めて、重要な課題でしょうね。大学でも授業評価というのがあって、学生による先生の評価を行っています。ちゃんとした講義・教育をしている先生の評価は高いです。私たちが学生の頃でも、事前の準備をして授業する先生とそうでない先生では、違いがすぐ分かりましたもの。

河合 不思議なことに、同じことを言っても、一夜漬けの知識か、背後にたくさん持っているかは分かるのですね。

柏木 その辺の感受性は、なんと云つたらよいのか、教育以前のもの、人間の本能として持っているのでしょうか。

▼老いと死、生と死

柏木 病気や死に関するところが、教育の中でどのうに位置付けをすればよいのかについてコメントしていただきたいのですが、その前に、戦後の日本の価値観の変遷をみていますと、敗戦後の復興の過程で、強さと生産性に価値を置き過ぎたように思えます。その対極として、弱さと非生産性になかなか目を向けなかった。そういう意味では、弱さと非生産性は、老いとか死ということにつながるわけで、日本人の心の中でそれにフタをしてしまっていた。教育でも、取り上げにくい性の教育が出てきて、その後しばらくして死の教育へと推移している。どの国でもそういう経過をたどっているのですが、どのように考えられますか。

河合 老いや死にフタをすることがマイナスである、老いや死についての教育が大事であることに最近、やっと自覚するようになりました。死についての教育は、生命と死の教育ということですが、どうせ人間は死ぬんだから、と単純にとらえるのではなく、生きた教育に努力をしてみたい。

柏木 死の教育は、突き詰めていけば、生の教育と

いうことだと思えます。これまでは、生きていくという現実から死を見ようとする意識がありました。逆に、死から生を見ようとする意識が置換えてみようと教育者は意識するようになりました。体育や生物、科学などの講義で、死へのプロセスなどについて少しずつ教える傾向が出てきました。死の教育学会といつたものが出来てくれば、流れが変わってくるでしょう。

▼苦しみ悲しみを引き受けぬことの幸福に

河合 柳田邦男さんが話していたことですが、5歳の坊やが2歳の弟を亡くして悲しんでいる時、小児科の先生がスーザン・ソングの絵本と一緒に読んでくれたのを、ずっと忘れることなく心にとめていたということです。小児科の先生の大きいでしょうが、その子が小学5年生になって、そのことを柳田さんに話したというのです。5歳の子供だから（生と死について）分からないということはないのですね。

柏木 10歳の時に母をがんで亡くしたという50歳ぐらいの方から手紙をもらったのですが、その方は、幼いから母親の病状を知らされていなかったため、

心の準備がない状態で母の死を迎え、大変つらい思いをしたという。死を迎えるのは現実だから、心の準備をして家族全員で肉親の死を迎えたかったのに、と。つらいことをシェアする、という意識を持たせるのも教育だと思います。

河合 隠すこと（が良いこと）だと思っているが間違いです。つらいこと、苦しいことを避けることは出来ない。実際に、そのような悲しみに遭遇すると、一生、背負っていかねければならない。5歳の子供でも、それをちゃんと受け止めているのですから。

柏木 この対談のタイトルが「心の世紀における『いのち』の教育」ということですが、タイトルから感じることに、先生の思いを最後に一言。

河合 今、話してきたことが、そのままタイトルに当てはまると思いますが、心やいのちがかかわることには、苦しみや悲しみが関係してくる。それが必要であるなら引き受け、そのことから幸福が生まれてくるのだ、と思います。そのことを体験して、知ってもらうことが教育でしょうね。

柏木 避けずに一緒にシェアしましょう、引き受けましょうということが大事ということですね。貴重なお話、ありがとうございます。

「大学と社会」

「どうする?」転換期の大学

技術・製品開発に大学と企業が共同で取り組む産学連携や郊外に移転した大学を都心に呼び戻し、知的インフラの集積で都市再生を図ろうとする動きが最近、特に顕著になってきた。取り巻く環境が大きく変化、知のセンターと言われる大学も転換期を迎えている。大学自身の変革とともに企業、行政を含めた地域社会とどのように共存していけばよいのか。大阪大学名誉教授で劇作家の山崎正和・東亜大学学長と哲学者である鷺田清一・大阪大学大学院文学研究科教授に「大学と社会」をテーマに語ってもらった。

●対談

- 劇作家／東亜大学学長

山崎正和 ————— Masakazu Yamazaki

- 大阪大学文学研究科教授

鷺田清一 ————— Kiyokazu Washida



〔阪大ニュースレター No.17〕2002/秋号 掲載
2002 (平成14) 年9月1日発行

大学の大きな機能としては、
法律に定める教育・研究と、もう一つは
一般社会の知的水準を支える機能があります。

▼表現JUNJUN

鷺田 山崎さんは教育について多く書かれています
が、その中で心を打たれた文章が二つあります。

一つは、戦後の満州で、窓のない倉庫のような仮
設教室で、免許も持たない大人にルターの伝記だけ
を語ってもらったり、ラヴェルの「水の戯れ」を聴
かせてもらった。そこには大人たちの「知る限りの
すべてを語り継がないではいられない」といった疼
きがありました。もう一つは、最近、書かれた東亜
大学での授業の話です。学生に、体を動かし、声を
出させる授業をしておられる。大学の通常の講義と
は違うかもしれませんが、それは、人として生きて
行くうえで基礎になる大切なことです。この二つの
ことに、教育の原点があるように思うのです。そこ
で、初等教育を含めた教育について、先生がイメー
ジされていることをお聞かせください。

山崎 私は、教えるという言葉は、あまり好きでは
ありません。教えるとか、育てるといったことは、自
分が上にいて、疑うことなく、自分が学生より賢い
ということを前提にしています。しかも、それは制
度の中で考えられていますよね。

私が信じることは、自分を表現することです。そ
の背景には、学問の広がりがあつて、学問を身に付
けている人を教師というのですが、制度の中に
教育を置くと、教育というものは弱まってしまふ。
建前に隠れて、教師は学問を伝えるスピーカー、あ
るいは、教科書になりがちです。（それに対し）表現
することは、責任を取るの自分しかない、自分は
理解されないかもしれないということを含んでいま
す。それは人間社会では当たり前前で、その中で、
どのようにしてコミュニケーションを図るかが
大事なことだと思います。

鷺田 教育においては、教え、教えられる関係の中
で伝えられるもの、その知識内容も大切ですが、そ
れ以上に、伝えるというアクションがあるというこ
とですね。

山崎 私も鷺田さんもそうですが、大学で教える以
外に社会に向かつていろんなことを書いている。一
般読者を対象にしているとか、ポキャブラリー一つを
とつても、説明しないと前へ進まない。それが表現
ですよ。教育ではない。そういう仕事をしている人
は大学の中では、かつては、どこか孤独感に包まれ
ざるを得なかった。それは、日本の大学には、長ら
くジャーナリズムを軽蔑する風潮があつたからです。
私の阪大在職中には、文学賞とか評論に対する賞を
受けると、よくやった、と認められるようになりま
したが、それよりずっと以前は、商業的にモノを書
いてけしからん、大衆に迎合して学問を冒瀆してい
る、と言わんばかりの雰囲気がありました。
それが「象牙の塔」だとしたら、教育そのものを毒
していたことになりました。

鷺田さんと私とでは、世代が一回り以上も違いま
すが、私が大学生のころ、講義ノートを丸読みする
先生がいて、内容を学生が理解しようがしまいがお
構いなし。そこには、コミュニケーションに対する
意欲とか切実さが全くなかった。それが、「象牙の
塔」だった。その裏返しとして、ジャーナリズムを
軽蔑していたということです。今は、その雰囲気は
薄まっていますね。

鷺田 山崎さんは阪大在職中、大学での演劇学に関
する研究者の養成だけでなく、宝塚北高校演劇科の
指導をされるなど、社会の中で市民として生きて行
くために一番必要なものを演劇を通して伝えておら
れたのではないですか。

山崎 大学の問題というより、教育システムの問題



かもしれないが、戦後、表現ということを誤解している面があります。胸の中に溜まっているモヤモヤをバケツの水でも汲み出すように、外に投げ出すことだ、ととらえられているが、そうではない。昔、学校で行っていた国語の暗誦とか、作法のような基礎的な教育をあるレベルまではやるべきではないでしょうか。名文を暗誦すると、文体が体にしみつき、応用が利くようになる。作法も相手を快くさせる。大学でやるべきことではないと思いますがね…。表現も、話し手の自分が、内部の感情、意見を述べることで、自分を発見することです。大学特有の問題でなく、社会の仕組みの問題なのではないでしょうか。

▼大学の第三の機能

鷺田 大学の研究に対する国の評価にも問題があります。

山崎 大学の大きな機能としては、法律に定める教育・研究と、もう一つは一般社会の知的水準を支える機能があります。三番目の機能は、法律に謳ってもしよほど大事だと思う。地域の文化活動や知的活動に参加するとか、研究を通じて地域社会に貢献するなど、今もいろいろされているが、大学が社会のリーダーシップになる場面が、今後、もっと増えてくるでしょうね。

鷺田 大学に社会貢献が求められるのは当然のことですが、具体的にどのように行い、認められるかが問題です。社会貢献と言えば、産学連携だけの狭い面で語られているところがあります。産業の活性化やベンチャーを起すことも重要なことですが、それは一面です。「象牙の塔」にこもることに賛成しませんが、大学の学問が必ずしも産業と連携するのではなく、市民の生活と結び付くような開かれ方なくてはならないと思います。文系はもちろん理系に



鷺田清一 教授

「分からない」という価値が今、
薄っぺらになっている。
大学は分からないことに必死に
取り組んでいる先端的な場所。

ついても言えることですが。

今、ヨーロッパで起こっている大学と社会とのつながりの一つにコンセンサス会議というのがあります。遺伝子操作とかごみ処理など公共的に重要で、現代のテクノロジーが深くかわるような問題をめぐって専門家と一般市民が議論し合う会議のことで。その会議には、科学の専門領域に関することを一般市民に理解してもらうために、科学ジャーナリスト、学者が加わっています。双方をつなぐ媒体として相互理解をスムーズに行う役を果たしているのです。大学は行政の示したデータに検討を加えて提示することができる。市民自身も問題の本質をとらえることで、行政に政策提案をすることができる。

このように、市民の自由につながる研究の自由が大学には、もっとあってよいと思うのです。

山崎 それを、人生一般の問題に拡大すれば、鷺田さんがおっしゃっている臨床哲学ということですね。今の話を聞いて、非常に大事なことだと思ふのは、そのプロセスを通じて専門家の持っている独善性とか視野の狭さが克服できること。と同時に、現代社会で一番危険なポピュリズム、つまり、お神輿を担いでどこへ行ってしまいか分からないような、世論の制御装置にもなりますね。どちらも21世紀の重要な問題である。

最近、総理の諮問機関に学者がよく加わっています。あれは官僚と一般市民との媒介役をしているわけです。その人たちが蓄え、研鑽の場を与えている機関として大学はあるのです。大学の使命として、公開講座とか市民講座にかかわることも大事ですが、それ以外の分野で機能を果たすことのほうが大事じゃないかな。

鷺田 欧米の大学には科学相談所（サイエンス・シヨップ）というのがあります。現代の科学技術が市

民生活にもたらすいろいろな問題についてアドバイスしたり、共同で問題解決にあたったりするために機能している、それが教育の一環になっているのです。

山崎 それは、面白い。

▼会話と対話と鼎話

鷺田 01年行った阪大創立70周年記念事業のシンポジウムで、ゲストにお迎えした劇作家の平田オリザさん（桜美林大学文学部助教授）はこの数年、各地の高校を回り、国語の授業で対話のレッスンを展開していますが、対話と会話を区別しています。気心の知れた者同士の話し合いを会話、気心の知れない者同士の話し合いを対話と定義づけています。日本人は会話には有能で、政治も経済の世界も阿吽の呼吸でコミュニケーションが保たれている。しかし、これからの社会では対話がますます重要視されるようになりそうです。都市生活もそうです。出身も育った環境・文化も違い、共有するものが乏しい人たちが、しかも対話を通じて一つの社会を運営していかねばならない。平田さんは高校生に見ず知らずの他人に話し掛ける劇を演じさせることで対話を学ばせているのです。

山崎 私も、ほぼ同じことを少し前から言っています。対話と鼎話で、私の言う対話は、一対一の話し合い。平田さんの会話に近いかもしれない。鼎話はそれにもう一人、第三者が加わる。私と鷺田さんのこの対話には第三者が内容を記録している。それが活字になる。第三者が入り、対話が三角形になると違ったものになる。そこから社会性、公共性、客観性につながっていく。舞台での第三者は観客。演じていることが観客に伝わってはじめて鼎話になります。

鷺田 平田さんの会話の発想も同じで、はじめは一対一、それに第三者が加わってくる。そのことで会



山崎正和氏

社会人の学生が入ってくると
(講義は) ガラッと変わると思う。
そうすると、教師も緊張する。
それが、今後の大学に必要なと思う。

話の質の変化をみていくわけですね。

▼大学の講義

山崎 これまでの大学の講義は、知識の一方通行で、教師と学生は、私の言う鼎話になっていない。第三の目がない。これが重要なことだと思うようになりまし。学生は強制された聴衆とでもいうか、講義から逃げることはできない。単位を取るためにはレポートを書かなければならないですから。しかし、ここに第三者が入って、今の話は何ですか、と質問すると教師は動揺するでしょうね。それが、今後の大学に必要な。社会人の学生が入ってくると(講義は)ガラッと変わると思う。社会人は社会的経験と年齢の持つ重みがあり、一般の学生とは違います。傍観者ではないが一步離れた姿勢を示すでしょう。そうすると、教師も緊張する。ここに鼎話が生まれてきます。

もう一つは、今、話題になっている外部評価ですが、難しいことをしないで教室に市民を受け入れたい、と思いますね。東亜大学でテレビを使った通信教育をしています。学生の資質、経歴を勘定に入らずに講義をしないといけない。誰が聴いているかも分からないので、これは自動的な外部評価装置です。撮影も大変。1時間授業をするのに、撮り直し、撮り直して10時間以上もかかった先生もいました。一つの実験ですね、これは。全体に通信教育を広げようとは思いませんが、大学の授業は密室的すぎますよ。

▼大学とまち

鷺田 大学は知のセンターと言われますが、知の場所には街もあります。そのあいだのつながりは、これまで大変難しかったですよ。それに日本の多く

の大学は都市から郊外に移っていった。大阪大学もそうです。理系は実験設備などの問題があつてやむを得ないところがあるが、人文社会系の学問は街から学ぶことがとても多い。郊外の人工的な場所では人文系の学問は成り立つのだろうか、と不安に思うことがあります。

山崎 その通り。大阪の街が魅力を持たないとしたら、それは、大学町がないことです。もう一つ、大阪の大学に不幸なことは、周りに赤提灯がないことです。法に基づく政策として郊外へ移したことは間違いなかった。実際、東京では都市への還流が始まっています。ところで、大阪の中心地に第三のキャンパス構想があるようです。

鷺田 医学部跡地に大阪大学中之島センターを建設する計画で、具体的な取り組みに入っています。

山崎 それはよかったです。大学を社会になが活動をやっていただきたいですね。阪大出版会にも力を入れて、良い本も出してもらいたい。経済のマーケットは、関西は東京の10分の1ですが、大学と学者は違います。関西の知的集約度はかなり高いですよ。発信の方法をもう少し考えてもらいたいですね。

▼大学の今後

鷺田 京阪神は変わった都市の集まりです。人口100万以上の都市のあいだを日帰りができるのに、文化が異なつて、なかなか仲良くしない。このように異なる個性を持った大都市がごく近くで競合し合っているのは世界でも珍しい。大学がもっと進んで開放的にならなければならないのですが、ところで、大学で一番大きな変化は、限られたエリアの場ではなく、高校生のほぼ半数が行く場所になったということです。これが大学のあり方を決定的に変えてきたように思います。

山崎 私は、それを身にしみて感じています。ある程度の棲み分けは、やむを得ないと思う。志望すれば全員入学を認めるようなことはしないで、一定の水準にある大学は、その質を維持していくべきです。開かれた大学、と先ほどから繰り返しているが、これは大変難しい問題です。一面では大学は閉じられるべきものです。学問の質を高め、学問の自由を守っていくには、世論がいつも直接的に入ってくる状況であってはいけない。大学が外へ開いて行くのはよいが、大学の中へ、外から無制限に、配慮をしないで受け入れてしまうと学問は死んでしまう。そこが非常に微妙で難しい。学問を時事問題と一緒にしてはいけない。その兼ね合いが難しい。

鷺田 「分からない」という価値が今、薄っぺらになっていく。どういうことかと言えば、大学は分からないことに必死に取り組んでいる先端的な場所、分らないことにチャレンジするのが学問なのに、むしろ、すぐに分かることを良しとする風潮になってきている。それが、大学の緊張感を殺いでしまっているように思います。大学の面白さは、分からないことに向き合うということにあるのに。

山崎 しかし、分からないことに取り組んでいることが良いことだと、居直ってしまっている。簡単に割り切れるものではない。だからこそ、大学人相互の乗り入れが必要ですね。先ほど話した、社会人を大学に受け入れることは別の意味でね。

最近、こういうことが出来ないかなと思うことがあります。大阪、神戸、京都に水準のよく似た、しかも国立の大学があるので、人事交流を積極的に

に行う。人事の相互乗り入れですね。夢物語のようですが、5年ごとに三つの大学で教師を総入れ替えするとか。これぐらい思い切ったことをすれば、大学はもつと変わるでしょうね。これは、現代文明の大問題でしょうが、今は、待てばいい、がなくなりました。すぐに答えや行動を欲しがります。大学も改革をしなければならぬが、改革をあわてると、金の卵を産むニワトリを殺してしまうことにもなりかねません。

鷺田 冒頭でご紹介した東亜大学の山崎さんの試みは、偏差値の高い大学でも必要だと思えます。オレの背中を見ておればよい、という教育では成り立たなくなっています。一時期、ここまで学生にサードビスしなくてはと、戸惑ったことがあります。この問題を考えるには、図書館にこういう本があるからというふうには本の探し方まで教えて……。しかし、問題に直面した時に、どのように理解し、どのように表現し、解決の方法を見いだしていくのかという骨格にあることを伝えていなければならない、という思いがありまして、だから、読むこと、書くこと、話すこと、聴くことを含めて一番基本的な表現とコミュニケーションの形を大学で教えるなだけだと思っています。問題が起きた時、分かるものだけで勝負しようとする傾向が強くなっていますので、特にそう感じます。

教育上の問題とは別に、もう一つ気になるのは、身近な環境、身の回りのことで、人工的な都市空間の中で生活する我々は自分の身体の使い方すら、よく分からなくなっているのではないかと感じるとき

があります。最近、子供たちの間にみられる、じつとしておれない多動性障害もその一つかもしれませんが。以前は、ゆるみのある環境、遊びの中で心身の動きが自然に調整されていたが、それをリハビリで矯正しようとしていたりしている。大学でもこのようなことが顕在化してきているのではないかと思います。私は、命のベータシフトと言っていますが……。

山崎 混沌の時代でしょうか。だからといって、昔は良かったとは言えないが、これが人間の歴史でしょうね。いろんな環境は文明の産物ですから、ある面を直すと、別のことが起こってくるものだと思います。

▼阪大を振り返って

鷺田 山崎さんは、阪大で長年にわたって演劇学を教えられました。最後に、当手を振り返ってのご感想を。

山崎 私は20年間、阪大で演劇学を担当しましたが、演劇学は学問としては非常に若く、社会的にも成長の途上にありました。演劇科の学生でも、大学入学までに自分のお金で芝居を見に行った者は半分以下でした。演劇とは何かから説明しなければならなかった。私には勉強になりました。若い専攻だったので、逆説的に幸せだったということ。楽しかったのは、教師は他大学出身者が多かったこと。阪大出身の優秀な人も多かったが、いわゆる純粋培養でなかった。そのことが、阪大文学部を明るくしていたと思いますね。

「どうなる? 法曹界」

21世紀の日本を担う—— 企業社会・法曹界を支える人材養成について

次代を担う法律家を専門に養成する法科大学院（ロースクール）の2004年4月開設に向けた各大学の取り組みが活発。大阪大学でも設置を想定した具体的なプランの作成に着手している。多様化する社会の法的需要に応えるための法曹人口の質と量の確保を目的とした新制度にどう対応すればよいのか。津田和明・サントリー株式会社相談役、中野貞一郎・大阪大学名誉教授（弁護士）、多胡圭一・大阪大学大学院法学研究科長に、21世紀を支える——企業・法曹界を担う人材の養成をテーマに語ってもらった。

●座談会

- サントリー株式会社相談役／前関西経済同友会代表幹事／文化審議会委員
津田和明 ————— *Kazuaki Tsuda*
- 弁護士／日本学士院会員／大阪大学名誉教授
中野貞一郎 ————— *Teiichiro nakano*
- 大阪大学法学研究科長
多胡圭一 ————— *Keiichi Tago*
- 司会進行 池田辰夫・大阪大学法学研究科教授 ————— *Tatsuo Ikeda*



【阪大ニュースレター No.18】 2002／冬号 掲載
2002（平成14）年12月1日発行



何をするにも根っこは情熱だと思います。
情熱をどう引き出すかでしょうね。



多胡圭一 法学研究科長

▼阪大法科大学院構想

——米国のロースクールを一つのモデルにした法科大学院の設置法が決まり、開設はいよいよ現実味を帯びてきました。

多胡 ご存じのとおり、法科大学院は政府の司法制度改革審議会が21世紀の法律家養成はどうあるべきか等を議論する中で出てきた構想です。法体系や理論から実践まで、少数数の実務教育を行い、視野の広い法律家の養成を目指そうというものが基本理念です。国立大学の独立法人化が同時にスタートしますが、法科大学院は今後の大学改革を展望する一つの試金石、あるいはそれを象徴するものと言えるでしょう。

——大阪大学としてのプランの現状はいかがですか。
多胡 法科大学院を独立の専門大学院とし、3年制

コースを基本に、短縮コースとして2年制も設けます。学生の定員は100人で、法学部・非法学部出身者、社会人も受け入れ、法律知識を身につけている学生は筆記試験をして2年制コースを選択する場合もあります。大学院修了者の70〜80%は司法試験に合格してもらおう計画です。定員を1000人にしたのは、10年後、わが国の法曹人口は毎年30000人、現在の約3倍に増えるとの予想を踏まえたものです。大阪大学の司法試験合格者数は毎年33人〜35人ですから、それをベースに計算したものです。

▼特色は二

中野 お話を伺って、いま、阪大法学部が大きな変動の中にあること、そして、大阪大学法科大学院の立ち上げが着々と進められていることがよく分かりました。

多胡 阪大法科大学院構想には特色が二つあります。一つは地元・大阪産業界と大阪大学との密接なこれまでの関係から企業や取引などを中心とする企業法務、ビジネス法に力を入れることです。もう一つは、国際関係法を充実し、国際的に通用する法曹の人材養成をすることに力点を置いています。これはロースクール構想が生まれた要因の一つでもあり、社会的な要請に応えるもので、教育に特化する形で専門職大学院として高度専門職業人を養成するという位置付けです。

▼法科大学院構想の背景

——法科大学院開設に向けての作業は今後ますます加速してきますが、現状をどう見ておられますか。

中野 今は、二つの大きな流れがぶつかつて沸き返っているのだと思います。一つは、大学での法学教育と裁判所での実務教育を全く別々に行ってきた従



中野貞一郎氏

21世紀には、
日本の「国のかたち」も変わっていく。
広い視野と深い教養と高度の専門性を持つ
法曹が要求されています。

来の体制を変革していこうという流れです。もう一つは、それに関連しますが、法曹人口の希薄による訴訟遅延などの弊害をなくしていこうということです。これは、本当にあった話ですが、ある大学の法学部で30年も民事訴訟法を教えていた教授が、定年退職して弁護士になり借金取り立ての訴状を裁判所に提出したところ不備があつて突き返されてしまった。訴えや判決についての理論を長年、学生に教えてきた先生が実際には訴状も出せないというようなことで、法学部を卒業しただけの学生が実際に役立つはずがありません。このように、大学の法学教育と実務教育の分離を日本では実施してきたのです。――経済がグローバル化する中で法曹の役割という点もあり、さまざまな要因も加わって国も本格的に制度的な取り組みを開始しました。

中野 直接、導火線になったのは日本における規制

緩和の広がりです。それによって企業は、さまざまな規制に縛られることなく、法を守って自由で公正な競争によって活動すればよい、ということになった。その代わり、違法な、あるいは不正な行為に対しては司法の領域で救済するから心配するな、ということになったのですが、その司法が十分に機能していない。何よりも、必要な法曹の数が足りない。かといって、大学の法学教育は法曹養成教育ではないし、今のままの司法試験合格者を数だけを増やしても能力的に問題があります。そこで、司法制度審議会から提案されたのが、多胡さんから先に説明のあった「法曹養成に特化した教育を行うプロフェッショナル・スクール」としての法科大学院構想です。よね。

▼一般論としての法曹界全般について

――津田さんは、内閣府の都市再生審議会委員や大阪府の教育委員もしておられますが、企業人としてこの構想に対する感想はいかがですか。

津田 企業人に限定しないで、一般人からみても今の日本の裁判に対して不満点が三つあります。一つは裁判が長すぎることです。意匠登録の係争中に双方の企業の商品が市場からなくなってしまうことがあります。これでは訴訟を起こした意味がない。長すぎる裁判の弊害の一例です。二つ目は、判決の中には社会常識に照らすとおかしいと思うようなケースがあります。こんなことがあります。26年間発生数で日本一を続けている大阪のひったくり件数を減らすための取締条例制定について審議する過程で、金属バットや鉄棒を暴走族が隠し持っていたら罪になるが、公然と屋根の上に置いておくと罪にならない、と真面目に主張する法律専門の方がおられた。一般人から見れば、おかしいことでも、そうは

思わないのです。何のための法律かを考えないで物事を判断するようでは困ります。そんな法律家を育てているのが法学教育であるとすれば疑問です。三つ目は、弁護士費用が高すぎることです。知り合いのゴルフ場が民事再生法の適用を受けるため弁護士に相談したら費用に1億円もかかると言われたそうです。同じように民事再生法の適用を受けた友人に相談すると3000万円で請け負ってくれる弁護士を紹介された。優秀な弁護士で手続きが順当に進んでいるそうです。いずれにしても、経営危機にさらされている企業には負担が大きすぎますよ。アメリカやイギリスのように能力に応じて報酬を得られるよう、弁護士の間で厳しい競争があるべきでしょう。法科大学院の目指している方向が、三つの問題を解決するための法律家育成システムを作ろうとしている点では賛同できます。

中野 世界中で、こんなに法学部が多くある国はありません。それなのに、こんなに法律家が少ない国もあります。法曹人口が極端に貧弱です。裁判官が一番ひどい。弁護士は増えてきましたが、裁判官・検察官・弁護士を合わせた法曹人口でみると、国民10万人に対して法曹は18人ぐらいいいかいませぬ。法曹人口比率はアメリカの20分の1、イギリスやドイツの10分の1です。この法曹人口の希薄が、訴訟遅延やその他の弊害をもたらしているわけです。——法曹は紛争解決の担い手です。日本でも、法化現象が顕著になってきました。また、国際社会では法的な解決の枠組みが明確です。それに見合う法学教育としては、まだまだ十分ではありません。津田 裁判がいかに大きな力を持っていたかを歴史的にみることもできます。例えば、鎌倉幕府の成立は、従来の公家政治が自分たちに有利なように不公平な裁定をしていたのに対し、御家人たちが領地争

いを収める公平な裁判を源朝の幕府に期待して出来たものともいえます。欲と意地の突っ張り合いを続けていては破滅する、と感じていたのでしよう。その裁きは時には妥協の産物であったかもしれないが、最大権力の決定権ではないでしょうか。国際社会では、土地に帰属する問題とは異なるでしょうが、本質的には同じことでしょう。裁判はどこまで行っても最後は人間が判断するものですから、国際間の争いでも法律の専門知識に加えて政治、経済を含めた

国際感覚、バランス感覚も求められる。そう考えると、法律の知識だけを教えるだけでなく、学生には外国との「他流試合」、交流が必要。そうでないと国際的な法律家は育たないような気がします。

▼法学部・法学研究所と法科大学院

——良い指摘をいただきました。学部教育の有り様そして法科大学院を含めた大阪大学全体の法学教育を今後どうするかにもかかわってきます。

中野 大阪大学法学部は有望な人材を多く送り出し、社会に貢献してきましたが、法科大学院の設置で従来からの法学部、法学研究所はどうなるのでしょうか。

多胡 具体的な議論はこれからですが法学部・法学研究所は残ります。法学部の中で法科大学院として機能する部分は移行するでしょうが、人材養成など



池田辰夫 教授

学部教育と法科大学院、
役割分担、棲み分けをどうするかが
大きな問題です。



津田和明氏

法律の知識だけを教えるだけでなく、
学生には外国との“他流試合”、交流が必要。
そうでないと国際的な法律家は育たない。

従来、果たしてきた法学部固有の役割がありますので、カリキュラムを一部変えるなど改革をしながら時代に合った形にしていきたい。

中野 法科大学院は、実務に特化した高度専門職業人としての法律家養成が目的であるとしても、やはり、法理論をキッチリと修得しないとイケないし、学問を継承していく研究者の養成も必要。とすると、理論面での発展をどこに期待するのか、そのあたりは、どうなるのでしょうか。

—— 役割分担、棲み分けをどうするかが大きな問題です。法科大学院での2、3年で具体的な枝葉の部分までスキルを高められるかどうか。アフタケアとして修了後の継続研修（CLE）についても検討しなければなりません。

津田 私は昭和32（1957）年の卒業ですが、同期も含め産業界で活躍しておられる阪大出身者は実

に多い。大阪大学ではバランス感覚や基本的な考え方を教えてもらったことが、一つの要因だと思います。ハウトゥーものでなく、基本を身につけていると社会に出てから伸びますね。阪大の教育は、基本的には昔も今も変わりはないでしょうから先生たちは自分たちの教育に自信を持ち続けてほしい。それと、4年間の学生生活で何かに集中して一生懸命やると、社会人になって必ず役立ちます。ですから、時流だといって、法学部の学部教育は実務に偏った教育をする必要はないと思います。学部教育と法科大学院とは区別すべきです。両者の違いを考えて着地を間違わないようにしないと法曹界が抱えている問題解決にはならない。

—— 法曹界との連携についてはどうでしょうか。

中野 法科大学院の目的からすると、教官は法曹資格を有し、数年以上の実務経験者であることが望ましい。実務を経験すると、今まで見えなかったものが見えてきます。事件処理に直結した講義とともに法科大学院附属のクリニック、臨床的な実務訓練施設も必要ではないでしょうか。多くの卒業生弁護士が参加して活動している阪大の法律相談部を活用するとか、大阪弁護士会の仲裁センターや財団法人法律扶助協会の活動と連携すれば学生の勉強になりますよ。

多胡 可能な限り社会とのチャネルを持って、社会貢献に結び付けていかなければと考えています。—— 産業界との連携についてはいかがですか。

津田 阪大経済学部は早くから大阪経済界との関係は良好です。法学部も最近では関係が密になりはじめました。特に、法科大学院構想の一件でかつてないほど距離は縮まっています。産業界の変化は極めて激しくなっています。特に、国際化によって加速しているのです。うっかりすると現実と乖離してしまう

恐れがあります。産学は一定の距離は必要だが、国際競争に生き残るためにも、情報の交換を密接にしていく必要があります。

▼期待される人材養成

——民商事に絡む事件は、現在、約15秒間に1件の割合で裁判所に持ち込まれています。その意味で、日本の社会も随分と「訴訟社会」になってきました。そこで法科大学院に期待されるクオリティーの高い法曹をどのように養成していくべきかなどについて、「ご意見を聞かせてください。」

津田 とにかく裁判の迅速化ですね。経済事件は6カ月、長くても1年で結審をしてもらいたい。年が明けると新しい経済活動が始まるわけですから、それ以上長引くと経済に支障をきたします。すべての裁判にレベルの高い法曹の判断を求めなくても済むような制度にならないのでしょうか。

多胡 阪大法学部には優秀な学生が多いのですが、この学生にどのように期待される人材教育をしたら

よいのか、あるいは、大学として学生たちに何をしなければよいのか、その点で十分自覚できない部分もあるのですが。

津田 日本の戦後教育の中で一番良くないのは、結果平等主義の教育をしてきたことです。機会が平等に与えないといけないが、能力のある者にはその能力を伸ばすような教育をしてあげないといけない。大阪大学は全学挙げて国のため、社会のために役立つエリート育てるのだ、ということをもっと大きな声で（社会に向けて）言えばよい。同時にエリートに必要な責任についての教育を強くすることです。

それと、柔らかな頭が必要。今日は良くて明日が悪いということが、これからの世の中には起こり得る。それを認める頭の切り替え、柔軟性が求められます。法律家の一部の先生には柔軟性に欠ける人がいますね。民衆・大衆の立場というか、事なかれ主義の行政の立場を優先的に考えたり、意外と頭が固いですよ。学生にはディベート能力を習得させることも大事です。社会では役に立つことですから。

多胡 おっしゃる通りだと思います。個人的な見解ですが、何をするにも根っこは情熱だと思います。学生はさまざまな思い、情熱を持って阪大に入学してくるのですから、それを阻害しないでどう引き出すかですね。その点も含め、締めくくりとしては中野先生の考えはいいかなものではない。

中野 そうですね。21世紀には、日本の「国のかたち」も変わっていく。変わっていくかざるを得ない。世界的規模での競争のなかで、広い視野と深い教養と高度の専門性を持つ法曹が要求されていると思っています。改革とか改変という、若い人たちには、先の見えない不安が先立つかもしれませんが、これまでになかった新しい希望が大きく湧き上がってくる時代でもあるわけですね。教育の一方通行でなく、教官と学生が協同して自発的な努力を縦横に伸ばしていく。そのようにして、阪大のモットーである「地域に生き世界に伸びる」多くの人材を、立派に育成していくってほしいと思います。

「どこへ行く、 何をを目指すのか——大学？」

21世紀のあるべき大学像

大学は今、大きな曲がり角に来ている。大学の大量化が進み、エリート教育の場から様相は一変。このままの状態で推移すれば、危惧される学力低下に拍車がかかる。

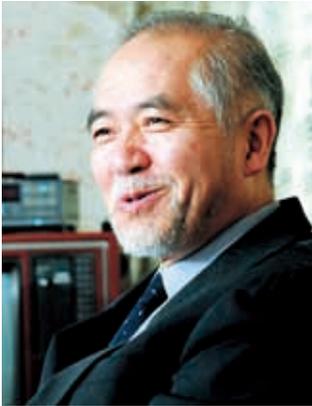
一方、人間形成に必要な教養教育の見直しや、国際社会に通用する人材の養成という社会的なニーズに応えるための大命題である教育の質の向上、さらに、社会貢献が求められている。大転換期に直面し、「21世紀のあるべき大学像」をテーマに座談会を開催、大阪大学の歴史を回顧しながら、今後の進むべき方向を探った。

●座談会

- 大阪大学副学長
宮西正宜 ————— *Masayoshi Miyanisbi*
- 大阪大学附属図書館長
川北 稔 ————— *Minoru Kawakita*
- 大阪大学文学研究科教授
鷺田清一 ————— *Kiyokazu Wasbida*
- 大阪大学情報科学研究科長
宮原秀夫 ————— *Hideo Miyabara*
- 大阪大学核物理研究センター長
土岐 博 ————— *Hirosbi Toki*

【阪大ニュースレター No.19】 2003/春号 掲載
2003 (平成15) 年3月1日発行





宮西正宜 副学長

私たちの学生の頃は大学には
こんな立派な先生がおられる、
ということが話題になった。
先生の顔が見えていました。それが今はない。

▼日本の大学と創立時の大阪大学

宮西 大学の持っている伝統的な役割について話を伺う前に、大阪大学の源流である江戸期の懐徳堂、適塾に少し触れたい。金森（順次郎）先生（13代総長）が書かれた本に、町人の教育機関として生まれた自由な学風の懐徳堂は、無駄を剥ぎ取り、最終的に合理精神の確立まで至っていると記しています。緒方洪庵が開いた適塾は、福沢諭吉ら近代日本を切り開いた人材を輩出し、蘭学、医学を通して西洋文明にアプローチしたのだと思います。それは大阪大学のモットー、「地域に生き世界に伸びる」にかかわってきますが、実学の精神で、自分たちの持つている日本的な精神と外の世界、特に西洋文明をつなげる役目を果たそうと努力してきました。それが成熟して現在にまで至っている。大阪大学が発展できたのは、そういう方向性をとってきたからだと思うのです。
川北 その通りでしょうね。だからこそ、大学は今、曲がり角に差しかかっていると思います。西洋に追いつくことを目標にした時代が終わったということは、日本と西洋文明との関係が変わってきているわけで、日本の大学も変わらなれないといけない時に来ているということでしょう。
鷺田 これは、日本の科学技術を考えるうえでの挿話の一つですが、ドイツの学者が日本の街を歩いていて、「科学が遊戯とつながっている」と面白がったことがあります。そう言えば、ゲームセンター、家電製品、インターネット、みんな科学技術で遊んでいる。科学と技術がきっちり分かれていないところが日本の面白い特徴で、それが、今、意味を持ってきています。というのは、現在の科学技術研究の先端的な部分は、基礎と応用の区別が成り立たない所に変化している。世界中の大学は、今、基礎か応用、



文系か理系という古いヨーロッパ的な学問の制度の枠組みを超えたところで社会の問題、学問の問題に取り組んでいかなければならない時代に来ているということでしょう。
宮西 大阪大学は、大阪という土地のせいでしょうか、科学と技術の分離をあまり意識しなかったように思います。医学部と同時にスタートした理学部は、模倣的な工業からの脱皮には「基礎的純正理化学」の力という先見性と危機感から数学、物理、化学の3学科で1931年に創立された。「科学」でなく「化学」としたのは日本独自のもので、1929年の世界大恐慌による苦境を打破するための道具として



鷺田清一 教授

総合大学は、エキスパート養成の場所として
ふさわしいのかどうか、
疑わしくなってきたように思います。

導入されたとも考えられるのです。

土岐 大阪大学理学部在職中に出版された湯川（秀樹）先生の中間子論に対し、同じ理学部の菊池（正士）先生は、見向きもせず、原子核の内部を探るサイクロトロンに集中して日本唯一のものを建設された。そこに面白い神髄があっても、人がどう言おうとも自分はこれをやる、と。そこにも遊びの心があつたのでしようね。お互いを評価しないというか、それが自由人であつたということです。その意識は今日まで続いていると思います。

宮西 忘れてならないことは、サイクロトロンを理学部研究所に先駆け日本で最初に造ることが出来たのは、関西財界（東洋紡・財団法人谷口工業奨励会）の寄付によるところが大きかったということです。大阪人が科学技術に力を入れていた証拠ですよ。

川北 東京と関西の違いですね。阪大の場合には、特に地域社会とのつながりが強く、実学的なものがありました。

鷺田 古典学と先端科学の良い関係ということでは二つあります。一つは湯川先生が莊子など中国の古典哲学を発想の源にしたということです。もう一つは、戦前の大阪大学医学部に哲学の専任講師がおられたことです。生命倫理は今では当たり前ですが、医療哲学というその先端的な発想はすごい、今から考えると驚きです。

土岐 初代総長の長岡半太郎先生がよく言われたのは「糟粕を嘗むる勿れ」でした。オリジナリティーを大事にしろ、という意味ですが、大阪大学の伝統を築く重要な役割を果たされたと思います。菊池先生も、二番煎じにならないように、一つのこと集中したからサイクロトロンが出来たのかもしれない。ところが、私たち、戦後育ちの世代には習うという感覚が強い。日本は二番煎じでよい、という感じで

す。（戦前の精神が、）どこかで切れてしまったのかな、との思いがします。そして、今、これではいけない、と議論されている。これはゼネラル（全般的）なことですが、大阪大学はオリジナリティーを強く意識していると感じます。大阪大学はそういう役割を担っているのです。

宮西 戦前と戦後教育の断絶というか、隔絶を感じますね。

▼変わり行く大学

宮原 歴史的に見て大学は、社会をリードしてきたと思う。ところが、今の大学は社会の激しい変化についていけず、社会の要求をちゃんと受け入れていない。社会が要求する人材を十分に輩出しているとは思えない。システムのな問題もあるが、社会に先行する方策を立てないといけない。

宮西 戦後の大学は産業の拡大という流れと切り離して論じることは出来ない。社会的な要請、経済的な要請から、基本的には、大学は高度知識を有する労働者を養成する機能を負わされてきた部分があつて、それが大学を変えていったのも事実です。阪大も工学系の拡充はそれが原因の一つです。それなのに、大学の知の社会への還元が十分でないと言われている。大学はかなり外側から影響を受けるようになってきたと感じますね。

宮原 大学の役割、何をやる所か、と考えると、研究・教育の場、知性を磨く所でしょう。そして、その「知」も一つの大学の「知」だけでなく、いろいろな大学の「知」のネットワーク化を図ることが必要かもしれません。

鷺田 大学が「知」とどうかかわるかは別にして、「知」を考える時に、三つぐらいのレベルがあると思います。一つは通常Knowledge（知識、学問）、いわ

基礎と応用、あるいは文系の学問と理系の学問など、
これまでの区分けで考えるだけでなく、
総合大学だからこそできる教育も
考えていく必要があります。



川北 稔 附属図書館長

日本の大学は、
社会の評価を受け止めるシステムがない。
独自のシステムをつくり、
社会に対しても示すことが大事です。



宮原秀夫 情報科学研究科長

ゆるな大学で科学と呼ばれている知です。もう一つは、
学問、学者に関係なく人として持たねばならない *wisdom*、
英知とか知恵です。社会のことや自分の生き
方を考えるということです。ヨーロッパでは、これ
を *philosophy* (哲学) と名付けました。最後の一つ
は、学校で習得する「知」とは違って、職人的とい
うか、経験から生み出された一人一人に根付いた個
性的な「知」、スキルというものです。そのような知
の育て方は、戦前はエリート教育の中で行っていた。
100人に1人ぐらいしか大学に行かない時代には、
旧制高校でまず、*wisdom* をしっかりと叩き込まれ、理
系の学生でもデカルトやカントなどを読むのが当
り前という風土があつて、それから大学で専門分野
に入っていく。戦前の学問はヨーロッパの真似でな
く、科学者もオリジナリティーがありましたね。
宮西 現在の大学は、そうではなくなりました。
鷺田 大きな状況の変化は、ほぼ全入の高校生の半
分が大学に行くようになったことです。高度な知識
を磨くとか、研究者を養成するというよりも、むしろ
中等教育の延長で、大学が教育機関として行わな
ければならないことが多くなったと感じます。ヨー
ロッパでは、本当の意味の教養教育、*wisdom* の教育

は、中等教育の中にあります。アメリカでも市民の
生活や安全に密接にかかわる医学者とか法曹界を目
指す者には、教養教育を重視し、コミュニケーション
能力や説明能力も資質として専門教育を受ける前
に学ばせています。ところが、日本では中等教育の
時に受験に追われて出来ていないので、それも大学
が果たす役割になっているのかもしれない。エリ
ートが集うこれまでの大学とは違った形になったよ
うな気がします。

▼これからの大学

宮西 それは、今後の大学を考えるうえで無視でき
ない問題ですね。大学の「知」のネットワーク化も
含めて。大学が拠って立つ基盤は、知識の面、人
材の面など、いろんな意味で流動化してきて、ずれ
てきていると感じます。流動化の中で、今後の大学
をどのように位置付けていけばよいのか、今、大き
な問題に直面しています。50%の世代の人たちに何
を教え、何を引き出せばよいのかという問題もあり
ます。こうした状況にあつて、大学のこれまで果た
してきた機能を次の世代に引き継いで行くことは、
現状の大学として出来るのかどうかも考えないとい
けない。

川北 大学の大量化の中で総合大学のあり方が一番
難しくなっています。基礎と応用、あるいは文系の
学問と理系の学問など、これまでの区分けで考える
だけでなく、総合大学だからこそ出来る教育も考え
ていく必要があります。

鷺田 日本の大学は、高度成長期まではアメリカに
追いつけ追い越せということで、各分野でのエキス
パート、スペシャリスト養成のための機関として存
在したと思います。次世代のリーダーを育てること
は大切ですが、その時代が終わってみると、総合大



土岐 博 核物理研究センター長

昔は、人がどう言おうとも自分はこれをやる、と。そこにも遊びの心があったのでしょうか。お互いを評価しないというか、それぞれが自由人であったということです。その意識は今日まで続いていると思います。

学という場所がそれにふさわしいのかどうか疑わしくなってきたように思います。総合大学は18歳人口だけでなく社会のいろんな世代の知的探求を必要とした際に、いつでも集えるコミュニティセンターのような学び舎のイメージ、少なくとも人文社会系の学問などは、そう考えた方がよい時代に来ているのかもしれない。

宮西 私たちの学生の頃は大学にはこんな立派な先生がおられる、ということが話題になった。先生の顔が見えていました。それが今はない。こういう立派な本があるから読もうというムードもない。本屋では受験参考書のようなものが、いっぱい並んでいる。なぜ、こうなったのでしょうか。

宮原 大学の大衆化が原因の一つであるのかもしれませんが、ある意味では、大学は大衆全体の知識レベルを上げることが一つの使命だったわけです。それで、みんな、大学へ行くようになった。大学はその役目を果たしてきた。

宮西 全くその通り。

宮原 一方で、エキスパートというかエリートも必要です。大衆教育とエリート教育をどう切り分けていくべきか、どっちを指すのが難しいところ。中途半端ですね、今は。エリート教育も行われていない。視点が見えてきません。

鷺田 そう、それで、レベルダウンしている。

宮原 大学は、ある意味での平均値のところ集約するような教育をしている。だから、突出した人材が出てこない。そこに問題がある。

宮西 エリートは多すぎたはいいけないが、次の社会を引っ張っていくリーダーは絶対に必要。望ましいリーダーがエリートです。

宮原 幅広い知識・教養という点では、鷺田先生が言われた、昔の医学部に哲学の先生がいたのと同じ

ように、我々の学部・大学院でも、学部外の広い分野で知識を得て、さらに専門の知識を集積するようなシステムがあってもよいと思う。その意味では、いろんな学部の卒業生が大学院情報科学研究科に入ってきてほしい。医学系でも人文系の学部生でも積極的に取りたいと言っておられますが、一つの分野でなく、複数、あるいは二つの知を使い分けられる人材を養成していく仕組みがこれからの大学に必要なだと思いますね。

鷺田 大学論を超えるところもありますが、今、世界的に工学系の研究者養成機関でサイエンス・ショップという、大学内の科学相談所のような組織が出来つつあります。オランダ、アメリカが盛んですが、環境や食品の衛生問題など、科学技術に絡む生活上の問題について市民の相談を受ける研究機関です。大抵は院生が現場に向いて市民と一緒に問題と取り組み、大学に持ち帰って論文のテーマにしたりします。教授も自分の研究課題、研究領域を広めることができ、同時に社会のさまざまな問題にかかわりを持つことができるわけです。私の臨床哲学研究室でも院生にそれをさせようと思っています。院生も普段から視野を広くしておかないと対応できませんから、その意味でもよい結果が期待できそうです。

土岐 大阪大学の医学部と歯学部はそのような仕組みがあります。私も利用したことがあります。そこには先生もいて、診察（問診）の結果、症状に応じて専門の部署を適切に指示してくれますので、すごく安心できますよ。そのようなシステムが人文系にも広がりを見せているのは市民にとって大変良いことですね。

鷺田 大学の社会貢献は、産学協同（連携）だけでなく、もっと広いものです。地域社会で発生する諸問題について、市民が判断するための能力を高める

サポート役に大学がなればよい。問題によっては文系の研究室が工学研究科と連携して対応することも出てくるでしょう。こういうやり方も大きな社会貢献だと思います。

土岐 そこに学生が参画するのは非常に良いことですね。

▼大学改革&マネージメント

宮西 大学の改革、あるいは大学のマネージメント、パブリックガバナンスについての一つのキーワードは、従来から言われている大学自治の問題です。独立行政法人になると、マネージメントは大学に任ずるが、結果責任も負いなさい、というのが文部科学省の考えです。こういう状況で、大学は学生に対する学問の自由をどのように保障していくかが最大の課題。一方、大学は社会と連携し、貢献していかなければいけない。

川北 (独立法人化は) 市場原理に照らした自由ということですね。

宮原 大学の自治を行うためには、キッチリした評価のメカニズムを確立すべきです。アメリカの大学では人事もカリキュラムも自由。教え方も大学独自の考えで行われている。その代わり、変なカリキュラムで変な教え方をしたら、学生がこなくなる。社会からも評価される。ところが、日本の大学は、社会の評価を受け止めるシステムがない。独自のシステムをつくり、社会に対しても示すことが大事です。**土岐** アメリカの大学は、非常に分かりやすい。学生は一つ一つの授業について、どれだけ授業料が要るかを計算し、先生も何人の学生に授業をすれば、

どれだけ収入になるかを計算している。しかし、授業に対する評価が悪ければ、その後は使ってもらえない。日常的に社会のニーズに直面しながら大学の先生は教育を行っている。評価が報酬に直結しています。日本はそうではない。もっと厳しくしないといけない。

宮原 その通りです。

宮西 パブリックガバナンスというのは、ある程度文化、学問を育成する姿勢がなければ、おかしなことになってしまいますね。

鷺田 そうでないとも市場原理になってしまふ。

宮原 大学改革をしようにも、国のいろいろな規制があり、手続も複雑。官僚的な支配を感じますね。もっと自由な雰囲気にならないと思うな。

土岐 大阪大学を世界の大阪大学にいくためには、自らの評価制度を他大学に先行して確立していくべきということですね。

宮西 その際に、鷺田先生が言われたサイエンス・ショップのような考え方も必要。ポイントは、実社会に伝えられるかどうかでしょう。

土岐 対応するための努力が重要でしょうね。

宮原 大学は敷居が高いという意識が社会にはまだあります。社会とコミットしていくには、大学について理解をしてもらい、接点を見いだす努力が必要です。融合が必要ですね。

宮西 岸本総長がよく言われることですが、日本の阪大に対する評価は、東大、京大の次。3番目では東大を抜くのは大変。だったら世界に評価を求めて日本に持ち帰ったほうが早い、と。日本での評価は必要でないとは言いませんが、そういう視点は必要だと思います。個人的には日本は逼塞している、と

思っています。知識、情報が外国から入ってきてても、それに匹敵する語学で即時に対応できないから後れをとってしまう。語学の問題は日本民族の宿命みたいなもので、英語を話せる民族に追いつくことは難しい。そういう意味での逼塞感です。心の叫びみたいなものですが、阪大が世界の大学になるには、この障害を越えないといけない。

川北 英語が何故、こんなに広まったのかは別にして、現実問題として英語の力が求められている。大学より下のレベルからの取り組みが必要ですね。

鷺田 ある計算によると30年後までに2千万人の外国人を受け入れないと、現在と同じスケールの日本社会は成り立たないと言われています。そうすると、多言語コミュニケーションが常態化してきて、いやでも教育を変えざるを得なくなってきましたね。

宮西 先進国と開発途上国が共存していくような視点も必要では。

宮原 今、優秀な人材は欧米に行ってしまうですが、それを取り込む仕掛けをつくることですね。そうすれば、日本の学生も刺激を受けます。

鷺田 人文社会系でも阪大でしか学べないという先端的な学問を内側からつくっていくか、と留学生は呼び込めません。単に、ヨーロッパの先進文化を学ぶという大学では魅力はなくなりません。

宮西 世界のどの大学にも共通することですが、次の時代につながるような考え方でないと生き残れないということでしょうね。しかし、今、改めて感じていることは、適塾の精神が人を集め、人を動かしていること、ということです。いずれにしても、日本の大学も、ジャンプできるところまで来ているということですね。問題は、これから、それをどのように展開していくかです。

知の創造—— 「日本の大学は進歩したのか」

**創造力・独創性を高めるのは情緒力。
そのための初等教育、大学での教養教育が大事。**

厳しい経済環境が続く中でしのぎを削る民間企業。最近では大学間の競争も激化。生き残りのために求められる創造力・独創性は時代を表す一つのキーワードとなっている。「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくんでいくという新学習指導要領にも創造性が謳われているが、どのような教育をすれば創造力・独創性が豊かになるのか。そこで、数学者でエッセイストの藤原正彦・お茶の水女子大学理学部教授と岸本忠三・大阪大学総長に、「知」の創造——をテーマに語ってもらった。対談の中で、初等教育と大学での教養教育の見直し、そして、今、失われている情緒力を養うために活字文化、読書の復活を強調、示唆に富んだ提言・直言は忘れかけたものに対する警鐘を鳴らしている。

●対談

- お茶の水女子大学教授
藤原正彦 ————— Masabiko Fujiwara
- 大阪大学総長
岸本忠三 ————— Tadamitsu Kisbimoto
- 司会 渡辺悟・毎日新聞大阪本社経済部編集委員 — Satoru Watanabe



【阪大ニュースレター No.20】2003/夏号 掲載
2003(平成15)年6月1日発行



人間には無から有を生む能力はありません。
独創性のあるすごい発見だと思うものでも、
必ずといっていいほど先人の教えや
知恵に学んだというタネがあります。



藤原正彦氏

——藤原先生は1972年に渡米され、その体験記を著した「若き数学者のアメリカ」で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞された。岸本総長はその年には既にアメリカの大学で研究生活をされていて、それがインターロイキン6という免疫の調節に作用するタンパク質の発見につながった。お二人にとってアメリカは、その後の人生における、一種のスプリングボードになったように思われます。

岸本 あ頃のアメリカには憧れました。九州大学の助手の給料が5万2000円でしたがアメリカでは1000ドル。1ドル360円の時代でしょ、5万円が36万円です。1週間分の食料品を買いだめしても30ドルから50ドル。物価は安いし、すごくよい所だと思いました。

藤原 私は1年間の予定でミシガン大学に研究員として招かれました。研究だけという恵まれた環境で、

給料も1人で生活するには十分でした。コロラド大学では教えたので使い道に困るほどになりました。岸本 「若き数学者のアメリカ」を書かれたのは、確か、70年代の後半だったと思います。私も読みました。それ以来、先生の書かれた本はよく買って読みましたよ。その後は、イギリスへよく行かれたようですね。

藤原 アメリカへも時々は行きましたが、日本があまりにもアメリカ的になりすぎてしまったので…。

▼情緒力

——本題に入りますお伺いします。この四半世紀の間に日本の大学は進歩したのでしょうか。

藤原 私の分野の数学について言えば、戦前も戦後も、20年前も今も、特に変わりはありません。創造という点では数学は、昔からいつも良かったです。学生のレベルは落ちました。

岸本 ノーベル数学賞があったら、(日本から)20人ぐらいの受賞者が出ていると言われます。

藤原 10人ほかたいと思います。

——学生の学力低下は大衆化が進み、裾野が広がった、その部分でという意味ですか。

藤原 そんなことはありません。東大でも下がっているようです。

岸本 よく議論される事ですが、それは(戦後の)教育が悪かったということでしょうか。

藤原 本当のところはよく分かりません。学力低下もさることながら、情緒力が落ちていることが気になります。いつかはすごいことをやってやると野心を持つ学生が少なくなっています。こうした野心を含めた情緒力、例えば、美しいものに感動する心、ものの哀れを感じたり、祖国や郷土を愛する気持ち、そして、人を愛する力も昔の学生に比べて弱くなっ



岸本忠三 総長

大学としては教養教育にもっと力を入れるべきでしょうね。専門的なことは実践に立って問題に直面し、必要に迫られれば自然とできるようになるものです。

ています。

数学の研究にも、美しいものに対する憧憬、感動は大事です。自然の美に対する繊細な感受性が独創性を豊かにするのです。日本は独創性がないと言っている人もいますが、とんでもありません。きわめて独創的な国と思います。

岸本 日本の中学生、高校生の60%近くが、将来は楽しい人生を送りたいと考えているという調査結果があります。アメリカでは、仕事で成功したい、出世して社会的な地位を得たい、と野心を持つ学生が圧倒的に多いようです。我々学生の頃にはハングリ―精神があつて、いつかは大きなことを、と夢を持っていました。なぜ、そうなったのでしょうか。

藤原 教育にも問題があるのですが、日本の社会が成熟したことに原因があります。例えば、アメリカとイギリスの学生を比べると、イギリスのほう

がよく出来るのに控えめで野心が感じられない。アメリカの学生は才能がなくても野心があつてギラギラしています。アメリカは成熟しないのです。次々と外から新しい血が入ってきて、いつも新しい。日本はどちらかと言うとイギリス型です。それは悪い点であり、良い点でもあると思います。

▼日本の大学

——日本の大学は進歩したのか、岸本総長の考えは。

岸本 私が渡米した頃と比べると、日本の生命科学は大変な進歩です。当時、アメリカとは格段の開きがありました。それが今では、層の厚さは別として、ほとんど遜色がありません。

——進歩した最大の要因は。

岸本 研究に対する国の資金援助が多くなったことが大きな要因でしょう。それと、情報技術等の発達で世界が狭くなり、外国との交流が盛んになったことです。

よく例に出して話すのは、サッカーの日本代表チームは外国の監督に率いられ、たくさんの外国人プレイヤーがJリーグで活躍しています。しかし、日本の大学に外国人の学長も、優秀な外国人研究者を教授に迎えることも難しい。個人として、世界のトップレベルの仲間入りをする日本の優秀な研究者は多くなりましたが、日本の大学が世界のトップレベルにランクされることは現状では困難です。最大のネックは言葉です。我々の学問の世界では英語が共通語ですが、日本人の語学力には限界を感じます。

▼英語教育

岸本 小学生から英語を教える早期英語教育が02年度から始まりましたが、そのために国語や社会の時

間を割いてまでもというのはいかがなものか。国際化と国語を守るための整合性をどう図っていけばいいのか、その点、どうお考えですか。

藤原 日本人は小学生から勉強しても英語がペラペラになるのは難しい。平等主義に侵されてみんな英語を学ぶ必要はないと思います。その代わり、研究者とか政治家とか外交官のように外国を相手に仕事をすする人たちは、今の倍以上勉強してもらいたい。英語より大切なものを勉強しないから、漢字を知らない、九九も分からない、といったことになるのです。それぞれの国・地域で花開いた文化・伝統を守りて発展させることが人類の一つの目的です。そうしないと地球が駄目になってしまいます。そういう意味で、21世紀はグローバル化の時代でなく、ローカリズムの時代だと思います。効率・能率を至上命題とすれば、世界の言葉を英語一つにすれば便利かもしれませんが、世界を一つにしてはいけません。不便な世界を保つことが重要なことです。

ただし、外国との交流、特に（大学や研究には）人的な交流は欠かさずに行い、研究所によってはすべて英語という所があってもよい。そうしないと岸本先生が言われたように、外国の研究者に来てもらうことはできません。

▼初等教育

岸本 国語の力が落ちたのは、国語を教える時間が少なくなったからですか。

藤原 小学4年生の1週間の国語は、戦前12時間だったのが現在は実質3〜4時間です。

岸本 勉強することが増えたのでしょうか。

藤原 余計なことを学ぶことが増えただけです。小学校では国語と算数をしっかり勉強して徹底的に叩き込み、中・高校では理科、社会を現在の1・5〜

2倍ほど勉強すればよい。算数がしっかりしていると物理も教えやすい。

岸本 読み・書き・そろばん、基礎が大事、ということですね。

藤原 昔の人は、本質を喝破しているのです。

——国語の授業が少なくなったこと、情緒力の低下には相関するものはありますか。

藤原 情緒力を養うには、自然に親しんだり、音楽を聴いたり、美しい絵画を鑑賞したり、友人と交わったりするなど、いろいろありますが、個人の体験だけでは時空を超えることはできません。それができるのは文学です。詩や小説などを読んで、昔の人々や世界の人々の生活に触れ、庶民の哀歓やものの哀れ、他人の不幸に対する敏感さ、自然の美に対する繊細な感受性などを知ること、情緒力が養われるのです。情緒力を養うのに国語が重要な役目を担っています。ツールとしての国語であれば、国語の時間は無くてもよい。母国語の話す、聞くだけなら誰でも自然に覚えるものですから。

岸本 私は中学校の頃、病気をして学校には半分くらいしか行けなかったので、家でよく本を読みました。それが良かったので、速く読む習慣がつき、教科書では学べない、いろんなことを知りました。英語もちゃんとした勉強はしませんでした、何とか分かるようになりました。

藤原 素晴らしい体験ですね。本をたくさん読まれたことは。

岸本 知識の詰め込みも大事なことです。

藤原 おっしゃる通りです。知識を詰め込むことは、ある種の型みたいなものです。お茶や生け花を習うにも、武道にしても、最初は理屈抜きに覚えさせられます。因数分解にしたって、「くだらないこと」と思っても、とにかく覚えないと次へ進みません。基

(すぐには)役に立たないことを勉強するのが大学です。

研究においては壮大な無駄が必要です。

我々の研究は50年、100年先に
役立つことを考えて行うものです。



基礎知識は有無を言わず、叩き込まないといけない。基礎知識を徹底して身につけないと、創造力も独創性も高まりません。

岸本 九九も理屈なしです。九九を覚えなないと、何も計算できません。

藤原 最近、知識を軽視する傾向がありますが、いつからでしょうね、そうなったのは。

岸本 どれだけ本を読んだか、どれだけ知識があるかが最後にものをいうことがよくあります。人間の幅にも、創造力にもつながっていくものです。ところが、詰め込みがいかんという風潮があり、中教審も、ゆとり教育が生きる力を養うというようなことを言っておられるが、どうですかね。

藤原 創造性といっても、人間には無から有を生む能力はありません。独創性のあるすごい発見だと思ふものでも、必ずといっていいほど先人の教えや知恵に学んだというタネがあります。

▼ 教養教育

—— 大学で初等教育の空白を取り戻すことは可能でしょうか。

藤原 教育は学校に行く前の家庭教育からの連続ですから、18歳になって突然、変えようとしても出来るものではありません。そうは言っても、大学入学時と卒業時、大学院では変わっていくものです。良いタイミングで権威ある先生に褒められたとか、励まされたりすると、その一言がきっかけで人間が変わっていくことはあります。一言で能力が何倍にもなるのです。

岸本 大学としては教養教育にもっと力を入れるべきでしょうね。極端ですが、教養教育に4年間をかけてもよいぐらいだと思います。専門的なことは大学院でやればよいし、実践に立って問題に直面し、

必要に迫られれば自然とできるようになるものです。

藤原 大賛成です。長期的、大局観に立って物事を考え、判断しなければならぬ研究者や政治家、官僚には教養が無いと務まりません。ケース・バイ・ケースの局所的思考は論理だけで対応できますが、大局的な判断には教養が必要です。教養は、文学とか思想とか芸術とか歴史とか科学とか、大して役にも立たないような学問ですが、大学はその教養教育をしっかりとしないと駄目です。日本の政治も経済もうまくいかないのは、指導者、エリートたちが大局観とか長期的視野を失ったからです。それは、日本の教養教育のあり方に起因しています。その大きな原因は、読書が軽んじられたことです。突き詰める、活字文化の衰退に帰します。活字文化を、読書を復活させないといけません。

▼ すぐに役立つ学問

—— 「知」の創造というテーマで対談の展開は、大学として専門性をどのように研ぎ澄ましていくのか、ということを想像しましたが…。

岸本 藤原先生が言われたように、(すぐには)役に立たないことを勉強するのが大学です。すぐ役立つ教育をと、大学に性急な要求をされますが、特に、研究においては壮大な無駄が必要です。このことは以前にも話したことがあります。流行っている分野だけに日が当たって、哲学や文学、物理学が衰退してしまつたら大学は駄目になるし、我々の研究は50年、100年先に役立つことを考えて行うものです。そういう意味での無駄ということですね。

藤原 特に、不況になってから感じるのですが、企業が大学に即戦力の人材を求めるのは間違いです。大学が社会とか産業に役立つ人材育成を目標に研究・教育すると日本が駄目になります。大学の真骨



企業が大学に即戦力の人材を求めるのは間違いです。
「役に立たない」と
「価値がない」とは別問題です。
それを分かってほしい。

頂は基礎です。真理の追究のために命をかけるという気概が必要です。そうしないと役に立たない学問が潰れます。「役に立たない」と「価値がない」とは別問題です。それを分かってほしい。

岸本 大学の壮大な無駄に理解をして支えてもらいたいものです。そうでないと大学は駄目になりません。数学は役に立たなかったかと言えばそうではない。コンピュータも数学がなければ存在しなかった。本当の真理をついた研究が我々の分野でも役に立っています。しかし、研究は最初から役に立つもの、と考えてすべきではない。すぐに役に立つものや、流
行の研究を強く意識して追い求めるのは感心しません。

藤原 すぐには役に立たない文化とか学問が認めら

れるかどうかで国家の品格が分かります。経済的にも軍事的にも大したことのないイギリスの言うことに我々が耳を傾けるのは、イギリスが生んだ普遍的価値への敬意があるからです。シェイクスピアやユートンやダーウイン、ケインズしかりです。経済の繁栄に持つ感情は羨望です。日本も国家としての品格を高めようとするなら、無駄という言葉が的確かどうかは別として、岸本先生の言われる、壮大な無駄に潤沢な基金を投じ、しかも、その結果に「期待をかけないから、しつかりやれ」というぐらいの度量と理解が欲しい。

岸本 人材はすぐには育成できません。そのために大学は10年、20年先を見越して研究・教育をしないとけないと思います。

知力、環境、文化—— 阪大イメージアップ戦略!

国立大学は2004年4月に国から独立、人事や会計の裁量を委譲され、外部の人材が学校経営に参画する。100年に一度の大学大改革と言われる国立大学法人化によって大学の裁量が増える半面、大学間の競争激化が予想される。「国立大学法人大阪大学」として新たなスタートを切る大阪大学の法人化初代総長には宮原秀夫・大学院情報科学研究科長が8月26日付で就任した。トップダウンの経営ができるよう学長権限も強化される。新生・阪大の方向付けを託され、大きな期待と責務を担う宮原総長にインタビューし、どのような舵取りをされるのかを中心に聞いた。

●新総長インタビュー

- 大阪大学総長

宮原秀夫 ————— Hideo Miyabara



中学3年の時に部品を集めて
テレビをつくりました。
プロレス中継を見るのに
50円出すのがしゃくだから、
自分でつくったのです。



【阪大ニュースレター No.21】2003/秋号 掲載
2003(平成15)年9月1日発行

我々の研究は、
特許を取って儲けようというのではなく、
実用化され社会に役立つことができればよい。
それが、インセンティブになっています。



●宮原秀夫（みやはら ひでお）
1943年大阪市生まれ。67年大阪大学工学部通信工学科卒、72年大阪大学工学研究科通信工学専攻博士課程単位修得退学。工学博士。京都大学工学部助手、阪大基礎工学部助教授・教授を経て97年阪大大学院基礎工学研究科教授、98年同研究科長、02年同大学院情報科学研究科長。専門は情報ネットワーク学。電子通信普及財団テレコム自然科学賞（1986）、電気情報通信学会論文賞（1991）、通産大臣賞（1997）、電気通信学会業績賞（1998）、エリクソン・テレコミュニケーション・アワード賞（2002）、総務大臣表彰（2003）などを受賞。著書は「コンピュータ・ネットワーク」（共立出版）、「インターネットがもたらすマルチメディア社会」（大阪大学出版会）など多数。

▼情報ネットワークの出口

—— インターネットの前身システムが開発された1960年代末から情報ネットワークの研究に取り組んでこられたということですが、当時、日本の経済はピークに差し掛かり、繊維とか鉄、自動車など具体的なモノの製造業を中心に急成長していったわけです。そのような時代になぜ、通信を目指されたのですか。

宮原 子供の頃から電気通信に興味がありまして、中学3年の時に部品を集めてテレビをつくりました。裸のブラウン管でしたが、ちゃんと映りました。家庭にはテレビがない時代でした。近くのうどん屋さんで夜になると、うどんを売のをやめて大福もちを50円買うと、テレビのプロセス中継を見せるのです。力道山の全盛時代でした。私はその都度50円出

すのがしゃくだから、自分でつくったのです。

—— 学部生の頃は東京オリンピック、大学院に進まれた頃は70年安保の時代。どんな学生時代を過ごされましたか。

宮原 当時、大学に工学部通信工学科があったのは東北大学と阪大だけだったと思います。高校はスキー部でしたので大学でも同好会をつくり、学部生の頃はヒマさえあればスキーを楽しんでいました。大学院では、指導教官の手塚慶一・工学部通信工学科教授から「情報流網をドクター（博士課程）の論文テーマにしなさい」と言われました。それ以上のことは説明してくれないので、何のことだか分からない。1年ほど、何だろう、と考え悩み続けました。

—— 「情報流網」は情報ネットワークの造語ですか。

宮原 そうです。手塚先生は定年ご退官後、間もなく亡くされましたが、コンピュータネットワークが存在

しない時に、次の時代を予測する直感的なものを持っておられたんですね。それを言われ、いろいろ模索していた1960年代後半にアメリカの大学で、インターネットの原型のようなアルパネットという接続実験を見る機会に恵まれました。それは米国の指揮系統を司る通信ネットワークを構築する国防総省のプロジェクトで、軍事網として国費で大学が研究していたものです。当時は計算のマシーンでしたが、情報交換に使えることが分かったのです。通信の中心は電話でしたが、コンピュータを介しての通信に興味を持ちました。アルパネットの草創期に出会ったことは本当にラッキーでした。それ以降の私のテーマは、文字情報から音声、画像を含めたマルチメディア情報を送るための機能をどのように具備していけばよいかをベースに、コンピュータネットワークの研究に取り組んできました。

—1カ所に集中した情報網が万一、攻撃で破壊されるとすべてを失うので、情報を分散させて共有しておこうという危険分散が当時の国防総省の考えで、その通信網がインターネットの起源ということですか。
宮原 ソ連の崩壊で米ソ対決が解かれ、軍事目的に使用する必要がなくなつて商用解禁され、1990年代初めから米国を発端とした世界的なインターネットブームが巻き起こるわけです。コンピュータネットワークは、分散システムで全体システムをどう動かすかということです。この考えはネットだけでなく社会のいろんなシステムにも適用できます。

▼ユビキタス・ネットワーク社会の到来

—この30年間の通信技術は飛躍的な進展を遂げましたが、今後の見通しを。

宮原 通信の高速大容量化が急速に進んでいます。ハードウェアの進歩は目覚ましいものがあります。

その高速化にアプリケーションをどう構築していくかが大きなテーマです。深夜に帰宅して、その夜のテレビニュースなどを自由に取り出せるビデオ・オン・デマンドもそうです。電子メール、ウェブ情報以外の新たなネットワークを生活に溶け込ませるかという点で今、注目されているのがユビキタス・ネットワーク社会の実現です。総務省のプロジェクトの重要なテーマになっていて、私も委員のメンバーになっています。

—ユビキタスは、言語的には、それがあつたことを意識しないことを意味するようですが。

宮原 ユビキタスとは、ラテン語で「あまねく存在する」という意味です。元々はそこら中に存在するのは神でしたが、神がコンピュータに変わってしまったのです。ゴマ粒ほどの小さなチップ、コンピュータがあらゆるものに組み込まれ、情報端末となり、いつ、どこからでも通信が出来る社会を想定したものです。情報端末としてパソコン、ゲーム機、携帯電話、カーナビゲーションなどが使われ、日常生活では家電製品です。インターネットとつながっていてスーパーから冷蔵庫の中の確認も可能となります。インターネットと家電の融合です。携帯電話や産業機器の基本ソフトとして多用されるトロンを発明された東大の坂村健教授が「どこでもコンピュータ」という表現で早くから未来像を提唱していました。これは数年のうちに実現するでしょう。私もそれを追究していきたい。

—ユビキタスは、メーカーの仕事として応用面に入っているものと思っていました。また、ブレイクスルーを伴ったアカデミックな分野のものということですね。いずれにしても、それらは大学発のベンチャーというか、具体的なビジネスプランとして成り立つように思います。

宮原 おっしゃる通りです。インターネットのアプリケーション・ソフトウェアは、ビジネスモデルまでつくる必要があります。大学ではしっかり研究をし、実用化の段階では企業に任せるほうがよい。ビジネスになるかどうかの目利きが出来た人材は企業にはたくさんおられます。大学ベンチャーは流行のようですが、定義についてはよく分からない面があります。ベンチャーは結果だと思ふ。大学における特許も目的でなく、研究の結果だと思ふ。ただし、大学の研究成果をすくい上げて、実用化につないでいく仕組みは必要です。

▼法人化に向けて

—少子化という社会問題も含めて大学を取り巻く環境は悪化しています。法人化によって、目先の結果を求める傾向はもつと強くなるかもしれません。

宮原 意識はより強まるでしょうが、それによって基礎研究をおろそかにしてはいけません。性急に研究の結果を求めるのではなく、大学には無駄があつていいと思います。文系でも貴重な研究を地道に続けているのに社会に公表されない場合があります。脚光を浴びないから、「大学は高い研究費を使って何をしているか」と批判されることがあります。これら大学の大学では、それでよいという考えがあり、また、それでやってこられた。しかし、最近は大変に大学の要求、見方が厳しくなつていっています。大学としてはアカウンタビリティー、情報公開をし、理解してもらえよう説明をしなければなりません。そうした努力は惜しみませんが、一方で社会が一面の評価基準で評価をしてほしくありません。大学あるいは大学の研究に対してもう少し寛容になつてもらいたいものです。

—しかし、研究費も成果によって配分されるとい

うことです。

宮原 1年ごとに教育・研究に対する評価をし、その結果、学長の裁量で研究費の配分をするというシステムが導入されるようですが、そうではなく、例えば、「C」の評価を受けたところがあれば、それを大学全体の問題としてとらえ、「B」に上げていくための方策をとっていくようにしたい。伸びるところは放っておいても伸びます。伸びないところをどう伸ばしていくかでしょうね。評価は、必ずしも、良い点を取ったところだけ厚くすることではいけないと思います。そんな評価をしたい。

——ある企業の話ですが、辞めていく理由は給料の多寡ではなく、正当に評価されていないためということでした。日本人的な考え方ですが、給料はあまりインセンティブにならないようです。弱いところにも必要な研究費をという考え方は大学でも必要でしょうか。

宮原 我々の研究は、特許を取って儲けようというのではなく、仮に特許料をもらえなくても、実用化され社会に役立つことができればよい、と大抵の者はそう思っています。それが、インセンティブになっています。

——話は変わりますが、国の大学に対する研究費は潤沢ですか。

宮原 一時に比べ国の科学研究費は多くなりました。残念なことは、アメリカのようにその中から研究スタッフの大学院生に奨学金として使えない仕組みになっていることです。ドクターコースに進みたくても経済的な理由で断念してしまうケースが多くあります。東南アジアの優秀な留学生が給料の良いアメ

リカに行くのは当然です。法人化で大学の裁量が増大され、研究費の使い方も緩和されれば、それを実現したい。理工系の研究室では、ドクターの学生は重要な研究員ですから。

——そうなれば、裾野の強化になります。

宮原 企業の大学への委託研究費という点ではアメリカと日本では1ケタ違います。アメリカはメリットのある研究にはお金は出しますが、そうでない大学・研究者には出しません。評価システムがしっかり機能してはつきりしています。それは税制にも関係する問題点です。大学への寄附行為に対する優遇措置がアメリカにはあります。日本もそうした整備が必要です。

——即戦力として使える学生の育成を求める声が企業側で強まっています。終身雇用制が揺らぎ、じっくり人材を育てる余裕が企業になくなってきたことなど理由はさまざまですが、この点、大学側としてはどうお考えでしょうか。

宮原 人材を育てるには時間とお金がかかります。企業もよい人材を確保するには、それなりの時間と費用をかけて学生が大学でどんな研究、何を学んだかを重視しなければなりません。インターンシップは、それをうまくマッチングさせる一つの方法ですが、短期間の企業経験というだけでなく、就職にリンクさせるよう大学と企業の間を変えていく必要があります。産学連携も、ビジネスだけを目的に研究に投資することではなく、よい人材、学生確保のための連携であってもよいと思います。企業との共同研究を通じて学生が企業の若手研究員と交わりながらリクルートしていくという手もあります。

——よりよい学生を獲得するための具体的な方策を考えておられますか。

宮原 イメージアップです。京都大学、神戸大学には大学と周りの環境にスマートな雰囲気があります。イメージアップには大阪のまちと連動してやることがあると思います。そのために大学も大いに協力していきたい。それと、全国から学生を集めたい。大阪大学の学生の6割は近畿圏の高校からです。全国区にするためにもイメージを上げたい。

——キャンパスにも大阪大学をすぐイメージできるものが欲しい。大学としての知的レベルの高さは認知されていますが、それに、オンさせるようなものです。

宮原 キャンパスの中で著名な音楽家を呼んできてコンサートを開くとか、芸術文化的なイベントを企画するのもよいことです。また、大阪・北区に2004年3月完成を目指している阪大中之島センターの9階に文化的なサロンをつくり、一般の方たちにも来てもらえるよう計画しています。センター周辺は大阪の文化ゾーンの拠点となりますので期待しています。

——法人化の初代総長としてどんな総長をイメージされていますか。総長の権限も強化されます。

宮原 最終決定は私がしなければなりません。すべてをトップダウンでということは大学では出来ません。トップダウンのケースが少ない方がよいと思う。理事会で採決する案件をなるべく少なくし、話し合いで決めていくことができれば望ましい。議決権はないが拡大委員会を組織し、そこで諮って議論し、合意できればと考えています。

「阪大発ベンチャー」

阪大イノベーションファンド1号—— 阪大発ベンチャーの育成

大阪大学と日本ベンチャーキャピタル（本社・東京都港区）が提携し、阪大の教官や学生、卒業生らが起業したベンチャー企業に投資・育成を進める「阪大イノベーションファンド1号」が03年5月に設立された。政府も大学発ベンチャー企業を育てるための構想を打ち出し、東大や慶応大学など大学がベンチャーキャピタルと提携する事例が相次いでいるが、阪大発ベンチャーへの投資ファンド（基金）は30億円と国内最大規模。投資対象はバイオ、ナノテクノロジー、IT（情報技術）分野などを予定、既に4社に対する支援を決めており、日本の産業活性化をも視野に入れて走り出した。そこで、運営に当たる大阪大学と日本ベンチャーキャピタル、そして関西経済をリードする企業人の方々に阪大発ベンチャーへの期待や可能性について語ってもらった。

●座談会

- 住友電気工業株式会社常務取締役
吉田健一 ————— *Kenichi Yoshida*
- 武田薬品工業株式会社常務取締役
秋元 浩 ————— *Hirosbi Akimoto*
- 松下電器産業株式会社技術特別顧問
三木 彌一 ————— *Sukeichi Miki*
- 日本ベンチャーキャピタル株式会社大阪支店長
坂 栄次 ————— *Eiji Saka*
- 大阪大学先端科学技術共同研究センター長
村上孝三 ————— *Koso Murakami*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞編集委員 — *Satoru Watanabe*

【阪大ニュースレター No.22】 2003/冬号 掲載
2003（平成15）年12月1日発行





村上孝三 先端科学技術共同研究センター長

重要なことは学生や助手など
若い人たちが先行するベンチャーの活動を見て、
自分たちも、という気を持ってもらうことです。

▼国際競争力は産学連携で

——まず、このイノベーションファンドの概略、設立のいきさつについてお聞きかせください。

村上 企業との共同研究や知的財産の活用など産学連携活動の一つとして大学発ベンチャーも支援していかねければと考えていたところ、日本ベンチャーキャピタルから提案があり具体化しました。数億円程度のファンドが10大学にありますが、阪大の場合もっと大きな規模が必要だろうということになったのです。大学発のベンチャーにふさわしいものというところで、投資に関して技術評価や事業評価を行う評価委員会を設けているのが特徴です。もう一つの特徴は阪大の教官・学生、卒業生だけでなく阪大と共同研究・開発を行うベンチャー企業にも投資・育成の対象を広げていることです。

坂 岸本前総長に提案したのは02年の7月19日。その後、村上先生にもお話をし取り組み始め、設立までに約1年間かかりました。43社から30億円と阪大OBの方を中心とした個人から2500万円の出資をいただき、10年間のファンドをつくりあげることができました。評価委員会には阪大の教官11人のほか大阪TLO、NPOおおさか大学起業支援機構や出資会社などの22人で構成しています。有望な起業への投資・支援を通じて関西、ひいては日本の産業活性化と雇用創生を図ると、大上段に振りかぶっています。

——最近の世界経済フォーラムで日本経済の国際競争力は13位から11位に上がったということですが。こうした評価も踏まえて日本の現状と将来性について伺い、その上で大学発ベンチャーの育成はどうあるべきかに話を進めていきたいと思えます。

三木 エレクトロニクスの分野は、ITバブルの崩





坂 栄次氏

ベンチャーを興す人は1人で何でもやれる、
やらなければならないかと思いますが
万能でないことを理解することです。
不得手の部分は助けて、と言うぐらいでないといけません。

壊で沈滞ムードに落ち込んだ時期がありました。日本の製造業は世界をリードできると意を強くしています。しかし、今はピンチです。インド、中国のエンジニアのレベル向上が目覚ましく、その追い上げに対する何らかの対策を講じないといけません。現状打開の突破口の一つが産学連携と考えています。

秋元 医薬、バイオのシェアは米国が55〜60%、ヨーロッパが20〜25%、日本は15〜20%です。医薬品の研究開発費でも武田薬品は世界の15位、中小企業みないなものです。遺伝子の構造解析では米国が完勝、日本、ヨーロッパは完敗です。ヨーロッパが大分追い上げ、日本も頑張っていますが、日本のバイオはまだ赤ん坊から幼児のレベルといったところでしょう。しかし、日本の得意な分野に特化して産官学の連携をすれば勝てるものがあると思います。02年度の医薬品、バイオの特許件数は中国がヨーロッパを抜き、米国に次いで2位になりました。日本の1・5倍で、さらにその差は開きつつあります。中国は高級人材という形で世界に散らばっている中国系の優秀な人材を上海に集め、国家プロジェクトをつくっています。中国は脅威ですが、現時点では独自のものが出ていません。独自のものをつくっていけば日本に勝てるチャンスがあると思います。シェアを少しでも上げていくような方策を、国を挙げて取り組まなければなりません。

吉田 住友電工は、自動車、光通信を含む情報通信、エレクトロニクス、産業用新素材という分野が事業対象ですが、製品はどちらかと言いますと材料技術にウエイトを置いております。光通信の回復にはあと1年かかると覚悟はしていますが、その他は順調で、全体的には（景気は）底を脱し、回復軌道に乗ってきました。材料開発は国際競争力があり、国際マーケットにおける日本のポジションを守っていき

たい。そのためには、最低10年かかっている研究開発のスピードアップを図らなければなりません。今のところ、蓄積してきた人的資源、技術的なノウハウは、そう簡単に海外には真似できるものではないと自負していますが、研究開発のリスクを少なくし、短期間に成果を上げられる体制を考えていく必要があります。産学連携はそこに位置付けていくべきでしょうね。

▼**トップの意気投合で最大規模のファンドに**

——文部科学省の調査ですと、大学発ベンチャーは2000年8月に128社だったのが、01年8月には251社、02年8月には424社と倍々で増えています。大阪大学も増えていますが、阪大は実力があるのに地味、というイメージを持っていました。ところが、今回のファンド立ち上げでどっと打って出たという感じがします。

村上 教官が個別に行っていたものをオルガナイズすればうまくいくという考えはありました。そのシステムを作って運用するのは教官ですが大きな問題は知的財産の管理・運用です。教官個々では対応が難しいので大阪TLOやNPOおおさか大学起業支援機構など人材・組織を使いながらサーベイし、そのうえで研究をスタートさせることが重要で、阪大イノベーションファンドは、そういう支援体制も提示しているかと思っています。今までなかった組織ですから華々しく大げさに見るのではありません。実際に機能させていくのは大変なことですが、ベンチャーは強い意志を持って伸び伸びと思いきりやることが望ましいことです。そうした環境整備、土壌を作っていくのも大きな課題です。それと、単に事業を興して収入を得るということだけの投資・育成でなく研究を支援するという視点で取り組んでいきたい。



三木 密一氏

ベンチャーは立ち上げても
なかなかスムーズにいかないもの。
紆余曲折の繰り返しですが、
右か左かの曲がり角の時におじけないことです。

——今回のファンドをわずか1年間で立ち上げたことは印象的ですが、その中で30億円のファンド規模は阪大だからという判断が働いたのでしょうか。

坂 私どものベンチャーキャピタルは設立して8年、歴史は古くはありません。ジェネラルファンドとして地域、企業を特定しないでやってきましたが、その一方で特色あるファンドを考えようということでも技術力の高い大学にターゲットを絞り、関西では阪大となったわけです。阪大は戦国時代の群雄割拠のようにベンチャー支援組織が動いていて、最初、整理がつくかどうかと思案しました。しかし、そのことが逆に活性化して一番面白いのは阪大だ、と02年7月に岸本前総長にお会いしたのが始まりです。特定大学向けのファンドでも、ハンズオンで育成支援するには、かなりの規模が必要であるとの認識はしていましたが、今回、30億になったのは2人のトップが意気投合したからです。「どうせやるならちっぽけなものでなく、思い切つてドンといきましょう」という岸本前総長の提案に対し、私どもの文節会長も「それなら」と即座に引き受けて決まりました。私にはプレッシャーでしたよ。30億円も集まるのか、集まらないとえらいことだ、と思う反面、どうしても集めなければという気持ちが強かったですね。結果的にはよいスタートを切ることができました。

▼阪大発ベンチャーに期待するもの

——阪大発ベンチャーに何を期待されますか。

三木 松下電器産業にとつて大阪大学はメインバンクのような存在ですが、1980年代後半にイギリスとアメリカの大学で、90年代後半にもアメリカ西海岸の大学と提携してベンチャーの起業を試みしました。結果はいずれもうまくいかず、日本に戻ってやり直すことになりました。回帰現象というわけでは

が、大学発ベンチャーで産業のレベルアップを図っていくことが日本の経済、そして大学の発展につながると思います。その産学連携を成功させる基本はコミュニケーションです。そういう意味で今回のファンドには期待しています。

秋元 米国では医薬、バイオに関するベンチャー企業は1000社近くありますが、黒字は数社です。成功確率はたったの0・5%にすぎません。しかし、成功しているところがありますからベンチャーにチャンスを与え、やりたい所にはどんなやってみようことです。阪大には得意分野である医薬とかバイオ関係の研究を支援すればよいと思いますが、その際、役割の範囲をはっきりさせておくことが大事です。大学のベンチャーが基礎研究から製品開発まですべてを行うことは無理です。医薬品は基礎研究から製品化までには15年の年月と200億円から500億円もの研究開発費がかかります。医薬、バイオの研究開発には1社では限界があり、大学ベンチャーとネットワークを組んで取り組むパートナーという考え方があります。その方法で、マッチングすれば起業支援の資金は集まり、成功率は高くなるでしょう。

村上 そのためには世の中のニーズに合わせた研究目標・計画を立てることが重要で、大学としてはそのような共同研究を提案しようと考えています。

吉田 違った観点から申し上げたい。私は大阪で生まれ育ち、仕事もほとんど関西でやってきた関係もあって、大阪に東洋のシリコンバレーになつてもらいたい、とかねがね思っております。アメリカのシリコンバレーもそうですが、台湾でも国策として科学工業パークをつくりました。日本も組織的にベンチャービジネスを育成していかないと先端産業に後れをとるという気がします。そういう意味で阪大発

大学と企業を結ぶインターフェイスを
できるだけ多く持つことが
成功の一つの道だと思います。



秋元 浩氏



吉田健一氏

何が何でも
このビジネスを成功させる、
というエゴの強烈さの有無が
ベンチャーの成功の
キーポイントだと思います。

ベンチャーには大いに期待しており、ハイテクパークの中心になってもらいたいと強く願っています。ベンチャーを1カ所に集中させ、都市計画とリンクさせるやり方がよいでしょうね。それと、ベンチャービジネスはリスクが伴いますので、万一、失敗した時の社会的な受け皿が要ります。世の中では社員がベンチャーを興しても再雇用するという機運が高まりつつあります。各社もそうでしょうか、失敗した経験を次に生かすことができれば会社にもメリットがあります。人材の流動的な受け入れ体制を阪大にも取り入れてもらいたいものです。

——ベンチャー経営者に必要なのは色気だと、あるベンチャー成功者が言っていました。つまり、あるふうになりたい、と思わせるヒーローが必要だということでしょう。そういうイメージ戦略を考えておられますか。

村上 既に4社に出資を決めています。4社の起

業家である教官や研究者たちは色気といえますか、その素質を十分備えております。その人たちの活動を支援していくわけですが、それとともに重要なことは学生や助手など若い人たちが先行するベンチャーの活動を見て、自分たちも、という気を持つってもらうことです。

——04年春には国内最大規模の産学連携組織である先端科学技術イノベーションセンターも完成の予定ですが、このファンドとどう関連付けるのですか。

村上 産学連携の窓口となっている先端科学技術共同研究センターやベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、先導的研究オープンセンターの二つの統合、拡充を検討しています。インキュベーションやベンチャーも含め、イノベーションを興そうという研究者らが伸び伸びとした活動を実践できる場にした、阪大モデルをつくる場所にと考えています。

▼ベンチャー起業家へのアドバイス

——大学発ベンチャーの弱みは先端技術に比重を置くあまり、マーケットを見失う恐れがあるということではないでしょうか。秋元さんが先ほどおっしゃったように大学発ベンチャーは、商品化まで考える必要はないということですが、いずれにしても市場と顧客の存在を抜きにしたベンチャーはあり得ないわけです。そういう観点からベンチャー起業家の人たちにアドバイスを一言ずつお願いします。

三木 ベンチャーは立ち上げてなかなかスムーズにいかないものです。紆余曲折の繰り返しですが、右か左かの曲がり角の時におじけないことです。思わぬチャンスに出合うことがありますから、その時に誰かとシエークハンドすることです。

秋元 大学と企業を結ぶインターフェイスをできるだけ多く持つことが成功の一つの道だと思います。そ

のためには会社を退職した人を積極的に参加させること。そのことで双方のマッチングができますから。
吉田 ベンチャーを考えている工学系の大学の先生方は、産業界との共同研究の結果、これはいける、ということまで起業するわけで、突然、思い立つというのではないと思います。一時期、住友電工の社内ベンチャー制度がもてはやされましたが、今、大きな事業として取り組んでいるもので、当時の小さな社内ベンチャーから出発したというケースが多いのです。その時に言われたことは、周囲がなんと言おうとやり通すというプロジェクトエゴを持っているのは誰か、ということでした。何が何でもこのビジネスを成功させる、というエゴの強烈さの有無がベンチャーの成功のキーポイントだと思います。運営

面では、企業経験者も必要ですからOBの登用は一つのアイデアであると思います。
坂 ベンチャーを支援する立場から言いますと、一番大事なのは人に尽きるところだと思います。研究開発のトップ、販路開拓のトップ、資金調達のための三つの柱に経営のトップが位置するのがベターです。ベンチャーを興す人は1人で何でもやれる、やらなければと思っているかもしれないが、万能でないことを理解することです。不得手の部分は助けて、と言うぐらいでないといけません。大学発ベンチャーの場合、先生方の研究開発は水準より優れたものが期待できますが、それを束ねる経営者や販路開拓面の人材は出資企業から送り込むことも想定しています。そうすることが大学、企業のメリットになるの

です。
——最後に、阪大発ベンチャーの育成を含めた産学連携にどう取り組んでいかれるのかについて改めてお伺いします。
村上 おっしゃるように、基本は人と独創的な研究ですから、大学発ベンチャーもその延長線上でとらえてやっていきたい。基礎研究を行っている大学の研究者は世間知らずで実情にうといと言われる方もおられますが、世の中の動きを把握し、意識しているから成果を上げられるわけです。大学発ベンチャーの育成も基礎研究と連動した活動と位置付けてやっていきたいと思っています。その中で若い人材が育っていくことを産業界も理解していただきたい、そのように考えています。

「大学と都市」——大阪

あるべき未来の都市を目指して

国際都市大阪の活性化に向けたさまざまなプロジェクトを展開する大阪市の關淳一市長。「都市の再生に貢献するのも大学の使命」と支援を約束する大阪大学の宮原秀夫総長。トップのお二人に「キャンパスから都市のイノベーションが始まる」をテーマに、新しい街の創造について語ってもらった。都市再生の大きな柱に据える観光を異文化の体験という視点でとらえる關市長に対し、「観光は文化を高める学問として重要な研究テーマ」と宮原総長は観光学への取り組みにも関心を示した。

●対談

- 大阪市長
關 淳一 ————— *Jumichi Seki*
- 大阪大学総長
宮原秀夫 ————— *Hideo Miyabara*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞編集委員 ————— *Satoru Watanabe*



[阪大ニュースレター No.23] 2004/春号 掲載
2004(平成16)年3月1日発行



人生の構造改革の時代でもあります。
いろいろな意味で変革期ですから、
立ち止まって中・長期展望を
持たないといけない。



關 淳一氏

▼変革期の都市づくり

——都市の集積、都市の再生にどう取り組まれるかが今回のテーマですが、都市に活力をつけるためにはどうすればよいか、まず市長の基本的な考えをお聞かせください。

關 都市のドーナツ化現象が一時期、進みましたが、再度、都市の時代になってきました。大阪も都市回帰の傾向が顕著です。今が転換期、改革の時代ですね。小泉首相の推進される構造改革ではありませんが、人生の構造改革の時代でもあります。人生80年に向けた構造改革を市民の皆さん方は個々でやっておられる。それに比べ、行政側には受け皿がありません。そのギャップを埋める手立てを今のうちにしておかなければなりません。人生の構造改革はやが

て若い世代にも及んでくるからです。それを若い人たちがどう受け止めているか、気がかりです。都市は若い人たちのためにもあるということですよ。

03年11月の選挙で市内をくまなく回り、多くの市民の皆さんと接しましたが、市民の感覚のほうが行政より前を行っていると感じることがしばしばありました。いろいろな意味で変革期ですから、立ち止まって中・長期展望を持たないといけない。新しい産業も創出されてくるでしょうが、行政サイドとしては企業人がやりやすいような施策を打って、しっかりとした方向性を示さないとけません。

——都市再生に向けた取り組みが活発です。進捗状況も含めて概略を。

關 緊急課題であるJR大阪駅北側の梅田貨物駅（梅田北ヤード）再開発は着々と進んでいますし、南の難波もならばパークスが03年末にオープンするなど変貌しています。北と南の中間にある心斎橋には海外の有名ブランド各社が競うように出店、ビジネス街は装いを新たにしています。南北を結ぶ大阪のメインストリートである御堂筋を中心とした展開を推し進めていきたい。この沿道には上場企業が集まるビジネス空間やにぎわいのあるアミューズメント空間があります。新しい文化情報発信の街としてのポテンシャルもあります。

そして中之島の再開発ですね。既存の大阪国際会議場と大阪市立科学館に加え国立国際美術館、大阪大学中之島センター、キャンパス・イノベーションセンターが3月に完成します。さらに市立近代美術館の計画もあり、水と緑に囲まれたこのエリアには文化・情報機能を備えた国際文化交流ゾーンが形成されます。蓄積された既存の都市基盤と構造的なものを生かし、行政として何をすべきかを明確に示していかなければなりません。



宮原秀夫 総長

中之島センターは大学の知的財産を
社会に還元し、社会との接点
を見つけていこうという目的です。

▼期待される中之島センター

——中之島再開発の核として文部科学省のキャンパス・イノベーションセンターと大阪大学中之島センターに対する期待は大きいものがあります。

宮原 大学が都市の機能と大きなかわりを持つとおっしゃいましたが、その通りだと思います。都市の過密化を防ぐための工場等制限法の施行など、いろんな事情があつて医学部と工学部が郊外の吹田キャンパスに移転しましたが、大学は市民と接触できる場所、街中にあるべきです。中之島センターをその拠点にしたい。大阪大学は大阪産業界の資金援助があつて創立されたという歴史があり、以来、大阪の大学として産学の良好な連携を保ってきました。もちろん、行政とも良い関係を維持してきましたが、

大学に対する社会貢献、地域貢献が時代の要請としてより強く求められておりますので、その期待に込めていきたい。

「大阪大学中之島センター」「キャンパス・イノベーションセンター」は10階建てで1、2階が共通部分、3階から6階までがキャンパス・イノベーションセンター、7階から10階が大阪大学中之島センターとなります。看板は二つですが、大学の知的財産を社会に還元し、社会との接点を見つけていこうという目的は同じです。キャンパス・イノベーションセンターには複数の大学が入り、市民向けの講座やセミナーを、中之島センターでも社会人を対象にした教育・研究機能と情報発信機能、社会との交流機能を果たしていく計画です。ビジネススクールやロースクール、ベンチャービジネスなど高度な専門職業人養成講座のほか国際会議やシンポジウムも開催します。また、教育・研究などの情報データベースを設置、情報の受・発信基地的な役割をして産学連携の橋渡しなどのお役にも立てたいと思っています。このセンターは素晴らしい構想、大いに期待をしています。大学のキャンパスは吹田と豊中ですが、ITを利用して中之島センターで受講することは可能でしょう。そうなれば、もう一度勉強したいと願っている社会人や家庭に入っている主婦など、知的欲求を満たそうとする人たちはレベルの高い講義を受けられる。日本ばかりでなく、アジアをはじめ世界から受講者が大阪へやってきますよ。勉強のロケーションとして中之島センターは最高です。10年先には大きな花が咲くでしょうね。

宮原 大阪は中小企業が多いですから、電気系や機械系などといった専門分野の技術相談ブースをいくつか設ける計画です。大学は遠いし、敷居も高いと言われますが、中之島は利便性が高いので大いに利

用してもらいたい。大学の敷居も低くしていきます。
關 私は、総合大学は都市が必要とするあらゆるシ
ーズを持つていると思っています。理工系だけでな
く、文学など文系の果たず役割は大きいものがあり
ます。

宮原 大学の教官には社会に貢献するというボラン
ティア精神があります。社会と接点を持ち、蓄積し
たものを社会還元して大学のある街の文化を高めた
い、活性化に役立ちたいと思っています。そうした
使命感は持っていますから行政は遠慮しないで我々
をどんどん利用してもらいたい。課題を示してもら
えれば前向きに一生懸命に取り組みますよ。

關 行政のやつてもらいたいテーマを決めて大学に
お願いする形をとれば具体的な連携がより実現す
るでしょうね。

▼都市再生の観光と観光学

關 大阪市が目指す都市再生の大きな柱の一つは観
光です。観光産業は根の深い重要な課題です。現在
の観光客は名所・旧跡など歴史的な遺産を見て回る
観光でなく異文化を体験したいから行く、というよ
うに観光の目的、ニーズに変化がみられます。異文
化とは、そこに住む市民が何を考え、どんな生活を
しているかで、それに触れることが観光だと思いま
す。大阪を訪れた観光客に、大阪の人たちの生活、
暮らしぶりがはつきり分かるような仕掛けが必要で
す。大阪には東京とは違った文化があることを具体
的に示し、理解してもらおうことが大切。評価に堪え
られるものでないといけません。そのためにも都
市基盤、時代を先取りしたまちづくりをしつかりし
ておかないといけません。

宮原 従来の物見遊山の観光から街に住む人たち
の生活ぶりなどを含めた異文化に触れる観光に変化

してきているということであれば、なおさら観光学
が大事になってきます。観光をそのように幅広く位
置付けてとらえると、学問として研究する重要なテ
ーマだと思えます。米国の大学には観光学がありま
す。観光は立派な学問です。文化を高める学問です。
大阪大学にもつくりたいですね。それと、観光にも
デザインが必要です。一部分だけでなく全体を網羅
したトータルなシステムデザイン力が必要です。

關 これからの大阪の観光は、東アジアを中心にア
ジアをターゲットにした受け入れ体制を考えていま
す。アジアの人たちは大阪に親しみを持ってくれて
います。そのためには文化的な花をちりばめておく
必要があります。特に食文化は重要です。旅の楽し
みは食べ物ですから。その点、大阪には「食」の資
産が十分ありますので、それを生かすことです。水
辺の活用も考えていきたい。その一つとして中之島
では水辺環境と緑を再開発に取り入れた「ハート・
オブ・大阪」にふさわしい国際アイランドを目指し
ています。財政的な制約がありますが、標的を絞っ
て一つ一つ着実に進めていきたい。

宮原 先日、スイスのローザンヌへ行ってきました
が、ホテルのボーイさんにまで「日本の大学からよ
く来ていただいた」と歓迎を受けました。あの人た
ちには、自分たちの街で大学を抱えているという意
識があります。ローザンヌのように欧米の都市のホ
ームページでは大学が紹介され、大学のホームペー
ジでも街の観光案内をしている。英語を話せない人
でも目的地に行けるようなきめ細やかな配慮をして
いるところがあります。ホームページにお金をかけ、
いろんなシナリオを想定したデザインになっていま
す。大阪はどうでしょう。JR大阪駅でインフォメ
ーションを探すのは一苦労です。シティマップもな
かなか手に入りません。こうした面でも大学と行政

大阪の地下は光ファイバーが走っていて、
インフラが備わっていますから、コンテンツを用意し、
現在のアクセス技術を使えば
ユビキタスな環境を実現できます。



との連携が必要です。例えば、空の玄関口、関西国際空港に到着された外国の方に、食べ物やホテル、観光名所など、大阪の街の情報を知らせるPDA（携帯情報端末）や携帯電話などの情報機器を貸し出すサービスをすれば喜んでもらえるし、大阪の魅力になるでしょうね。

——それと外国では大学も観光資源という考えではないか。ドイツへ行ったとき、観光局の方に「観光は文化を発信するもの」と胸を張って答えられ、なるほどと感心したことがあります。

宮原 その通りです。アメリカの大学では日本の生協に相当するカフェテリアが観光コースになっていて、観光客はそこで買い物を楽しんでいます。その大学と関係なくてもマスコットなどグッズが欲しくなりますよ。大阪大学も観光コースになるとよいのですが。もう一つは、大学も文化を感じさせるものにしていきたいですね。東大にはバーチャルミュージアムがありますが、外国の大学には、その大学の特徴を生かしたミュージアムがあつて、それが観光スポットになっているところもあります。IT技術を使えばできますよ。

▼**古典、文学は都市の財産**

——観光論など都市再生に対する新しい考え方をお聞きしましたが、それらを踏まえ、都市のイノベーションという切り口で行政、産業界とどのように取り組めますか。

宮原 大学の使命は人材育成ですが、社会や企業がどんな人材を求めているか、それに十分応えているかどうかを自問自答している面が大学にはあります。そこで、行政や企業からも意見を聞かせていただきながら人材を育成していくことも、ある意味での産官学連携だと考えます。大学の研究室が、ある企業

と一つの研究テーマに取り組むことだけが産学連携ではないと思います。それともう一つ。大学は目先のことでなく、文化の向上とか、すぐには役に立たないような研究をしています。それが重要であるという世論形成に行政の協力も得たいのです。大学は良い意味での無駄金、研究費を使って文化を高める役割をしている、という寛容な受け止め方をしてもらいたいです。理解をしていただく努力はもちろんしますが、国立大学も大学法人化によって効率化を強く求められるような機運があり、その点を危惧するものですから…。

關 私は大阪市立大学医学部出身ですが、優れた研究業績を多く残している大阪市の大阪バイオサイエンス研究所には基礎研究に特化していただきたいとお願ひしています。企業とタイアップして応用できる研究を、と結果を性急に求める意見もありますが、応用は基礎研究がベースです。しっかりと基礎研究があつて応用できるものが生まれるのです。都市にも一見役に立たないような哲学とか古典、文学の研究が財産になると思います。一見役に立たないものの中に人間の欲しているものがあるのではないのでしょうか。大阪大学は総合大学として長年にわたって蓄積された膨大な人的・知的資産がありますので、我々はそれを大いに利用させていただき、行政に反映させていきたいと願っております。そして、いろんなものが混在した街だとマイナスのイメージで言われる大阪を、歴史や文化と未来につながる技術や論理が一体となって混在した街にしたいものです。

宮原 行政側の諮問委員会などに一教官が委員として参加するのよすが、市の将来を描くグランドデザインのような総合的なテーマに大学が取り組む形をとると、まちづくりに対する共通認識がもつと生



都市にも一見役に立たないような哲学とか古典、文学の研究が財産になると思います。
一見役に立たないものの中に人間の欲している知的好奇心を満足させるものがあるのではないのでしょうか。

まれてくると思います。大学側にはスタッフがそろう
っていますし、やる気も十分あります。地域社会に
生きる大学として、そうした役割を果たしていきたい
い。

▼「ネオ御堂筋」の実現へ

——1937（昭和12）年に完成した御堂筋は、現
在の大阪の最大の遺産だと思えます。人、情報、文
化が行き交うネオ御堂筋をどう構想し、実現してい
かれるのですか。

關 都市再生に向けた取り組みでも言及しましたが、
御堂筋は大阪の顔であり、経済活動や交通、観光な
ど都市の活動の拠点であり、このメインストリート
が大阪のまちづくりを先導するよう、これまでもさ
まざまな取り組みを進めてきました。2001年4

月には「御堂筋活性化アクションプラン」をとりま
とめ、経済団体、まちづくり団体なども参画した官
民一体の活性化活動を行っています。また、近年、
宮原総長のご専門のITは、急速に発展し、人と人
とのコミュニケーション、電子商取引や、情報発信
など社会の仕組みやビジネスに普及してきており、
市民生活に大きな変化をもたらしてきています。大
阪の都心部御堂筋周辺は、都市の機能が集積し、光
ファイバーなどの情報通信基盤も整ったエリアです。
大阪市では、この御堂筋周辺をテストベッドとして、
関連産業の振興や、先進的ITを活用した社会の仕
組みづくりを狙ったITまちづくりに産学官で取り
組むこととし、いろいろな実証実験を、03年10月から
始めたところです。このような実証実験を通じて、
御堂筋がいつでもどこでも誰でもといったユビキタ

スな環境になり、将来の都市のあり方を示唆するよ
うな成果を出してほしいものです。

宮原 大阪の地下は光ファイバーが走っていて、イ
ンフラが備わっていますから、コンテンツを用意し、
現在のアクセス技術を使えば実現できます。そうし
たモデルを作って発信していくことによって、国際
都市大阪のイメージを高めていけばよいと思います。

關 将来の展望を切り開くには、ユビキタスネット
ワークをはじめとしたさまざまな技術や、知恵が必
要です。とかく大阪というと、お好み焼きしかない
イメージを持たれています。御堂筋へ行けば、未
来の都市の形が見える、そんな大阪のイメージを創
っていきたいですね。今後も情報工学が専門である
宮原総長はじめ大阪大学の蓄積された「知」をお借
りしたいと願っています。

「法人化でどう変わる？」

新生、大阪大学スタート! そして、10年後を語る

全国の国立大学が4月1日から法人化され、大阪大学も「国立大学法人大阪大学」として新たなスタートを切った。国の出先機関から独立の法人格を持つことで規制緩和され、大学の裁量は広がる。その一方で、教育や研究の成果が厳しく評価され、大学間の競争も激しくなる。成果主義が導入された大学の運営には企業人や有識者ら外部の人材も参画するが、決定権を握るのは学外者を含む役員会。“経営責任”を負う宮原秀夫総長はじめ副学長ら学内の役員8人に、新生大阪大学は法人化でどう変わるのか、10年後の阪大は、など現実に「夢」も交えながら語ってもらった。

●座談会／特集・国立大学法人大阪大学

- 総長
宮原秀夫 ————— *Hideo Miyabara*
- 総合計画室長（理事・副学長）
鈴木 直 ————— *Naoshi Suzuki*
- 教育・情報室長（理事・副学長）
鷺田清一 ————— *Kiyokazu Washida*
- 研究推進室長（理事・副学長）
馬越佑吉 ————— *Yukicbi Umakosbi*
- 評価・広報室長（理事・副学長）
馬場明道 ————— *Akemichi Baba*
- 財務・会計室長（理事・副学長）
仁科一彦 ————— *Kazubiko Nishina*
- 人事労務室長（理事・事務局長）
北見耕一 ————— *Kouicbi Kitami*
- 国際交流推進本部長（理事）
橋本日出男 ————— *Hideo Hashimoto*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞編集委員 — *Satoru Watanabe*

【阪大ニュースレター No.24】2004／夏号 掲載
2004（平成16）年6月1日発行



▼法人化がスタートして…

まず、スタートした感想、印象を、お聞かせください。

鈴木 4月1日にスタートできたことでほっとしています。一方で、気を引き締めていかなければならない、と強く意識しています。ご存じのように、日本における高校以前の教育がかなり深刻な状態になっており、法人化がうまく機能しないで国立大学の教育が低下してしまったり、高等教育のみならず、日本全体の教育が瀕死の状態になってしまうのでは、という不安を感じているからです。経営協議会の学外委員の意見を聞きましても、法人になった国立大学を受け入れる社会の目は私たちが考える以上に厳しいものがあります。ですから、教職員すべてが意識改革をしっかりと行つて、生まれ変わった新生大阪大学にかかわっていかねばならない、と考えています。

驚田 法人化による一番大きな変化は、大阪大学は国の中の機関でなく、社会の中の機関になった、ということだと思います。その中で、どういう位置に立つのかについて、すべての面で設計しなおす必要があります。具体的には、大学での研究や教育上での責任を、社会との関係でどのように果たしていくか、それをきちんとして社会に対して表明していかなければなりません。大阪大学が市民に何を呼びかけ、市民の要望にどのように応えていくべきか、ということを考えてみると、我々は意識改革をしっかりと行かなければならない、という思いをひしひしと感じます。

馬越 法人化に対しては、さまざまな批判もあり、欠点もあります。しかし、我々の身分が非公務員となり、また組織改編、運営面で大幅に自由度が増すのは、歓迎すべきことであり、このチャンスを生か



宮原秀夫 総長



す必要があります。文部科学省の認可が必要、規則で認められていないから、といった従来のような言い訳がきかなくなり、すべて自己責任といった意味では緊張感もあり、またやりがいもあります。運営面で、外部資金・競争的資金獲得が必要ではありますが、それを重視するあまり、本来の大学が必要とする教育・研究の原点を見失わないよう注意が必要です。ただ、今後は個々の研究者としての活動には限界があり、組織的な対応が必要で、研究推進担当として、基礎研究と応用研究のバランス、新規分野の開拓とともに、大型研究予算獲得、世界的研究拠点形成が可能なシステムを創成したいと思います。従来の部局、専攻、部門の枠組みにとらわれることなく、異分野との連携を強化し、大阪大学から絶えず革新的研究が発信できるような体制を整えたいと思っています。

馬場 法人化スタートにあたって組織評価の枠組みをつくり、その認識に対する学内のコンセンサスもほぼ得られたと思っています。それを一期6年の間にきちっとした評価システムとして成熟させることです。各方面から指摘されているように、大学の評価は難しい問題ですが、法人化によってそれを強く求められています。その際、留意すべきことは、我々の教育・研究活動は、社会的な負託を受けているということです。そのことを認識し、社会とのかわりの中で、大学の活動を分かりやすく表現して

法人化による一番大きな変化は、
大阪大学は国の中の機関でなく、
社会の中の機関になった、ということだと思います。

理解を得るとともに、社会の要請を的確に取り入れて行くという双方向の環境を作り上げていく、そういう視点で大阪大学の評価・広報をとらえていきたい。大阪大学は、教育・研究でわが国の優秀な大学として個々の素晴らしい活動を維持しているが、それが全国レベルで一般にイメージされているかといえば、必ずしもそうとは言えません。もっと浸透できそうな広報を模索しているところです。

仁科 法人化に対するいろんな考えがあると思いますが、できれば、法人化への対応は、総長以下役員の方の仕事としてやっていただいて、教育・研究に携わる先生方は法人化になっても基本的にはあまり変わらなく、今までと同じような姿勢で取り組んでもらいたい、というのが私の正直な感想です。法人化の望ましい姿については多様な意見があると思いますが、それも一つの望ましい姿ではないかと思っています。そのような観点から私が担当している財務関係に関しては、あまり不満、不安が出ていないようなので、一応、OKかな、と。少し楽観的かもしれませんが、今のところ、うまくいっている、と思っています。

北見 スタートしたばかりで、学内外において何が変わったのかは、まだ見えていない。そういう意味では、法人化に対する印象について述べるには、短期的にはまだ早いな、と思います。しかし、しばらくして法人化で阪大はこう変わった、と打ち出さないといけないわけですから、時間の経過とともに、我々に対する責任が問われますので、身の引き締まる思いです。

橋本 先ごろ、アメリカのスタンフォード大学で環太平洋大学協会の会議があり、私も出席しました。その中で大学の国際化は必要か、必要であれば、どのようにして取り組むべきか、などの議論が生まれ



北見 耕一 人事労務室長



鈴木 直 総合計画室長

た。当たり前だと思っていたことを改めて提起されてみると、国立大学の法人化に当たって、大学の国際交流、国際化について根源から考え直す良い機会ではないかと思えます。法人化への取り組みとしては、そうしたことから始めていきたいと考えています。

——総長としての感想を一言。

宮原 さまざまな検討審議によって、何とかスムーズにテイクオフできたことに、正直、ホッとします。そうできた、教職員の努力に敬意と感謝を述べたい。それと、スムーズなテイクオフということでは、7人の理事の方と共通認識を持って推し進めることができたことは、非常にありがたいことです。

▼法人化で何が、どう変わる…

——法人化に当たったっての思いを述べられましたか、国立大学法人大阪大学として何が、どう変わるのか、という点でいかがですか。

宮原 それは二つあると思います。一つは、教職員の意識改革です。法人化とは、自らの行動計画を策定して実行し、検証する。検証とは馬場先生が言われた評価です。評価で一番大切なことは、自己評価でしょうね。今までなかった評価のサイクルができたことによって、自分の活動はどうなのか、自分はどのような位置に置かれているのか、外部評価を含め、自分を見つめ直す機会に恵まれた、ということ。そして、これをチャンスに教職員のインセンティブを高め、意識改革ができると思います。

もう一点は、規制緩和です。大学の古い歴史の中で、社会に合わないようないろいろな規制が累積し、それが研究の妨げになっていることがありました。学生に対しても不都合なルールが適用されていた、と私は思っています。それを法人化によって大学自らの規定を定めることができる、ということ。す。

日本では人を文系、理系に分けて考える習慣があり、このことが日本の成熟した文化の発展を妨げているのではないかと思います。
文系、理系にとらわれない教育・研究を阪大でできればと思います。

大学としては新しいルールを決め、教員は周囲の雑音に惑わされることなく、仁科先生がおっしゃった、あまり変わらない環境で自由に研究を進めることができるようにしていかなければならない、と思っています。

▼期待される10年後の阪大は…

——運営組織として役員会、経営協議会、教育研究評議会があります。そのことに議論を集中し、現実的な話になると、堅苦しくなる恐れがありますので、「10年後の期待される阪大像」をテーマに、大学人として、できるだけ自由気ままな夢を語っていただきたいと思っています。

鈴木 大阪大学から21世紀のルネサンスを、というのが私の夢の一つです。これには二つの願いが込められています。一つは、文系、理系にとらわれない、新しい文化、学問の誕生です。ご存じのようにルネサンスは14世紀から16世紀にかけてイタリアに始まりヨーロッパ全土に広まった文化革新運動ですが、この時代にはサイエンス、科学という言葉はなく、芸術の語源であるアルス（ars）という言葉があり、それが芸術のみならず今日の科学や技術という意味を含んでいたと聞いております。すなわち、芸術と科学が融合していたわけです。その後、Scienceという言葉が生まれ、産業革命などを経て科学が芸術を

離れていったのではないのでしょうか。ところで、日本では人を文系、理系に分けて考える習慣があり、しかも、高校生の早い段階で区分する傾向があります。このことが日本の成熟した文化の発展を妨げているのではないかと思います。文系、理系にとらわれない教育・研究を阪大でできればと思います。もう一つの思いは、阪大から心豊かな人材を輩出することです。ルネサンス時代にも精神的な豊かさが随



仁科一彦 財務・会計室長

分、強調されていたように私自身は感じています。いろんな物事に感動する心の豊かさや思いやりを、もう少し大切にする必要があります。

鷺田 大学はあらゆる知が集積している所です。政治、経済、科学技術、芸術、医療、それらについての知を集め、社会が抱えている問題や課題を分析し、私たちの社会のあり方を皆で考える場所が大学だと思います。そうした総合的な研究機関として大阪大学が10年かけてぜひ、やっていけたらと思うことは、大学が社会の知のハブになることです。単なるアカデミズムの知だけでなく、民間研究所の知、市民サークルの知、さまざまな知が大学で交差するような、大学がハブ化していくことが望ましいと思います。これからは、生涯、自分を伸ばしていく生涯教育の時代に入ってきますから、市民の方たちが大学の中を自由に出入りされ、大学が知的な一つのタウンになつたらいいな、と思います。

教育のほうでは、市民から信頼される見識を持った研究者の養成です。今、社会が直面している問題で一つの学科で解決できるケースは、ほとんどありません。少子高齢化問題や環境問題、多文化社会など、どれをとってもそうです。これからの科学研究者は一つの専門分野に詳しいだけでなく、自分の専門分野が他の分野とどのようにリンクしていくのか、社会の中でどのような位置にあるのか、をきちっと見渡したうえで自分の専門研究を位置付けられる、広い視野と深い教養とを併せもった研究者でなければなりません。専門は大事ですが、専門主義に陥つてはいけません。つまり、シャープな科学者であると同時に、社会、あるいは市民に対して思いやりのある科学者ですね。宮原先生は、「柔らかな専門家」とおっしゃっています。

馬越 幅広い知識、教養を身につけ優れた専門的能

力を有する人材の養成、これは理想であり研究型総合大学である大阪大学ではそれが可能ですね。しかし、歴史に名を残す研究者、芸術家は奇人・変人が多く、我々の理解を超える部分があります。こういった一風変わった天才を生み出す土壌を大阪大学に築きたいですね。同じキャンパスで学んだ同僚が歴史に名を残す、考えただけでも楽しくなります。単位履修など関係なくその才能を伸ばすスーパーエリート研究者養成コース、産業界を支える実務者養成コースといったように目的志向型のコースを導入し、それぞれの分野で社会を指導的に支える人材を養成する、その中心に大阪大学がある。そうあってほしいと思います。

馬場 基本的には鈴木先生と鷲田先生と同じ考えですが、大学は文化と知性を感じる所、21世紀の知性を創造していく役目を担うべきです。人間が生きて行くうえで求められる精神的な面とか物質的、経済的な面、知的な面、それに加えて文化面に、大学はその時々新しい価値観を提示していくべきでしょう。例えば、関西の熱狂的なファンに支えられた阪神タイガースは、この2、3年の間に全国にファン層が広まっています。大阪大学は根強いバックグラウンドがあり、地力も持っていますが、大阪大学も関西だけでなく全国に熱狂的な阪大ファンを持つ个性的な大学になってもらいたいし、なっていくでしょう。社会と直結した形で。それと、部局にとらわれないで、ソフト面での研究を融合してやっつく自由闊達な雰囲気広がってほしいかな、と願っています。

仁科 日本の社会は、大学における入学の偏差値ランキングは大好きですが、卒業生のランキングがありません。それをつくって、当然大阪大学は1位になる、という夢を私は描きました。全く根拠がない



馬場明道
評価・広報室長



鷲田清一 教育・情報室長

わけではありません。阪大と競争関係にある他の大学の非常勤講師をしています。同じ問題で試験をすると、大阪大学の学生のほうがよくできることも多いのです。アメリカのビジネススクールで行っているMBAランキングのようなことをやれば、10年後には阪大卒業生がナンバーワンというのは、それほど難しい夢ではありません。

北見 教育、研究が向上していくには、基盤というか、新しく使い勝手の良い施設設備が必要だと思います。阪大は他の大学に比べ、建物の整備はそれほど良くありませんのでもう少し手を入れることができれば、と考えています。それと、学生が生活しやすい大学にするために、食堂をリニューアルするとか、豊中キャンパスに駐車場を設けて、キャンパス内を学生が安心して歩けるようになれば、と。財政的な面はさておいて、そんな環境になれば、という夢があります。それと、医療短大跡地を徐々に整備しており、10年後は随分良くなることだと思います。

橋本 阪大生の半分は在学中に留学する。阪大のキャンパスの学生の半分は留学生であり、しかも、留学生は欧米、中国だけでなく、その他のアジア諸国からも来ている。教員も半分は外国での教育・研究経験があり、それと同時に阪大の教員の半分は外国のどこかの大学で教育・研究をしている。これが私の描いた10年後の阪大です。

宮原 私は月並みな言葉ですが、大阪大学はきれいな大学ですね、素晴らしい大学ですね、自分の子供はぜひ、あそこに入りたい、と社会の人たちに言われるような大学にしたい。それと、ランキングはあまり好きではありませんが、大阪大学が少なくとも世界ランキングの10位以内に入っていること。今は、50位ぐらいですが。もう一つは、旧帝大の中で農学

部がないのは大阪大学ですから、総合大学として、そのような学部をつくりたいですね。

——皆さんの話を総長としてどう受け止めましたか。

宮原 皆さんと同感です。すべて、実現したい。

——鷺田先生、大学を知的なタウン、のイメージをもう少し具体的に。

鷺田 4月27日にオープンした大阪大学中之島センターについて、ある新聞が「阪大が大阪に帰って来る」と表現していたのを読んで、私はとてもうれしく思いました。街中に文化的、あるいは知的な刺激を与えてくれるシンボリックな存在があることは、市民にとっては大事なことです。研究をするのに良い環境というだけでなく、中之島センターが市民の集えるもう一つのタウンになればよいのに、という思いがあつて、大学を知のタウンと言ったのです。

宮原 大阪市にとって中之島は、最後の砦ですよ。この数年、都市開発が進められ、大阪市立近代美術館や舞台芸術総合センターの建設も計画されているようですが、経済界の方々の力も借りて、描いている総合的なプランを早く実現されるようお願いしています。

▼学外委員にどう活躍してほしいか…

——現実に戻って初年度、まず実現すべきこと。第1段階として、総長にお伺いします。

宮原 法人化によって大阪大学の構成員が良くなった、と言われるようになることです。これだけ改革しているのか、と実感を持てるようにしたい。対外的にも目に見える形をつくっていききたい。行動計画を立てて実行し、と哲学的なことを言っても、日常生活は何ら変わらないよ、では困るわけです。普段行っている研究生活で、変わったな、と実感できるようにしたい。そのためには経営協議会の意見をお



馬越佑吉
研究推進室長



橋本日出男
国際交流推進本部長

■法人化とは

国立大学が「国立大学法人」に衣替えし、国から独立して法人格を持つことによって大学運営は、教授会や評議会が中心のボトムアップ型から学長が頂点のトップダウン型に変わった。運営機関は、大学運営についての最高議決機関の役員会と大学の経営に関する重要事項を審議する経営協議会、教育研究に関する重要事項を審議する教育研究評議会が構成。

学長は、自ら指名する理事で構成する役員会で大学運営を決定し、予算配分を行う。職員採用など人事権も学長の権限で行える。大学の裁量が拡大され、国から支給される運営費交付金（大学予算）は大学の判断で自由に使える。ただし、大学運営の指針となる中期目標・計画の達成度をともに文部科学省の第三者評価機関・国立大学法人評価委員会が評価し、その評価で運営費交付金が配分される。

戦後の新制国立大学発足以来の大改革と言われる国立大学法人化は、教育・研究の成果を厳しく評価する成果主義を導入し、大学に経営責任・経営努力を求めたものといえる。

聞きしたい。

——法人化で注目すべき点は経営協議会です。メンバーにはそうそうたる方々が名を連ねておられます。この方々にどのような協力してもらおうか、もらえるかがポイントの一つだ、と興味深くもあります。

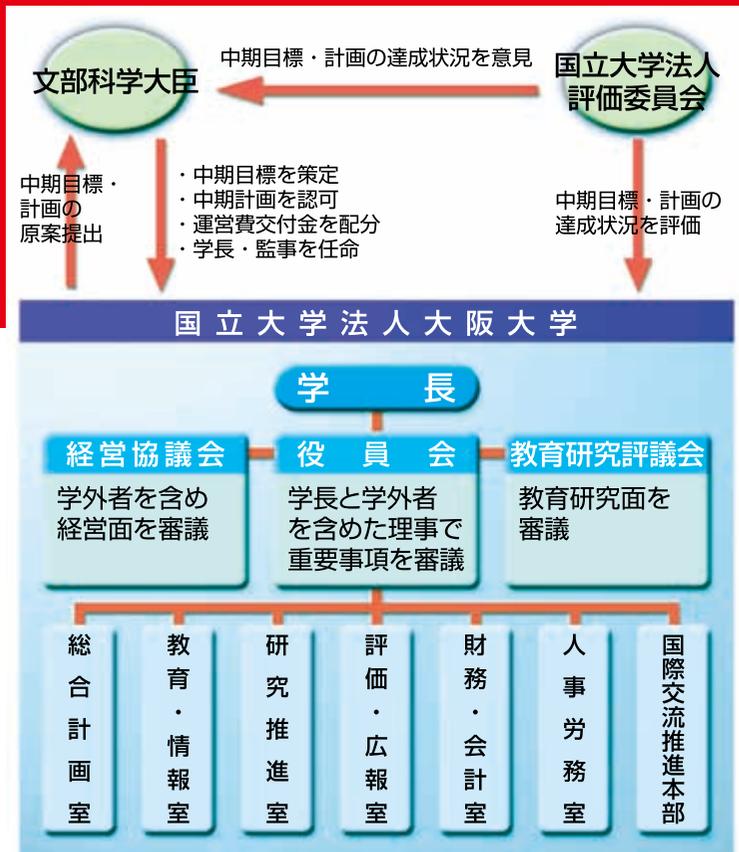
鈴木 本来の目的は、国立大学の経営に関する重要事項を審議していただく、となつていますが、それにとらわれず、総合的な視点で提言をいただければ、と思つています。「経営」と名前がついているだけに、大学の経営についての議論をされるように受け止められますが、企業経営を大学の運営にそのまま持ち込んでも決してうまくいくとは思えません。財務や経営内容の改善など、企業経営から学ぶこともたくさんあると思いますが、それらは自分たちでやるべきだし、できることだと思えます。日本の企業のあり方、社会のあり方も含めて議論をしていただ

き、その議論が大阪大学の発展だけでなく、日本の中等教育の充実につながっていくことができればよい、と思います。教育は、小・中・高校が個々に行っているのではなく、大学教育までの一つながりで考えるべきであり、大学の中等教育に与える影響は大きいものがあります。我々も認識を改めないといけません。同時に企業も教育に対しての責任があります。そういう意味で総合的な視点で一緒に考えていただければ、と思います。

鷺田 学外委員の方は、市民の代表であり、大阪大学の応援団である、と私は考えています。経済同友会の方々に大学に何を期待されるのか、と意見を聞いたことがあります。印象に残ったのは、大学でできない研究は大事にしてほしい、と言われたこと。もう一つは、実際のな教育を、ということ。企業の社員が海外に出た場合、夕食を共にしながら日本の文化について話せるような真の教養の教育と、海外に出る社会人の再教育をも大学でもらいたい、ということでした。社会貢献と言えば、つい「産学連携」と考えてしまう傾向がありますが、もっと重要なのは市民グループ、NPO、地方行政をも含めた「社学連携」です。そのトータルな構想を経営協議会の議題にして、それを学外に広報してもらい、議論をしていただく、そんな応援団の役目を期待しています。

鈴木 企業も社員に日本の文化や歴史を教えるべきだと思います。それと同時に中等教育で、この辺までは教育してもらいたい、という情報を大学からもっと発信すべきでしょうね。それがあまりなされていないように思います。

馬越 法人化後の大学に対する構成員の認識と経営協議会委員ならびに社会の期待と要望には随分差があるように思います。構成員の多くは、従来の大学



大阪大学が10年かけてぜひ、やっていたらと思うことは、大学が社会の知のハブになることです。

の制度、身分をまだ引きずっており、意識改革が十分とは言えません。もちろん、経営協議会の先生方の意見をすべて受け入れる必要はありませんが、社会の代表的意見として真摯に受け止め、大学改革に反映させる必要があります。言葉は適当でないかもしれませんが、また逆に大学の知の社会への発信をお願いできればと思います。大学自らより、第三者からの情報の方が、はるかに社会の信用度はありますから。**馬場** 学外委員である有識者の方の意見は、大学に対する社会の見方をより具体的に提示していただけるもので、ややもすれば偏りがちとも言える大学人の考え方に新しい視点を与えてくれると思います。ただ、企業の重要なミッションは利益を上げることだと思いますが、大学は国民の負託を受けて優秀な人材を育てるのがミッションです。法人化で国も企業経営的な感覚の導入を大学に求め、数値目標の設定を強いている面があります。国家試験の合格率とか大学の充足率を上げるなどの点はよいとしても、教育を数値で一元的に測るには無理があります。学外委員の方々のご意見により、教育・研究により具体性と柔軟性を付与していければよいのではないのでしょうか。

仁科 学外委員に対する考えは、基本的には皆さんと同じですが、私が企業人だったらどう考えるか、という観点で申します。企業人には、戦後の日本の経済を支えて、20世紀後半には世界のチャンピオンにした、という自負と実績があります。世界のエクセレントカンパニーといえば日本の企業が入っている。それに対し、日本の大学は世界のトップではないじゃないか、と反論してくると思います。それを踏まえて、異なる立場の意見は拝聴すべきでしょう。盲従するわけではありませんが、それともう一つは、

法人化になったからといって、
学校経営や金儲けのことを考える必要はありません。
これまで通り好きな教育・研究に
取り組んでもらいたい。
研究者は学校経営について
知らなくても構わないと思います。
より教育・研究を向上させていくことに
努力してもらいたい。

のことを考えています。一つは、海外の先進国の大学はどうしているのかを調査したい。二つ目は、国際経験豊かな学外委員の意見、アイデアを取り入れていきたいと思っています。

宮原 経営協議会を開いて、我々の要望、お願いしたいことを伝えたいですね。でないかと、学外委員の方は、何をすればいいのかわからないから、学ばないか、学ばない部分もありませんが、委員の方には経営者という感覚でなく、バランス感覚のある社会のオピニオンリーダーとしての見識に期待しています。ですから、大学に対する意見を拝聴するだけでなく、委員の方を通じて大学に対する正しい世論を形成していただきたいのです。大学は研究費をたくさん使って何しているのだ、という批判も受けませんが、「大学の研究は市民生活にも関係する大事なことで、そのために、ちゃんと努力していますよ」と教育・研究の実態を正確に社会に発信してほしいのです。我々が言っても素直に受け止めてくれない面がありますから。そのためには学外委員の理解を得ることです。

最後に、法人化初代総長としての決意を。

宮原 法人化は開学以来の大変革で、運営組織も大きく変わりましたが、我々にとってもいろんな意味で改革をもたらす絶好のチャンスになるものと確信しています。教職員にもチャレンジ精神を持ってほしいが、法人化になったからといって、学校経営や金儲けのことを考える必要はありません。これまで通り好きな教育・研究に取り組んでもらいたい。研究者は学校経営について知らなくても構わないと思います。より教育・研究を向上させていくことに努力してもらいたい。その環境をつくっていくのは、我々役員役員の役割です。

「大学と企業」 いまからの産学連携

日本再生のカギ、企業と大学のコラボレーション

ものづくりの高い技術を持つ中小企業が大阪東部エリアに集積しています。
日本の産業の将来を実は担っている中小ものづくり企業と
大阪大学が知恵を寄せ合うにはどうしたらいいのか。
産学連携を活用してユニークな活動を展開する地元企業の経営者に集まっていただき、
産学連携のこれからを話し合いました。

●座談会

- クラスターテクノロジー(株) 代表取締役
安達 稔 ————— *Minoru Adachi*
- (株) 中央電機計器製作所 代表取締役
畑野 吉雄 ————— *Yosbio Hatano*
- (株) コンフォートラボ 代表取締役
棕本 満 ————— *Mitsuru Mukumoto*
- 大阪大学 総長
宮原 秀夫 ————— *Hideo Miyabara*
- 大阪大学 副学長
馬越 佑吉 ————— *Yukichi Umakoshi*
- 司会 近藤伸二・毎日新聞大阪本社経済部長 — *Sbinji Kondo*

【阪大ニュースレター No.25】 2004/秋号 掲載
2004(平成16)年9月1日発行





▼大学が仕組みを強化

まず大学の側からどうぞ。

宮原 産学連携が世の中の大きなテーマになっていきます。大阪大学のモットーは「地域に生き世界に伸びる」。大企業だけでなく、地域に数多い中小企業との技術交流を進めていきたい。地域の産業が発展しないと、大阪大学の発展もありません。「大阪大学は敷居が高い」という印象を持たれているとも聞きますが、決してそんなことはありません。門戸を開放

しています。できるかぎり協力したい。

産学連携をきちんとやるために、04年4月から馬越先生に研究推進担当副学長をお願いしています。大きなテーマとして産学連携を取り上げ、知的財産本部と先端科学イノベーションセンターをつくりました。大学として産学連携とどのように取り組もうとしているのか、馬越先生から説明していただきます。**馬越** 国立大学が国立大学法人となり、知的財産にかかわるシステムもがらりと変わりました。特許の帰属先は国か個人か、先生方の届け出を受けて大学の発明委員会が決めていましたが、04年からは基本的に大学へ帰属することになりました。

日本の産学連携は、アメリカに比べ熱心でないと言われます。共同研究に企業が出す研究費が非常に少ない。その理由の一つに、大学の先生の機密保持の問題があります。せっかく開発研究してきた情報を企業が提供しても、不用意に学会で発表したり、ライバル企業に話したりする。これでは危なくて共同研究などできません。

そこでこれからは、共同研究を始める前に特許に関する取り決めをします。企業と大学の共願という形をとりますが、実際には「発明」という「名前」だけを大学は取る。特許が使われて産業の活性化につながる。これが大学としての目的です。

知的財産本部をつくった目的の一つは、先生方の意識を変えることです。機密保持の意識を持つていただき、企業から信頼されるようにしたい。

研究そのものの連携については、先端科学イノベーションセンターが窓口となります。従来通りの共同研究だけでなく、大阪大学の中に企業のラボをつくっていただくことも可能です。企業規模は問いません。東大阪をはじめ大阪府下で「ソシオ大阪」という産学技術交流会を開き、中小企業のものづくり



宮原秀夫 総長

関西の大学同士で連携して、
関西全体の地域に
貢献することが大事。

について少しは把握したつもりです。産業界の要望をもっと聞かせていただきたい。

▼活用を進める企業側

——企業の側の現在の取り組みと大学に対する要望は？

棕本 足の障害治療の研究を大阪医科大学と進めていて、歩行状態を解析する機器が必要となりました。機器の開発・改良について大阪大学から技術を提供していただき、計測機を現在研究中です。

その過程で感じたのは、大学が非常にオープンになってきていること。主要社員3名の私どもでは大阪大学の鼻にもかからないのではないかと以前は思っていました。しかし実際に話してみると、企業の大小を問わず、研究成果の社会還元を重視しておられる印象が強い。

大企業は、研究テーマが非常に大きく基礎研究的になりがちで、動きが遅い。研究成果をすぐに生かすには中小企業が向いている。地域還元を考えると、中小企業と大学との連携が重要だ。そんな意識を生方から逆に教えられました。大学の英知を吸収しながら私どもでも社会貢献できるのかと目の覚めた思いです。目先の成果よりも考え方の成果が非常に大きいのです。

今、国連の世界保健機関は、運動障害を未然に防ぐ取り組みに熱心です。私どものような中小企業をフィルターにして大阪大学の思いを、大発発の技術として世界にフィードバックできるよう、連携を進めたい。

畑野 産業科学研究所や蛋白質研究所など大阪大学の研究室をいろいろ見せていただき、先生ともお会いするうち、阪大さんと何かできたらいいなと考えるようになりました。ただ、阪大といえ雲の上の

存在と思っていた。しかし見学に足を運ぶうち、皆さんからあれこれ声をかけていただくようになりました。今は薬学の先生と共同開発をしています。私どものような中小企業となぜ連携するのか伺ったことがあります。「地域の企業が伸びないといけない。伸ばすには中小企業の活性化が必要」ということでした。ありがたい話です。

我々は、即断即決で小回りがききます。動き出して1年以内で商品開発にこぎつけ、学会発表もできました。この秋から売り込みに行こうというところまでできています。そのほか、ロボットがらみのコンソーシアムにも入っています。おもに介護分野のロボット開発を進めようとしていて、医学部からも声をかけていただいています。

成果を早く還元したいという熱い思いを持つ先生が大勢いると感じました。中小企業の意識が変わるような動きを生生方がされている。一方、独自技術を持つ中小企業はたくさんある。大阪大学は宝の山だと思っています。実は近々新たな研究室に打ち合わせに伺うという話を社員から聞いています。企業と大学のコラボレーションが大阪や関西の活性化につながるのでは。

安達 産研の先生方とナノテクノロジーにかかわる研究をやり、パテントを取ったのがスタート。1975年から始まった大阪大学とのコラボレーションは今も続き、四十数名の先生方と何らかのことをやってきました。今はバイオや蛋白分離などの研究開発を進めています。また阪大の講師を退職してうちへ来てくれた社員もいるし、NEDOのフェローとして来てくれた人もいます。

シリコンバレーをはじめとしてアメリカでは大学と企業との人事交流が盛ん。日本はあまりありません。2年間のフェローで大学から研究者を確保した

大学の構内に企業の研究所を建てていただいて、そこで大学と企業の研究者がそれぞれ籍を置いたまま共同研究するという方法も取れる。



馬越佑吉 副学長



標本 満氏

大企業は、研究テーマが非常に大きく
基礎研究的になりがちで、動きが遅い。
研究成果をすぐに生かすには
小企業が向いている。

ものの、1年だけでまた他の大学へ移ってしまったり例もあります。研究に対する企業側の理解も、事業化に対する大学側の理解も、ともに低い。もっと人材交流をすれば、シリコンバレーのように活発化するはずです。

大学発ベンチャーと盛んに言うけれど、デスバレーをなかなか乗り越えられなくて、実際は一握りしか生き残れない。リスクが大きいのです。それよりも、人材交流を含めた新しい仕組みの方が新産業創成に結びつくのではないかと。

この間、発起人となった阪大融合技術懇談会はフオトン・バイオ・エレクトロニクスの融合をやるうとしています。技術融合によって新しい産業を組み合わせようという考え方です。技術を融合した形で連携の提案をしてもらえば、もっと強い技術が生まれる。融合された技術の提供と活発な人事交流。この二つが重要だと私は感じています。

▼活性化へのアイデア

馬越 人材交流は一時的な形がいいのではないかと。数年もたつと移籍先にとっぶりつかってしまつて、交流の意味がなくなつてしまいがち。お互いの立場を理解したうえでまた元のところに戻れば、双方にいい。

ただ給与制度がネックになっています。宮原総長の発案で寄附講座は年俸制を導入しましたが、ほかは従来の給与制度のまま。これでは人件費の予算が読めません。また大学の教員が民間企業に向向する形も今の人事制度ではとりにくい。

国立大学法人化でフレキシブルになり、大学内に何を建てようが勝手ということになりました。大学の構内に企業の研究所を建てていただいて、そこで大学と企業の研究者がそれぞれ籍を置いたまま共同

研究するという方法も取れる。これなら、事実上の人事交流がすぐできます。

安達 大企業と違い、中小企業は少ない人材でやりくりしています。ポストドクターが数年間企業で研究するといった方法が取れないものか。

億単位で毎年もらつていた研究補助金申請を今期(04年度)から一切やめました。報告書類が膨大で、研究員は報告を出したら「やれやれ仕事が終わつた」となる。しかし、目的は事業化です。大学ならそれもいいが、企業では困る。研究と事業化の中間のことをできる人材交流等の仕組みが必要です。

宮原 いい指摘をいただきました。たしかに分厚い報告書を書くことが重荷になっています。「ポストドクターで研究しなさい」といったいろんなルールをできるだけ緩くして、自由に活動できるようにしたい。

ベンチャーについても同様です。大学人が企業を起すのは大変。それよりも、大学の技術を企業に提供して、既存の企業を発展させていく。その支援の方がよほどいい。リスクも少ないし、やりやすい。資金集めは大学の本来の仕事ではありません。ベンチャーをやるくらいなら、既存の企業を支援したほうがいい。

安達 これまでは、大企業の下請けを中小企業がしてきました。しかし今は、ナノテクノロジーで大企業が事業化しようにも加工する中小企業がない。そこで提案です。ナノテクノロジー・プラットフォームを東大阪につくり、そういうことができるまちづくりをやるうというわけです。そこに大学も入つてもらい、ポストドクやマスターに活躍してもらおう。

▼メリットは大きい

——標本さんの会社はクリエイション・コア東大阪※に入られたのですね。



安達 稔氏

研究に対する企業側の理解も、
事業化に対する大学側の理解も、ともに低い。
もっと人材交流をやれば、
シリコンバレーのように活発化するはずです。

大阪大学は宝の山だと思っています。
企業と大学のコラボレーションが
大阪や関西の活性化につながるのでは。

——産学連携といっても最初のとっかかりが難しい
と思います。
畑野 産官学の連携を進める中小企業家同友会のオ
ンリーワン研究会がきっかけでした。相談会に行っ
ているうちに「それなら一緒にやりましょうか」とな
りました。研究室の先生とある程度コラボレーショ
ンしているうちに「実はこんながあるんやけど」と。
研究施設を見学しても「すごいな」だけで終わっ
てしまいます。「お気軽に」と言っていただけけれ

棕本 ささまざまな種類のインキュベーターが全国に
建設されていますが、必ずしも企業の入店状況がい
いとは言えないようです。しかし、クリエーショ
ン・コア東大阪だけは入店の競争率が高く、第2期
の募集に関しても活況を呈しています。なぜなら、
ソフトがハードに付帯しているからです。人や事例
をつなぐインキュベーター・マネージャーがいて、企
業ニーズに合わせてうまく企業と大学や自治体をつ
ないでいる。情報を交通整理する仕組みがうまくで
きていることが大きな成果といえます。



畑野吉雄氏

棕本 つなぎ役がデータベース以上に必要。窓口の
向こうにいる先生や情報を引っ張ってきてくれる人
がいろんな所にいるといい。
馬越 電話で相談すれば、関連する先生を何人か集
めてディスカッションできる。そんな態勢を考えて
いますが、そういうものがないのかどうか。
安達 問題は窓口。窓口が一本化している京大と違
い、阪大はあちこちが出てきて、メールを読むだけ
でも大変。窓口をまとめてほしい。
宮原 痛いところを突いていただいた。そのとこ
ろを馬越副学長にお願いしています。
馬越 最先端になるほど多岐にわたる専門知識を要
求されます。幸い阪大にはたくさん部の局がある。
いろんな分野と自由につながることができます。どん
な研究がどこでやられているか一元化する組織にし
たい。実際の研究はそれぞれの先生ですが、個々の
アクセスは統一窓口でも部局の窓口でも受け付ける
形です。

棕本 大阪大学の技術だけでは解決できない問題も
あります。阪大のAという技術と京大のBという技
術を応用したら新規に特定分野に生かせるというよ
うな学データのデータベース構築の必要性を感じます。

ど、その先がどうなるか見えてこない。ホームページ
にアクセスしても、論文の概要は分かるものの、
具体的にどう活用できるのか見えてきません。特許
の内容をポンと示されても、自社の新製品開発に結
び付くのか判断できない。実際の交流があるから、
ビジネスに結び付くのです。
安達 技術懇談会にしても、集まる方は大企業がほ
とんど。中小企業が気軽に質問できる雰囲気はない。
それなら、東大阪商工会議所でやったように先生方
がどんどん出て行けばいい。アドバイザー的な仲介
役もそこにはいて話が進みます。
棕本 さまざまな種類のインキュベーターが全国に
建設されていますが、必ずしも企業の入店状況がい
いとは言えないようです。しかし、クリエーショ
ン・コア東大阪だけは入店の競争率が高く、第2期
の募集に関しても活況を呈しています。なぜなら、
ソフトがハードに付帯しているからです。人や事例
をつなぐインキュベーター・マネージャーがいて、企
業ニーズに合わせてうまく企業と大学や自治体をつ
ないでいる。情報を交通整理する仕組みがうまくで
きていることが大きな成果といえます。

宮原 重要な指摘です。関西の大学同士で連携して関西全体の地域に貢献することが大事。共同研究というと、契約を結んで研究費はいくらでとちゃんと決まってるからということになると思いますが、大学の研究者にとってそういうことは二の次三の次。自分の研究が社会で使われるということが根本的なインセンティブになっていると思います。

馬越 研究所関係は既に大学間連携プロジェクトを企画しています。例えば阪大の産業科学研究所と北大の多元物質科学研究所が連携して新しくセンターをつくり、そこに産業界が入る。東京工大の応用セラミックス研究所もある。これからは、部局単位でもコンソーシアムのような形で連携しなければ。

▼地元の中小企業を元気に

宮原 強い大学は強い大学と連携してより強い大学になっていく。それが結局日本のためになります。

畑野 今の段階では、学術発表にとどまり、具体的事例までは出ません。「こういうものをつくってほしい」と具体的な提案を交流会などで先生からいただいたら、「うちでやります」と手を挙げる中小企業はわざわざ出てくる。すぐコラボレーションになります。

安達 東大阪の場合、各大学にコンソーシアムへ参加してもらい、それぞれの先生に研究会のアドバイザーになってもらっています。そういう形にすると必然的にコラボレーションになる。知的財産の問題は、その中で発案したものについてはすべて会のもので判断する。そういう確認を最初にとっています。そこへ大学の先生も入ってもらい、そこへみんなが群がるようにする。なおかつ経産省にも入ってもらう。そういう方法ならスムーズに入りやすいと思います。

——最後に一言。

棕本 研究成果の社会還元という大学の強い意志を

中小企業が理解すれば、取り組みは案外簡単なのかと理解しました。強くPRしていただくよう希望します。

畑野 21世紀は中小企業の時代と言われ、私もそう実感しています。能力ある会社にアウトソーシングしようというのが現状であり、大企業の製品開発を私らの会社でも随分やっています。阪大さんの力を借りて中小企業の力をさらに高めていただき、先生方がお持ちのシーズをコラボレーションで世に出していきたい。それが関西復権にも日本復権にもつながるのではないかと。

宮原 参考になる有益な意見をいただきました。ユーズレターにすることでなく、対応できることを早急に改善していきます。もとより関西という地域と大阪大学は連動しています。ともに元気になるために、ともに発展するよう協力してやっていきたい。本日はどうもありがとうございました。

※クリエイション・コア東大阪は中小企業のエコノミクスを支援する総合施設。新しい産業を生み出すインキュベーターなどの役割を果たす。産学連携機能をもつ第2期施設は2004年夏にオープン。大阪大学はじめ関西の主要13大学のリエゾンオフィスが入居した。

「教養」と「デザイン力」と 「国際性」を

「阪大はダサイ」のイメージを払拭。 受験生の側から総長に注文!!

国立大学から国立大学法人へ組織のあり方が変わりました。
新しい試みにこれまでもチャレンジしてきた大阪大学は、
これを機にさらにな変わろうとしています。
今回は、受験を控えた高校3年生の保護者に集まっていただき、
ざっくばらんにあれこれ注文をつけていただきました。

●座談会（出席者・順不同）

- 京都府・洛星高校から
小瀧 努さん———*Tsutomu Kotaki*
- 大阪府立北野高校から
平井和美さん———*Kazumi Hirai*
- 大阪府立高津高校から
河 福子さん———*Fukuko Kawa*
- 大阪府立茨木高校から
高橋敬三さん———*Keizo Takabashi*
- 兵庫県立長田高校から
秋吉一郎さん———*Ichiro Akiyoshi*
- 大阪大学総長
宮原秀夫———*Hideo Miyabara*
- 司会・大阪大学副学長
鷺田清一———*Kiyokazu Washida*

[阪大ニュースレター No.26] 2004/冬号 掲載
2004 (平成16) 年12月1日発行



自分の研究に緊張感を持ってほしい。
競争心でもいいし、社会や人類にとって
重要なことをやっているという実感でもいい。
そういう緊張感を持てたら、
目つきから身ごなしまで変わってくるはずです。



鷺田清一 副学長

▼「教養とデザイン力と国際性」

鷺田 法人化に伴って、三つの教育目標を大阪大学は掲げました。「教養」と「デザイン力」と「国際性」をそれぞれ身につけてもらうことです。

私たちの考える教養とは、社会的な判断力を持つこと。隣の研究室で何をやっているか分からないくらい学問も細分化していますが、専門の勉強ができるだけでなく、その研究にどういう社会的影響があるのか判断できる人になってももらいたい。違う角度から自然・人間・社会についてコミュニケーションできる広い視野を持つてほしいということです。

デザイン力というのは、モノ・人・社会のあり方を構想する柔軟な想像力のこと。やわらかく言えば、センスをアップしたいということ。阪大ボーイとか阪大ガールと呼んでもらえるぐらいキャンパスも学生も素敵にしたい。いきいき・のびのびしていてかついいなど思えるようなグッドセンスを磨いてほしい。

国際性は、生きるスタンダードが違う異文化の人たちときちつと話せるという意味。外国との交流ばかりでなく、異文化が乱立しコミュニケーション不全になっている日本社会でのコミュニケーションも含めての意味です。世代が違えば単語さえ分からない時代です。

▼「受験をやめようか」

河 「お母さん、阪大を受けるのやめようかな」と見学から帰ってきてうちの娘が言いました。高津高校は私服で、自主性にまかせる校風です。そんな娘の目からすると、やぼったく見えたようです。

阪大というと理系のイメージ。文系に限ると、阪大よりも神戸大に行きたい生徒が多いと言います。





宮原秀夫 総長

かっこいいということを
もっと真剣に考えなければいけません。
かっこいいと注目されます。
そこにプラスのフィードバックがあり、
自己改革にもつながります。

「学生になることを誇りに思える阪大にしてほしい」というのが娘からの伝言です。

宮原 おっしゃる通りです。私にとっても母校ですが、阪大はダサイと前から思っていた。かっこいいということをもっと真剣に考えなければいけません。かっこいいと注目されます。そこにプラスのフィードバックがあり、自己改革にもつながります。「デートするなら神大生、結婚相手は京大生で、引越しするなら阪大生」などと言われたものですが、そんなことを言われたいよう努力しています。ただし、ダサイのはイメージだけ。実態は、必ずしもそうではない。

▼枠に収まらない大学

鷺田 きらつと輝いているというのは、緊張感を持っていることだと思います。繁華街に近い神戸大や京都大なら、だらしな性格をしているのは恥ずかしい。けれど市街地から少し離れた大阪大学だと、下宿の格好でもどうにかなる。そういう背景があるかもしれない。それ以上に、自分の研究に緊張感を持ってほしい。競争心でもいいし、社会や人類にとって重要なことをやっているという実感でもいい。そういう緊張感を持てたら、目つきから身ごなしまで変わってくるはずですよ。

学園がなく、多様な人材が大阪大学には集まっています。既存のアカデミズムに収まりきれないタイプの人がけっこういる。誰もやらなかったことを模索するタイプです。

文系ができて以来、日本になかったような学部や研究領域を率先してつくってきた。その一つが日本で最初にできた人間科学部です。時代と格闘しながら、社会の要請に対応する組織にしてみました。文化のコアとして言語を研究する言語文化部も日本で

最初につくりました。最近では、法学や経済学の枠に収まらない政策的な課題を提言する国際公共政策研究科もできました。新しい科学のあり方や問題領域を開拓するのが大阪大学の得意技です。

宮原 そういうことが伝わっていかなくて、イメージとして理系の大学だとなっているところが問題ですね。

▼けれど知られていない

平井 新しい学部として人間科学部の名前は聞いていました。でも30年近い歴史があることはつい最近知ったばかりです。

うちの娘は、教員になるのが子供の頃からの夢でした。それなら進路は教育学部なのか。むしろ、そんな枠にとらわれずに違うことを勉強するほうが教員にはいいと娘には言ってきました。私自身も教育学部の出身で、ダサイイメージがありまして。

娘が探してきた志望学部は人間科学部でした。何を勉強するのか漠然としているところにかえて、夢があるのではないか。そんなふうに思えて、私は賛成しています。新しいものを見つけてくれるのではないかと期待をかけています。

鷺田 教育学科目は人間科学部の中にあります。人間としての幅や広い視野を教育者に持つてほしいからです。終末期のケアのあり方を考えたりする臨床死生学や災害支援のあり方を考える講座など、次から次へと起きてくる問題に正面から取り組める内容です。関心も高くこれだけ面白い学部なのに30年の歴史が見えていない点は反省しなければ。

▼いい入試システムとは

秋吉 教養やデザイン力や国際性は密接に関連しています。教養がベースで、デザイン力はアプリケー

要は宣伝ですよ。ね。
そこが阪大はへたくそというか。

● 茨木高等学校
高橋敬三さん（3年生の保護者の方）



学生になることを誇りに思える
阪大にしてほしい。

● 高津高等学校
河 福子さん（3年生の保護者の方）



ション、そして基盤としてのコミュニケーションも持つ。そういうことだと理解しました。目の届く余裕があるからこそおしゃれにもなれるわけで。

大学入試一般のことですが、入試科目がこのごろは減らされています。AO入試や一芸入試や推薦もある。高校のカリキュラムもそれに対応して、不要な科目を受けないで済むようになっていく。教養に結びつく話だけれど、いろんなものをかじっておけるカリキュラムを検討していただきたい。

宮原 その通りだと思います。では、どういう入試システムがいいのか。センター試験でミニマムな要求を満たし、それ以上のことは独自の方法で各大学が選抜すればいいと私は思っています。多様な学生を入れるためにはAO入試もいい。ただ高校では、きちっとしたカリキュラムで勉強してほしい。一方、大学は、お金と時間を入試にもっとかけなければなら

らない。いい学生をとるためには。
鷲田 大学の改革だけで済まないのが難しいところ。高校と大学との間でも、大学と企業の間でも大きな断絶があります。

何を勉強したかというよりも、どこどこ大学の卒業生が欲しいという発想が企業側に強かった。ただしこのごろは、不況のせいで企業内教育の余裕がなくなり、こういうことを教えておいてほしいという要請が企業側から出てくるようになってきました。

入試については、生物を勉強しないまま医学部へ進学するという極端なことも起きてきました。反省が出てきて少しは風通しが良くなったけれど、まだまだの段階。中等教育から企業教育までもっと連携するようデザインしていかないと。

秋吉 医薬系に理科3科目が必要なのは当たり前。教育委員会や文科省も含めて対応を進める必要があります。例えば科目「情報」ももちろん重要ですが、リテラシー教育の初歩は小・中で行うので、カリキュラムが窮屈なら高校ではリテラシー部分を少し削つても理科3科目を教えるといったことも考えてほしい。

鷲田 義務教育は、社会人にどうしても必要なことを身につけること。その中身は時代で変化します。「古典の面白さを教える前に古典の難しさを日本では教えている」とドナルド・キーンさんが指摘していた。国語のあり方も見直さなければ。自分の考えをきちっと伝えられる、違う生き方をしている人の言葉を聴く、そうしたコミュニケーション能力が今の時代はむしろ必要。そのあたりから考えなければいけない。難しい時期にさしかかっています。

宮原 私は歴史が大嫌いでした。何年に何が起きたか暗記するより、できごとの因果関係や必然性をきちっと教えてもらっていたら、もっと興味があわいた



ほかの大学が言っていないキーワードをもっと前に出していったらどうでしょう。

●洛星高等学校
小瀧 努さん（3年生の保護者の方）



大学で人を見てきてほしいと願っています。

●北野高等学校
平井和美さん（3年生の保護者の方）

それなりにしかやらなかったことでも今になってみると何かにつながってきます。

●長田高等学校
秋吉一郎さん
（3年生の保護者の方、PTA会長）



はずです。

▼学問の場を自分びいき

高橋 阪大がダサくてもいいと私は思っています。大阪らしいなど。名前先行の京都や神戸と違い、大阪はどしどしとしたイメージがある。かっこばっかり気になっている人間にうちの娘にはななってほしくない。

宮原 道頓堀や通天閣が大阪のシンボル、東京みたいにきれいにすることないやないか。そんな意見もあります。道頓堀の川をきれいにして不法駐車もいっぺんなくしてみたらどうやという感覚も大事。大阪の文化を守りつつ、たまには気取ってみるということです。

高橋 内面のかっこよさが出てくればいいんですけど、外側のかっこよさばかり追求するのではどうもね。

宮原 そのために教養を身につけ、トータルなデザイン力を身につける。それが活力につながっていく。**鷲田** ほかの大学と使命が違うとは思いません。人類社会が今必要としていることをきっちり研究し、貢献することが大学の使命です。ただ大阪大学は、懷徳堂と適塾を精神的な源として位置付けています。お上から頂戴するのではなく、学問の場を自分たちでつくり出し、自分たちで切磋琢磨する。学問を大切にすることでなく、市民による自己教育の場として学問所を位置付けています。

誤解を恐れずに言えば、国家へのロイヤリティーを強く意識する東京大学とは違い、科学そのもののロイヤリティーを大事にする京大とも違う。大阪大学は、市民社会へのロイヤリティーを大切にします。単にできるやつでもない、単に面白いやつでもない。信頼できる人物を育てたい。教養やデザイン力という言葉にそんな願いを込めているのです。

▼大阪人の第一志望校に

宮原 イメージとしてはダサイ大学。しかし、実態は違います。

高橋 私もそう思います。人工衛星を飛ばす計画が東大阪にありますよね。泥くさいのにすごいところというイメージがあれで出来てきた。要は宣伝ですよ。そこが阪大はへたくそというか。

河 「阪大はコラボレーション。いろんな連携をしている。世の中はそうやって成り立っている」と阪大の先生が社会見学させていた時に言われました。すごくいいなと思った。そういうことを地道に浸透させれば先入観は変わります。家の前の川のまわりを主人が草むしりしていたら、いつのまにか町会全員がやるようになりました。

小瀧 私らの頃、かっこいい私立が並ぶ中で神戸大学の学生はすぐ分かると言われたものです。京大にしても東大にしても基本的にはダサイ。国立はみな一緒です。

興味のある分野で決めるということも確かにありますが、これまでのところはやはり偏差値で志望大学を選んできた。京大生の中で大阪出身者の占める割合はかなりの率にのぼります。大阪人の第一選択を京大から阪大へシフトできれば、大阪全体の発展にプラスになるはず。

デザイン力やかっこよさという言葉を前面に出そうとしたのは、旧国立大学の中で阪大だけではないでしょうか。大阪といえばヨシモトとなりますが、それもあながちうそではないわけで、キーワードをいかに効果的に使うかが問題です。「デザイン力」に

しても「人間科学部」にしても今はホームページで目立たない。「教養」「国際性」と違って、ほかの大学が言っていないこうしたキーワードをもっと前に出していったらどうでしょう。

宮原 大阪大学の名前すら知らない人もいるというアンケート結果を見たときはえらいショックでした。学部は別として大学院レベルでは、自分のやりたことをやっている先生のいる大学を選ぶようになってほしい。

高橋 なりつつあると聞いています。偏差値うんぬんではなく、やりたいことで大学を選ぶというふうには。

宮原 ほんとにその大学で学びたい学生をピックアップできるようなしなれば。ハーバード大学にはいろいろな枠があるそうです。マイノリティの優先枠とか、卒業生の子供の枠とか。それだけ多様な試験を実施していることになる。一斉に試験をするというのは我々の手抜きともいえます。

▼糸口をつけるためにつまみ食いを

鷺田 最後に一言ずつ。

小瀧 阪大の特徴が一目でわかるような形にインターネットでも何でもしてほしい。

平井 やりたいことで進学先を決めても、途中で道がそれることもあります。固執することはないけれど、せつかくだからそこにいる人を見てきたらいいと娘には言っています。学生時代に見聞きした先生方の発言や行動が私の中に残っていて、迷ったときの判断基準になっています。友達の中にも見るべき人はいっぱいいる。だから大学で人を見てきてほし

いと願っています。

鷺田 私も、哲学は第三志望でした。人生は一本道で行きません。ここで誰かと会ってフッとずれて、またこっちで誰かと会ってフッとずれる。おっしやるように、誰と出会うかが人生に大きな意味を持ちますよね。出会って良かったと思える人材がいっぱいいる大学にしたい。

秋吉 やりたいことがはっきりして大学へ行く人ばかりとは限りません。何になりたいのか自分自身で分からない人もいます。私自身も、分からないまま進学した。それでも良かったと思います。いろんなことを経験していろんなことを見て教養を身につけると、将来なりたいたいものが変わってきたときにその教養が助けられる。

世界史の人名を高校のときは覚えられなかった。けれど、それなりにしかやらなかったことでも今になってみると何かにつながってきます。糸口をつけておくために、いろんなものをつまみ食いするのがいい。

高橋 かっこいい大阪人をぜひ育てていただきたい。受験生の保護者の立場でお願いしたいことがあります。先日の社会見学で阪大を多くの保護者が訪問し、感動を受けました。ぜひとも、子供たちにもそれが伝わるPRをしていただきたいですね。

宮原 実態どおり伝わっていないと実感しました。市民ともっと連携しながら、広報活動をしていきたい。市民との付き合いもさらに強め、大学と協力して市民全体が人を育てるんだと考えていただけるように努めたいと思います。今日はとても参考になりました。

「メディアと大学」 世界スタンダードを目指す

元気な関西——大阪を学生のいる街に

街や人をもう一度元気にするためにメディアや大学は何をすればいいのか。
関西テレビ社長と大阪大学総長が意見を出し合いました。実は二人は高校の同窓生。
ざっくばらんな雰囲気の中で次第に話は熱を帯びていきます。
さて、関西の再生に文化が果たす役割とは—。

●対談

- 関西テレビ社長
出馬迪男 ————— *Michio Izuma*
- 大阪大学総長
宮原秀夫 ————— *Hideo Miyabara*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞大阪本社編集局次長 — *Satoru Watanabe*



【阪大ニュースレター No.27】2005/春号 掲載
2005（平成17）年3月1日発行



100年近く続いてきた窮屈なルールが
法人化で取っ払われた。
ただ自由になったぶん、自己責任は発生する。
自らルール作りをしていかなければならない。



宮原秀夫 総長

▼知恵がもつと求められる

——地上波テレビのデジタル化が始まりました。準キー局やローカル局にとってはリスクでもありチャレンジでもありますね。

出馬 放送のツールが変わってテレビ局を被害者のように言う人もいますが、僕はそうはとらえません。テレビだけの問題ではなくて世の中全体で考えたら当たり前の話です。むしろ可能性を探りたい。

デジタル化や衛星放送の時代になって、地方の放送局の可能性はとて大きくなるのではないかと。そこは知恵次第です。大学や他企業の力も借りながら研究していく時代をテレビ局も迎えました。これまでの守られていた立場から早く抜け出すテレビ局が生き残ると僕は思います。

——下手をすると東京キー局の傘下に入るしかない

という危機感もあります。

出馬 ネットワークも大事ですが、東京からの情報だけでは日本の文化は成り立ちません。デジタル化が進めば、地方からの情報発信がもつと大事になります。関西の2府4県には歴史と文化があります。京都という世界ブランドも持っている。それぞれの文化を発信する努力を我々もつとしなければなりません。

幸い関西は、アジアに近い位置にあります。交流をもつと深めながら、文化でつながっていく努力をする必要が我々メディアにはあります。政治や経済と一味違って文化の方が一般の同士で理解し合えるのではないのでしょうか。

——大阪大学としてテレビメディアとの日常的な接触は？

宮原 世の中に訴えていくうえで新聞と同じようにテレビは重要なメディアだととらえています。大学の活動を世の中に知らせるには、メディアに負うところが非常に大きい。メディアの目にとらえ、外に流していただくほうが大学の広報誌よりはるかにリアルタイムで大きなインパクトがあります。

デジタル化によって電波の帯域の有効利用が図られるわけですから、知恵の出し方があるでしょう。ただテレビ局と視聴者をつなぐ双方向のビジネスモデルが本当に成り立つのか、視聴者の納得を得られる番組づくりができるのか、これからの問題でしょう。

出馬 まさにソフトの問題です。ソフトが知恵だと思えば、新しいツールを使いこなせる制作力が必須になるのですが、そのところが非常に難しい。

▼大阪を学生のいる街に

——関西の持っているお笑いの伝統は、大阪の各局が活用するばかりか、東京に侵略までしている。社



出馬迪男氏

学生のパワーがいずれ
世の中を動かすパワーになるはず。
そういう街に大阪をしなければ。

長のおっしゃるソフト力とは、京都や世界遺産といった既存の文化の価値をもう1回見直そうということでしょうか？

出馬 まさにそこです。芸能番組をつくるには東京の方が確かに効率的で、大阪は過疎化してきました。だから、そこだけ追求してもだめ。大阪のテレビ局は、関西にしかないソフトを作り上げて世界的ソフトにしていけばいい。和歌山の世界遺産でも京都でもそうですが、幸いにして世界に発信できる材料があるわけですから。

生真面目に取り組むだけでなく、アイデアを生かして分かりやすく伝達できたなら受け入れられると思います。

——政治や経済などの側面からは関西をどうごらんになりますか？

出馬 極端なことを言えば、明治時代に出来上がっ

た都道府県制を切り崩さない限り、日本の行政改革はあり得ないのではないのでしょうか。行政のスリム化に日本の将来はかかっています。

大学でも改革を進めています。小手先だけでは駄目だと思えます。とくに大阪は、学生がいない街になっている。何とかして学生がいる街にしたい。

テレビ局はちっぽけな企業ですが、できることからやろうということで、阪大の協力もいたいただいて実験的な試みを始めました。学生のソフト力を引き出そうというBACA・JAという賞です。もう3年たちますか。東京にはかり目が向いている情報系の学生が大阪にまた来てくれるのではないかと期待しています。やはり環境づくりが大事ですから。

阪大が中之島センターをつくった意味は大きいのですが、ポツンと一つあるだけでは駄目。街全体で学生を受け入れるようになってこそ大阪が変わるのではないのでしょうか。そのために何ができるのか考えているところです。

——中之島センターの滑り出しはいかがですか？

宮原 いろんなセミナーや社会人教育をするようになり、最上階の佐治敬三メモリアルホールは催し物で連日ふさがっている状況です。大阪大学を好意的に受け入れてもらっているんだという印象を持っています。中之島センターでの活動をさらに進めたいと考えています。

▼留学したくなる仕組みを

出馬 中国には、留学するならアメリカという雰囲気があります。受け入れ体制ができています。アジアの留学生が日本に来たいという雰囲気を大阪につくる必要があります。阪大をはじめとする関西の大学が力を合わせてその雰囲気をつくってほしい。旗振り役を宮原総長にお願いして。

宮原 アジアの留学生は、いろんな意味で関西の方がなじみがあると思います。数だけではなく質的にも優秀な人に来てほしい。そのために大学の受け入れシステムを変えていこうと思っています。

——大阪市内の大学の学生はここ25年で約4万人減っています。神戸・京都は横ばいか微増。大阪だけが工場等制限法をきちんと守って、学生を追い出している。結果としてインテリの卵たち、芸術や文化を消費する人たちがいない奇妙な街になりました。

宮原 そういう事実を伝えて「学生が必要なんだ」という世論をつくるためにメディアの手をお借りしたい。それが結局は街の活性化につながる。

——行政の仕組みは、いまだに廃藩置県以来のかたち。広域行政への動きは関西が一番遅れています。アジアを見据えた学生の受け入れは、大阪の街を変えていくうえで地味だけど大きいことだと思っています。留学生の受け入れシステムを充実させる動きはあるのでしょうか？

宮原 一番困るのは宿舍の問題です。敷金・礼金を払う関西のしきたりに留学生はまぶつくりする。大学入試にも問題があります。アメリカなら、推薦状など書類だけで合否が決まります。ところが日本では試験のために大学まで来なければならぬ。旅費も大変です。

試験のシステムを変える必要があります。きちんとした推薦状と十分なデータをそろえれば判断できることだと思います。受験料だって日本は3万円なのにアメリカは50ドルほどで済みますから。

出馬 アジア全体に日本をアピールしようと思ったら、条件を良くしなければ。口先だけでは何もできません。

——受験システムや受験料のことを阪大だけで変えられるのですか？

宮原 100年近く続いてきた窮屈なルールが法人化で取っ払われたというのが我々の解釈です。どこまで自由にやるか、いま検討しています。ただ自由になったぶん、自己責任は発生する。自らルールづくりをしていかなければならない。

出馬 行政は、ブレーキではなくて潤滑油のはず。放送業界でも、絶対必要な規制以外は民間の意見を積極的に取り入れてほしい。

▼「フットワーク」を応援する

——法律違反すれすれまで頑張るみたいな、昔から関西がやってきた創意工夫をすればもっと面白い街になると思います。若い人が集まる街にすると、いろんな問題がそこからほどけていくのでは。先ほど出たBACA-JAというのは？

出馬 学生たちのソフトづくりに光を当てようという催しです。その中から何かが出てくるだろうと期待しています。

宮原 インターネットのコンテンツなど若いクリエイターの作品を募集する賞で、関テレにスポンサーになっていただきました。今では全国の大学から応募があります。私も審査員ですが、面白い作品が集まり人材も育ってきました。

出馬 そういう人材こそが将来のテレビにとつて力になると思っています。関テレだけではなくて、日本であるいは世界で羽ばたいてくれればいい。

——多チャンネル時代になるとコンテンツが不足する。しかし東京では制作費が余りにも高い。関西の活躍する余地がそこにある。そんな話を聞きました。

出馬 確かにあります。しかし市場原理ですから、大阪の魅力を出していかなければいけない。

——かつこよくて快適な街の多い東京へネットベンチャーはみんな行ってしまった。若者が住みたいと

戦後何十年たって世の中のシステムが変わってきて、
銀行・放送・大学と一番変わらないできたところが
変革を迫られている。一番は国です。



思うまちづくりが結局はものをいうのでは。そのキ
ーを阪大が握っています。

▼道頓堀川で水泳大会

宮原 小学校のグラウンドを緑にしようと前から言
っていたのですが、東京に先を越されてしまった。
芝生のグラウンドにしたら、メンテナンスのために
雇用も増えるだろうし、サッカーのワールドカップ
にも出られるようになります。

もう一つは道頓堀。いくら止めても飛び込むのな
ら、いつそ泳げるように水を浄化してはどうか。そ
のほうが大阪のイメージが上がると思います。見た
目をきれいにしても、臭い川では駄目なんですよ。
道頓堀川の浄化に取り組むプロジェクトチームをつ
くってくれと言ったら採算を度外視してすると思
いますよ、大学の人間は。

出馬 民間だって賛同する人はいっぱいいるはず。
それをメディアがどう伝えるか。

——三大スポーツの一つ世界陸上が2007年に大阪
であります。そんな節目に具体的な目標を掲げて……

宮原 道頓堀川で水泳大会。そういう大プロジェク
トを産官学です。大学の先生は自分の技術が生か
せる。お金を出す企業も街がきれいになってフィー
ドバックがくる。行政もイメージアップができる。
個々のプロジェクトをあれこれするよりはるかにい
い。

——御堂筋パレードじゃないけれど、在阪の準キ
ー局がバックアップして……

出馬 外から人に来てもらうために、御堂筋パレ
ードももつとやり方があると思います。放送だって大
阪だけでやってきましたが、04年からBSで放送す
るようにした。日本だけでなくアジアからも来ても
らうような中身をつくる必要があります。

▼世界スタンダードのランドデザインを

——久米宏さんの例で分かる通り、芸能部門のサー
ビス精神旺盛な人間が加わることによって報道番組
が変わりました。ひんしゆくを買ってでも突破して
いくような精神が欲しい。

出馬 ニュースワイドショーという新しいジャンル
がああ番組でできました。技術的なことも大事です
が、もつと大事なものは、どういう方向に世の中を持
っていくかということ。政治も経済も、大学も放送
もそうです。戦後何十年たつて世の中のシステムが
変わってきて、銀行・放送・大学と一番変わらない
できたところが変革を迫られている。一番は国です。
行政のシステム自体が問われている。世界でこれか
らどう生き残っていくのか。

宮原 きちんとしたランドデザインが必要です。
——すぐれた留学生や若者に住んでもらい勉強して
働いてもらう。そのような仕組みをつくることで、
もつれた糸がするすどほどけていくのではないで
しょうか。

出馬 学生のパワーがいずれ世の中を動かすパワ
ーになるはず。そういう街に大阪をしなければ。

宮原 もう一つ期待しているのは、大阪駅北ヤード
の再開発です。ほかにないコンセプトを取り入れて、
学生が行きたいと思う魅力ある街をつくればいい。
東京の汐留みたいになってしまったら終わりだと思
います。

出馬 建物だけ立派でもね。
宮原 関西スタンダードではなくて、世界スタン
ダードのセンスをどうやって注ぎ込むか。世界トップ
の人に全体のランドデザインを任せるべきです。

出馬 中国でも設計はほとんど外国人ですよ。世
界に目を向けるのが基本。



関西スタンダードではなくて、
世界スタンダードのセンスをどうやって注ぎ込むか。
世界でちゃんとコミュニケーションの取れる人を育てたい。

宮原 コンセプトコンペをしたのに、それが生きてないですね。取り入れるとはいうけれど、手を付けられるところからとりあえずやることになってしまった。大阪駅前ビル群のようなものにだけはせんといてくれと注文をつけています。

▼500年後に役立つかもしれない

—— ニューヨークの改造で有名なのが34丁目。エログロの巢窟にディズニーのことも劇場を誘致した。フェーズを変える大きな政策が必要。

出馬 まわりが変わってきますよね。うちの会社も、旧社屋の再開発として大学院大学の構想を持っている。9割がたの人は、あんな環境に学校を誘致しても駄目だと言うけれど、僕は逆。それをやることによって街全体が変わると思う。

宮原 ニューヨークだって、一番危険な街から一番安全な街に10年で変わったわけですよ。市長の努力であれだけ変わるわけですよ。

大阪がひったくりナンパワンと朝刊トップに出ている。汚名を返上しようというコメントつきならいいけど、そうではない。世の中を良くする書き方を報道はやってほしい。

—— 大病院の名義貸しや大学発ベンチャーの上場の問題にしても、社会のルールが対応できていない現状にも目を向けてほしい。

アメリカの場合は、大学の教員がもらう給料は9カ月分だけ。あとの3カ月は自由に働いていい仕組みになっていきます。そういう仕組みがちゃんあるところでベンチャーをやっているわけです。

出馬 哲学とか基礎研究にしわ寄せが行ったら、将来どうなるのか危惧があります。

宮原 文学や哲学がなくなったら味も素っ気もありません。それがあるから総合大学なのに。好奇心だけでやっているような研究も、ひよつとしたら100年後500年後に何かに使われるかもしれない。半導体とかも何十年前ならそうだったはず。企業ではできそうもないことをするのが大学です。そういうことをきちんと言明すれば世間も分かってくれるはず。ガリレオが望遠鏡つくって天体を見ていたのも好奇心だけです。あれで金を儲けようとは思わなかったでしょう。

▼課題はコミュニケーション

—— 大阪大学への期待は？

出馬 学生のエネルギーが日本を動かすと思っっています。大阪だけでなく、日本・世界のために頑張ってもらいたい。

—— 阪大のキャンパスで道を聞いたら、5人が5人ともアジアからの留学生でした。

宮原 阪大にきている留学生は1000人ちょっと。

阪大から海外に留学しているのは50人ぐらい。ものすごいアンバランスです。もっと送り出したのですが、語学がネックになっています。

語学のこと、日本の技術がインターネットの世界標準にならない原因ともなっています。インターネットのスタンダードを決める場で、プレゼンできて丁々発止とやりとりできる技術屋が極めて少ない。何十もあるワーキンググループで日本人チェアマンは1人か2人でしょう。インターネットのいろんな方式が全部そこで決まるのに、英語が邪魔をしている。いくら技術が良くても、語学力がものをいうのです。

—— 世界でちゃんとコミュニケーションの取れる人を育てたい。

サイエンス・コミュニケーターを養成するコミュニケーションデザイン・センターも05年スタートします。医療の分野でも技術開発でも、専門家と一般市民の間のコミュニケーション不全でいろんな問題が起きている。その溝を埋めるための試みです。

—— 締めくくり一言どうぞ。

宮原 大学を知ってもらう努力は懸命にしますので、ぜひメディアのサポートをいただきたい。良いも悪いも含めていろんな素材が大学の中にはありますよ。

「対話のレッスン」

——市民に信頼される科学者を目指して——

専門家の言うことは難しくよく分からない、先端的な科学技術のあり方に不安を感じる……。そんな声が大きくなっています。気がつけば、今日の科学技術は市民の生活感覚から大きく離れてしまっていました。大阪大学は、科学技術、医療や福祉、地域の紛争解決など、市民の生活に深くかかわる問題に、市民のニーズや不安をきちんと受け止めながら取り組んでいく、そのような資質を育成するための大学院共通教育プログラムを進めることとし、05年春、コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）を開設しました。その本格始動を前に、これを構想した理事とCSCDのスタッフとが話し合いました。

●座談会／特集・コミュニケーションデザイン・センター

- 大阪大学副学長（総合計画担当）
鈴木 直 ————— *Naosbi Suzuki*
- 劇作家／演出家／大阪大学コミュニケーションデザイン・センター客員教授
平田オリザ ————— *Oriza Hirata*
- 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター助手
伊藤京子 ————— *Kyoko Ito*
- 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授
小林傳司 ————— *Tadasbi Kobayasbi*
- 司会 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長／文学研究科教授
中岡成文 ————— *Narifumi Nakaoka*

【阪大ニュースレター No.28】 2005／夏号 掲載
2005（平成17）年6月1日発行





鈴木直 副学長

いろんなところで
コミュニケーション不全が起きている。
専門性だけでなく社会的判断力も持つ学生
とくに院生を送り出したい。

▼「デザイン力」の1つ

中岡 センターの運用も人の関係もフラットになれ
ばいいなと思っています。きょうは「先生」ではな
く「さん」で呼びましょう。センターの狙いをまず
鈴木さんから。

鈴木 教育目標の一つに「デザイン力」を大阪大学
は掲げています。03年8月に就任した宮原総長の発
案でデザイン関係のセンターなり研究所なりの設置
を検討することになりました。空間デザインやマテ
リアルデザインなども含めて最初は考えましたが、
科学技術と社会とのかわり方といったところに的
を絞ることになり、浮かび上がったのがコミュニケ
ーションデザインです。

専門家が指摘する通り、いろんなところでコミュニ
ケーション不全が起きている。コミュニケーション
の回路をデザインすることは非常に重要で、こう
した提案に文部科学省も興味を示してくれました。
専門性だけでなく社会的判断力も持つ学生とくに院
生を送り出したい。非専門家とコミュニケーション
できる力を養成するためにコミュニケーションデザ
イン・センターを活用していただきたい。

▼温室育ちに風穴を

平田 俳優だとか音響だとか分野別でいばっけてい
ても地域の活動では意味がなくて、「演劇やつてるなら
照明のことも分かるでしょ」とかいろんなことを要求
されます。町医者みたいに総合的な力が必要になる。
けれどそういう総合力を日本の教育システムは育
ててこなかった。小中学生はかわいそうです。競争
社会じゃないから表現する欲求もない。なのに大人
は「表現しろ」と首を絞める。ますます表現ぎらい
な子供をつくっているのが今の表現教育です。



親しい友達としか高校生ぐらいまでは付き合わな
いのに、急にポーンと放り出される。特に理系なん
か、温室みたいなコミュニケーションがそのまま統
いちやうではないか。そこに風穴を開けないと、
デザイン力もコミュニケーション能力も生まれませ
ん。自分の言葉は通じないんだという痛切な体験を
まずさせないといけない。一番問題となるそこを僕
は体験させてあげられるかなと思っている。

中岡 初年度の事業として計画しているのは4プロ
ジェクトと1共通プログラム。平田さんに担当して
いただく演劇ワークショップも、伊藤さんの開発さ
れた議論支援システムを使ったコミュニケーション



平田オリザ 客員教授

結論なんか出なくてもいいから、
いろんなことをすり合わせる事が大切。
普段考えてもいないことを考えさせる
仕掛けがないといけない。

スキル向上のサポートもあります。

伊藤 科学技術グループでは、大学院生を対象に科学技術コミュニケーションのトレーニングを行おうと考えています。温室育ちの大学院生は、自分たちの言葉が社会で通じないことを理解していません。そのことをまず実感してもらい、人の話を聞く力を養成しようと計画しています。

小林さんが取り組んできたコンセンサス会議という科学技術コミュニケーションの枠組みもその方法の一つ。学生とそうでない人に同席してもらい、ギャップを認識したうえでそのギャップを埋める。

平田 話し言葉の教育はこの20年間、スピーチとディベートでした。それがコミュニケーション能力を駄目にした。「はい、タロウくん。3分スピーチしてください」というけれど、聞かせる相手は自分のことをものすごくよく知っているクラスメイト。話すことなんかもう何も無い30人の前で話を強制する。これはスピーチでもなんでも無い。ディベートにしたところで勝つ技術だけを鍛えるので、ものすごくこまっしゃくれた子ができます。

「演劇は、聞いて話してワンセット」と僕は言うんですけど、日本の国語教育は話してから聞く。この順番を入れ替えないと。

▼「聞く力」をつける

鈴木 僕の経験でもそう。単に聞いてあげるだけで相手がこちらを信頼してくれます。

平田 鷺田さんがお書きになっっているけれど、「痛いんです」という患者さんに「痛いんですね」と繰り返すだけの看護師さんが安心感を一番与えると「私は聞いているよ」と態度を示すことがとても大事。

僕の演劇の台本がアメリカやヨーロッパで日本語教育にけっこう使われています。うなずきや相づち

を細かく書いてある教科書がほかにないらしい。

相手との距離を徐々に縮めるために普段のコミュニケーションには相づちやうなずきが重要なのに、会議だとかどんどん削られていきます。意味のないことを言っちゃいけないと教えられているのでプレッシャーがものすごくかかって公式の場では表現力がなくなってしまう。

鈴木 息子が引きこもりでした。いろいろ聞き出そうとしてもだめ。けど黙ったままじっと向き合っていると、ポツリポツリ話してあげた方の3時ぐらいまで話したことがある。最終的にはそれでよかった。

平田 黙っていてもかまわない。台本を書く授業で小中学生に「こういふとき何てしゃべる」と聞く。「しゃべんない」という子が必ずいるんです。「じゃ、しゃべんない台本を作ろう」というと、がぜん書き始めたりする。日本の国語教育や表現教育が「しゃべれ」「コミュニケーションしろ」とどれだけ押し付けてきたかということ。

中岡 科学技術のプロジェクトのリーダーである小林さんが到着しました。狙いも含めて話していただきますか。

小林 フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションを求める気持ちには、いろんなものが交じっているんですわ。若者の理科離れを止めたいとか、企業と大学とのズレを調整したいとか。科学技術コミュニケーションという言葉にいろんな思惑がこもっちゃってる。

全部はできません。このセンターの重点は、エキスパートとして社会から期待される理工系の大学院生に聞く力をつけてもらうこと。迎合するのではなく、社会の声をちゃんと聞く。専門家としての役割にはそういう聞く力も含まれています。分野の

温室育ちの大学院生は、
自分たちの言葉が社会で通じないことを
理解していません。



伊藤京子 助手



小林博司 教授

今起こっているのは、
理科離れではなくて知離れ。
ものを知ることの楽しさと
怖さの両方を知ってほしい。

平田 今のお話だと、すぐ連携できます。単純に演劇やったほうが早いんじゃないかな。来年から始まる僕のプログラムでは、医学部とか文学部とかいろんな分野から学生が集まって班をつくり、職員室とか病院とかのシチュエーションで短いお芝居をつくります。看護師とか患者とか役を決めて。班に1人

▼垣根を越えてすぐにも連携

違う人々と協力して生きていくしかないのだから。具体的にどうしたらいいのか。文系と理工系の大学院生と同じグループに入れて、座学ではなくて具体的なプラクティスをやらさなければいけない。コンセンサス会議風のものを作るのもアイデアの一つ。学部1・2年生を前にして自分の専門のことを大学院生が説明する。自分たちの研究がどういうものでどういう意味があり、どんなプラスやマイナスを社会にもたらすか、畑違いの人に説明する。評価は素人の1・2年生だけにやらせる。これだけ説明したのに全然分かってもらえなかったという仕掛けです。

の専門家が「この場面ならこうなる」と言っても、班のみんなから「私が病院で見たのはそうじゃないかった。それでは医者に見えない」と言われる。そういうシミュレーションになるわけです。

小林 なるほど。面白そうですね。やりましょう。

中岡 部門を越えたコラボレーションがさっそく生まれそうです。伊藤さんはヒューマンインターフェースということで感情の問題を取り扱っておられます。伊藤 あらゆる人がコンピュータを使うようになったのに、「専門家だけ分かっていたらいい」とか「分からないほうが悪い」といった考え方が専門家の間にまだまだあります。コンピュータ技術を用いるヒューマンインターフェースを誰にでも使いやすい方向にもつていけないか。人間の考えや気持ちを技術に生かすためのサポートができないか。そうしたことを考えてきました。科学技術コミュニケーションでも演劇でもコンピュータ技術でサポートできる余地はいくらでもあると思います。

平田 議論支援システムというのはどういうもの？

伊藤 インターネットを使ってうまく議論を進める



中岡成文 センター長

症状の進んだ患者さんの発言を
文字盤から読み取る。
そんなこともやってみた。

▼異質な人が問題を共有すると

平田 ワークショップのあと「今度頑張る」とか「こをこうする」とか自分で解決策をもってくるので、いつまでたっても日本の学生は問題を全体で共有できない。ところが、対等に話さないと前へ進めないワークショップを先にやっておくと、話し合いの仕方が格段によくになります。

台本が3段になっていて、同時多発で芝居が進行します。全員が集まって問題意識を共有したうえで選択肢を幾つか並べないと先に進めないのです。このワークショップも運動できると思います。

埼玉県富士見市の劇場の芸術監督をしますけど、市会議員全員にワークショップをしてもらったら、理解がまるで変わりました。

小林 業界・年齢層・地域が違う異質な人々が集まって一つのテーマで話す場を全然つくってこなかった。「話し合いをしましょう」「民主主義は大事」と小学校の頃から言われて得たものは何か。「民主主義はくだらん」という意識です。

でも、異質な人が集まる場は求められていて、ネットの世界ではいっぱい作られている。参加型でいろんな議論をする取り組みは、自治体レベルを中心に手探りで始めている。そういうのを集めて経験を共有するワークショップを04年から始めました。トップダウン型ではなくボトムアップ型で議論し、環境アセスメントとか防災とかまちづくりといったテーマで地域の問題に取り組みを共同研究しようという提案もきています。

平田 大きな運命に共同体がさらされて思ってもいなかった価値観が表に現れるときドラマは生まれません。忠臣蔵だってそう。運命に直面させる仕掛けなしに「はい、話し合いますよ」と言っても、結論を先に求めちゃう。でも、議論や対話はそうじゃない。結論なんか出なくてもいいから、いろんなことをすり合わせる事が大切。普段考えてもいないことを考えさせる仕掛けがないといけない。

現代における許されない恋愛を考えるワークショップがあります。たとえば女子高生と主婦が2人1組で。「同性愛にしよう」とか、「結婚相手として男の子をお兄さんがつれてきたら」とか。家族では絶対に話し合えないようなことを絶対出会わないような人同士が演劇というシミュレーションでなら話します。ものすごく話します。社会学的にもすごい意見を話の中でしていくこともあります。そういう経験を積み重ねることによって対話能力はできていく。

中岡 温室みたいなコミュニケーションに風穴を開けるということですね。しかしそうは言っても、非日常としよっちゃう直面するわけにはいかない。反論はありませんか。

鈴木 私は大賛成です。へたすると中学の頃から、おまえは文系だ理系だ。そもそもそこが間違っていないのか。科学する気持ちは誰しも持っています。芸術と同じように科学の楽しさをすべての人が共有できるようにしなければ。

小林 蒸気機関の発明も、熱力学の応用でできたのではない。ものが先にできちゃって、どうしてこんなふうになるのだろうと後から説明をつけた。インターネットの世界もよく似ています。大学で学んだコンピュータサイエンスをハッカーが応用するのではなくて、先にハッキングをやっちゃう。それを大学の先生が「すごいな。どうやってやったんだろう」

と調べる。

サイエンスとテクノロジーが20世紀に融合して、知る楽しみというメッセージが今では通りによくなっていてしまった。中高で文理に分けてしまう行き過ぎはあまりにひどい。それをやめましょうと声を大にして言いたい。今起こっているのは、理科離れではなくて知離れ。ものを知ることの楽しさと怖さの両方を知ってほしい。

▼果たす役割はさまざま

中岡 「芸術と福祉」というテーマで国際会議が05年夏に開かれます。難病のALS（筋萎縮性側索硬化症）に関する集まりもここで開かれました。症状の進んだ患者さんの発言を文字盤から読み取る。そんなこともやってみた。社会学連携を進める試みも積極的に考えていきたい。

平田 お芝居に加わる障害者は、普段就けない職業の役を必ず選びます。車イスのJリーガーとかスーパーモデルとか、一番すごいと思ったのは車イスのハイジャック犯。親切心につけこんで乗っ取ってしまうブラックユーモアの台本を書きました。ジェスチャーの発信者を当てる「震源地ゲーム」

に脳性まひの人が入ったら、障害者の仕事をじっくり見ることになる。お互い見つめ合う訓練を楽しみながらできる。

プロになって権力構造が発生する前の段階で一緒にダンスしたり演劇をつくったりすることが大事。福祉や医療の仕事に就く人に経験させたい。

中岡 キャンパスから飛び出してこの万博公園にセンターはオープンしました。さらに、大阪駅前「北ヤード」に進出する構想もあります。

鈴木 いろんなサポートの機運が出てきている。北ヤードに移転すれば、社会学連携や産学連携がやりやすくなるでしょう。

中岡 現地にはロボットシティーができると思っています。生活支援型ロボットの実証実験と一緒にやりたいと大阪府から申し入れもあります。

小林 コンテンツそのものをつくるのではなく、メタのレベルの議論をするのがコミュニケーションデザイン・センターの役割。コンテンツをつくる人にメタな部分を組み込むわけです。これまでは、技術的な可能性から出発するテクノロジー・ドリブンなやり方で走ってきた。これからは、さまざまなニーズを最初からインプットしておいてものをつくる。

そういうスタイルが大事になります。

ロボットそのものはつくれないけれど、ロボットの役割について考える。これからのテクノロジーに必要なそういうことを我々は積極的にやるべきです。

平田 渋谷は若者のメッカと言われるけど、実際にはチーマーが道端に座っているし、ホームレス対策で公園にベンチがない。居場所がなくて社会的弱者が右往左往する街になっています。これでは地域全体のリスクが高まってしまふ。都市計画がないまま資本の論理だけに任せて、そんな街が日本中に広がっている。

弱者に社会参加してもらうための中核が文化施設。普段出会わない人が出会う非日常の空間をつくる責務が大学にもあるのではないか。それこそコミュニケーションデザインであり、大学や院生のためにもなります。

鈴木 そのために平田さんに来ていただいた。

中岡 センターのさまざまな可能性が見えてきた。院生に教育プログラムを提供するということをまずは着実にやっけていきたい。

「阪大&大阪—— めざそう世界ブランド」

ポテンシャルはある。掘り起こして発信しよう

良くも悪くも強いインパクトが付いて回る大阪のイメージ。
しんどい局面に向き合いながら、はつらつとした元気を取り戻すにはどうしたらいいのか。
一歩先を見つめながらまちづくりに力を注ぐお二人と総長が語り合いました。
キーワードは「ブランド」。
大阪と大阪大学のこれからを、さあ、どうする？

●座談会

- (財)大阪21世紀協会理事長
大阪ブランド戦略推進会議・コラボレーションセンター チーフ
堀井良殷 ————— *Yosbitane Horii*
- 京南倉庫(株)代表取締役社長
京都経済同友会常任幹事/関西経済同友会幹事
上村多恵子 ————— *Tayeko Uemura*
- 大阪大学総長
宮原秀夫 ————— *Hideo Miyabara*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞論説委員 ——— *Satoru Watanabe*

【阪大ニュースレター No.29】2005/秋号 掲載
2005(平成17)年9月1日発行





▼大阪は誤解されている

——大阪のイメージをどう受け止めているのか、まずは一言ずつ。

堀井 大阪は誤解されています。お笑い・たこやき・タイガースにコテコテおぼちゃん。柄が悪いというイメージがあまりにもふりまかれ、しかもパターン化して増幅されている。まことに残念です。

しかし実際の大阪は大変な文化都市だと僕は思っています。なおかつ世界の都市競争で十分戦えるポテンシャルがある。本来の大阪を理解していただきたくて運動を始めています。

上村 大好きなところと、「ちょっとなあ」と思うところが大阪にはあります。大阪人は明るくてエネルギー。オープンマインドで、何より親しみやすい。グローバル化の時代にどこでも通用します。

半面、誤解されてもいます。谷崎の小説『細雪』にも出てくるように、船場や心斎橋・堂島を中心に爛熟した豊かな生活が大阪にはありました。そういう文化を生活に溶け込ませている人は今もいるはずなのに、表に出てくるのは庶民的な生活だったり、吉本に代表されるお笑いだったり。しかも、それを大阪人自身がちゃかしている。「正味」や「本音」がややもすれば行き過ぎて、お笑いにしてもきわどい。エネルギーはすごいけれど、あまりにも「ぶっちゃけすぎる」と身もふたもありません。秘すれば、花です。

大阪文化の豊かな文化性やせいたくなど、洗練されているところを再認識して訴えていくべきなのではないかと思えます。

宮原 一番問題なのは、そこが大阪人の特徴でありアイデンティティだと思っていること。コテコテでええやないかと。

まちぐるみで一斉に打ち水して夏を涼しくするという東京の下町の試みを放送していました。大阪であれをやっても多分ローカルニュースにしかならない。報道も、全国ニュースで取り上げて大阪のいいところをもっと伝えてほしい。

堀井 北海道なら酪農、京都なら神社仏閣、大阪は犯罪かコテコテ。ニュースが全部パターン化しています。

▼リセットが遅れた大阪

——豊かな文化性を持っているのに、水面下に隠れています。大阪の人は、褒めると居心地が悪そうにする。ちょっと笑われたほうが気持ちいいみたいなの。

堀井 なぜそうなったのか、実はいま掘り下げています。戦争で焼け野原になって、船場にあった大阪の文化は疎開していった。逃げた人が芦屋や豊中など周辺部に散らばりました。東京や名古屋も焼け野原になりましたが、人々がもう一度都心に戻っている。ところが大阪は戻っていないんです。そこが違う。大阪は文化が周辺地域にあつて、都心に住民の求心力がない。その流れの中で大阪大学も吹田・豊中にあるわけです。

もう一つ、悪名高き国家総動員法による経済統制・思想統制・言論統制の影響が今も尾をひいています。統制するためには検閲が必要なので、全部東京へ集約した。その際に、強固な縦割り体制が固まります。戦後になって地主制度や財閥は解体されたのに、東京一極集中体制はそのまま残った。軍事官僚のあと経済官僚が取って代わっただけで、強固な東京一極コントロールが依然として続いています。

——大阪の人たちが中心部に戻らなかったのはなぜでしょうか。それどころか外に出そう出そうとして、大学も企業も市外へ出てしまった。うつろなまま都



堀井良殿氏

世界にそのまま打って出られる
知的創造集団の蓄積があることを
我々はもっと頼りにしてい
それが大阪ブランドの
中核的存在になるべきです。

心部を放置して、税金をたくさん払う人は阪神間に住む。不思議なままだと思います。京都の経済界は、東京への一極集中の流れからは少し外れていますね。上村 大阪・関西に勘違いはないでしょうか。「官に頼らない。自主独立だ」という気概は大事ですが、日本国のガバナンスの中にあるのだから、国の統治と地方との関係を考えないわけにはいきません。戦後60年の中でこの10年は経済・産業が新たなフェイズにリセットされつつあります。アジアにシフトしながら重厚長大の工業国ニッポンから消費を中心とする金融・株主中心社会へと移行する中で、関西は出遅れた。リセットにちゃんとコミットしないまま戦後の旧産業体制の延長でやってきました。

必ずしも日本国内だけをマーケットにしている企業は京都には多くて、京セラにしても日本電産にしても、中間素材や部品、機械をつくって世界をマーケットにしています。堀場も島津もロームも「お得意先は世界にある」という感覚です。最初からグローバルスタンダードでいっているのです。本社はどこでもいいのです。むしろ京都にある伝統・文化を背景にして世界に売り込んでいる。それが京都の企業のすべてではありませんが、企業は構造改革の中でどうリセットされるのかをにらんでいかなないと立ち行きません。

▼強力な京都ブランド

——その点、大阪は少し遅れているということでしょうか。京都で飲みませんかと誘うと東京の人たちは喜んで来ると京都の社長さんたちは言っています。京都のブランドイメージは強力です。

上村 世界に通用する京都の企業で地元で工場を持っているところは多くはありません。本社と研究所は京都だけど、工場は日本の中でも別の地域、アメリカやヨーロッパに初めから置いている会社が多いです。だから企業の工場城下町に京都はなっていない。

堀井 工場と都市を一緒にしたところが大阪の失敗です。生産基地として荘園を別持つ公家の文化が京都にはある。ところが大阪は、生産基地と居住地域・にぎわい地区を「ごちゃごちゃ」にしてしまい、「煙の都」とまで呼ばれていた。空襲のあと住民が戻ってこなかったのも実はそこに要因があります。「煙の都に住めるかよ」というわけです。

素材産業の工場や倉庫などが沿岸地帯にあるので、リセットもなかなかできない。もっと早く気がついていれば、経済政策・地域政策の方向転換もできた

ソフトにお金を払わないところが
大阪・関西にはありますが、
知恵と知識には
きちんとお金をかけないといけませんね。



上村多恵子氏

のでしようが、高度成長時代の後始末にてこずった。気がついたら、大阪発の企業でも大阪の外で展開し、大阪自体の自力にはつながらなかった。

宮原 おっしゃる通りです。なぜそうなったか。原因の一つはブランドデザインがなかったこと。あつたとしても遂行するリーダーシップがなかったこと。今、求められているのは、ブランドデザインに基づいて実行していくリーダーシップです。

乗り込んできた経団連の会長に「なんで三つも空港を要るんだ」と言われて誰も反論しないのはおかしい。きちんとしたブランドデザインがあれば、それに基づいてきちつと説明できるはず。言われつぱなしでは情けない。大阪駅前の北ヤードの再開発でも、ブランドデザインをつくり、リーダーシップをとって開発できる人がいない。

▼大阪は植民地だった

堀井 気骨のなき、政治的なガバナンスの欠如にも原因がある。幕府の天領だった大阪には侍がほとんどいなくて、町人の自治に任せられました。町人自治は誇りにすべき伝統ですが、日本全体をならむ中で都市計画や将来構想といったブランドデザインを培っていく伝統はない。天領は植民地です。つまり大阪は、徳川幕府の植民地だった。その植民地根性が今も続いているとしか思えません。

明治以降に大阪のバックボーンをつくったのは、外からやってきた人材です。経済を担った大立者の五代友厚は鹿児島の人ですよ。關一（御堂筋を拡幅した第7代大阪市長）も外からやってきた。悔しいけど、そこを見つめて腹をくくり直して再出発すべきだと僕は思う。大阪大学に一番期待するところでもあります。

宮原 おっしゃる通りです。ところが今は、人材を受け入れる度量さえもない。

▼四ツ井・アイデンティティ

——大阪ブランド戦略推進会議が05年の初めから開かれています。今後は。

堀井 誤解されている大阪には、しかしながらポテンシャルがいっぱいある。埋もれているかもしれない。気がついていても注目していないのかもしれない。そんなポテンシャルを掘り出して磨き、外に向けて発信していく。そういう活動をしようとか意図が産官学でできています。

リセットの風が吹いていて、大阪は動いている。再スタートの旗印を掲げ、ブランニューの大阪をつくっていく。そういう掛け声を運動としてやっていきます。



宮原秀夫 総長

花を育てるために肥料をやる。
そういう仕組みも大事です。
足りない部分を補完し合えば
シナジー効果も期待できます。

イギリスのクール・ブリタニアがお手本になりません。古臭くて遅れたイギリスのイメージがなぜ広がってしまったのか、サッチャー・ブレア改革の前に徹底して議論し研究しています。なぜ駄目になったのか、掘って立つアイデンティティーは何なのか、研究してからクール・ブリタニアを立ち上げている。我々ももう一度、大阪の何たるかを掘り下げてコア・アイデンティティーを固めようじゃないかということです。

「めぐり逢いと交差集積の場」「創造と進取の地」「歴史が躍動する複合文化都市」「人間らしく生きるまち」——この四つを大阪のコア・アイデンティティーに選んで戦略会議を連続してやっています。安藤忠雄さんとコシノヒロコさんと中村鷹治郎さんに議長になっていただきました。そのもとで20ぐら

のパネルができるんじゃないかな。バイオ・シティとかロボット・シティとかエンターテイメント・シティとか食の都とか水の都など世界に向かつて大阪ブランドといえるようなパネルが。

——反応はいかが。

堀井 スピンオフするものが面白いんですよ。市民の手で桜を植えて魅力的なまちにしようと安藤さんが呼びかけた「平成の桜の通り抜け」には、7月の締めでなんと3億円が集まった。1人1万円以上で2万5000人。応える市民がそこにいるということですね。

上村 ノリのいい人がたくさんいるのは素晴らしい。そこにもう一つプラスしていただきたいのは、なぜ桜なのかというところ。桜への思い入れとかアイデンティティーとか何かもう一つあると、世界に訴える時の味つけになると思います。全国に桜の名所は多いのですから。

オリンピックを誘致した時にも思いました。「大阪の発展のために」というのが前面に出すぎていました。大阪でオリンピックをやる文明的な意義と意味を理想の言葉で高らかに語る必要がある。世界に発信するには、そういうことが大切になります。京都だと、議論しているうちに時間切れになってしまうでしょうが。

堀井 本当は桜より梅だと思えます、大阪は。「難波津に咲くやこの花冬ごもり 今は春べと咲くやこの花」と王仁が歌った「この花」とは梅なんですね。おっしゃるように、文明史的背景をきちんと意味づけていく必要はあります。

——上方落語の定席をつくる運動に何億かの淨財が市民から集まっていますが、そもそも上方寄席の定席がないことが異常です。知人は、新幹線で東京へ上方落語を聴きに行っています。さて、大阪のブラ

ンドのイメージに何が必要なのでしょう。

上村 グランドデザインを描くソフト力だと思いません。ソフトにお金を払わないところが大阪・関西にはありますが、知恵と知識にはきちんとお金をかけないといけませんね。

堀井 「花より団子」の大阪が「花も団子も」ある大阪になる。花と団子はセットです。これが桜の通り抜けのキーコンセプト。もつといえは、「産廃の豊島に緑を」「阪神大震災の焼け野原に白い花を」ということでやってきた安藤さんが今度は「大阪に桜を」と言っています。そのころは桜は花の象徴なんです。だから、桜でも梅でも何でもいい。

上村 よく分かります。新生大阪ですね。

▼大阪ブランドの中核は知的創造集団

堀井 文化力で勝負すべきです。ただ文化とは何か定義しないと、いろんなことを思い浮かべる。で我々は、学術・技術・芸術・スポーツをいちおう文化と考えています。かなりいいところへ大阪は行きます。スポーツならガンバ大阪の宮本や大黒。イチローや野茂だって関西から出た。学術なら西高東低の分野がいっぱいある。パイオなんか、大阪大学の先生が東京へ教えに行っている。世界にそのまま打って出られる知的創造集団の蓄積があることを我々ももっと頼りにしたい。それが大阪ブランドの中

核的存在になるべきです。

江戸は武士の文化、京都は公家の文化。大阪のコア・アイデンティティーをつきつめてゆくと懐徳堂と適塾にたどりつくんですね、江戸の植民地たることに満足せずに哲学や天文学を研究し、また適塾は洋学のセンターであった。その伝統をもろに受け継いでいるのが大阪大学。阪大をはじめとする知的創造集団が中核となって大阪の自立したリーダーシップなりガバナンスなりを構築していく。そのことによつて文化力や人間力が新しい活力を生み出してゆくはずです。ペニシリンを打ったら明日元気になるという特効薬みたいな話ではありません。

宮原 団子だけでなく、花も好きになってきていることを外から知ってもらうには、具体的なアクションが要ります。その一つが北ヤードだと思う。しっかりしたグランドデザインのもとに具体的にプロジェクトを展開する。大阪でこんなことまでできるんだという精神とかソフトをもので見せていく。

▼リサーチ・ユニバーシティとクラブ

——大阪大学へのイメージは。
堀井 適塾・懐徳堂の伝統を受けた堂々たる名門大学ですが、法人化によって国・公・私立の棲み分けがなくなり、特色合戦になりました。宮原総長の下でスタートした新生大阪大学は世界が相手。世界の

名だたる大学に伍して競争力をさらに磨いてほしい。

上村 今回改めて大阪大学のことを知り、新技術や科学をはじめ新しい取り組みに感心しました。「東大は国家に対するロイヤリティー、京大は真理や科学に対するロイヤリティー、阪大は市民社会に対するロイヤリティー」とニューズレターの中で鷺田先生がおっしゃっていますが、阪大は次なる未来社会の実利的なテクノクラートを先を見越して育てようとしてきているんですね。しかし、そこに実利、実学を超えた、すぐには届かないかもしれないがもう一段と高い「理想へのロイヤリティー」も加えていただければ、より素晴らしい大阪大学になるのではないのでしょうか。

宮原 花を育てるために肥料をやる。そういう仕組みも大事です。足りない部分を補充し合えばシナジー効果も期待できます。

シンガポールであった学長会議で「リサーチ・ユニバーシティ」という言葉が頻繁に使われていました。研究型大学院大学です。我々の目指すところもそこにあるのではないか。もちろん教育をおそらくにすることはありません。

国立大学の場合、これまではお金の使い方に非常に細かい制限がありました。法人化によってそれが自由になった。運営に工夫を凝らして、総合大学としての地位を高めたいと考えています。

学生の教養教育とは—— 若者の知的欲求を呼び覚ます

多様な価値観を知り、生きる知恵を身につけるために

単に幅広い知識に過ぎないのか。
それとも、社会のなかで生きるのに役立つ大切なものなのか。
「もちろん必要不可欠なもの」と答えはほぼ一致そうです。
では、どういうわけで？ そもそもいったい何？
重要な役割を担っているのにどこか曖昧模糊としている
「教養教育」についてじっくり語り合いました。

●座談会

- 大阪府立高津高等学校長
木村智彦 ————— *Tomobiko Kimura*
- NHK編成局担当部長（1981年人間科学部卒業）
泉谷八千代 ————— *Yachiyo Izutani*
- 大阪大学大学教育実践センター長
高杉英一 ————— *Eiichi Takasugi*
- 司会 渡辺悟・毎日新聞論説委員 — *Satoru Watanabe*

【阪大ニュースレター No.30】 2005／冬号 掲載
2005（平成17）年12月1日発行



▼今に残る教養のこころ

——やさしそうで難しいテーマです。きょうのテーマの教養と大学の教養課程とはイコールではありませんが、まずは思い出話から。

泉谷 1限目はほとんど出席できず、いい学生ではありませんでした。最初に面白いと思ったのは産業行動学。林業の現場でなぜケガをするのか調査したら、切り倒したときの一瞬の恍惚で木に見入ってしまったということが分かったそうです。ミスをするのは人間の本性。職場での事故をなくすにはそれを計算に入れるべきだという話です。仕事のうえで危機管理をする際に、随分教訓になっています。

木村 広島大学の工学部でしたが、教養の時代に強烈な印象があります。解析概論とか材料力学概論など初めて出会う学問体系があり、哲学や現代思想、独語等にも触れました。エンジニアを目指すにしても、高等学校を卒業したばかりのニューカマーには知的世界への入り口としてとてもいい。

もう一つ、学生が全国から来ていて、中にはすごいやつも変わったやつもありました。高校までとは違う人材がごろごろいる。出合いの場として強烈な印象でした。

今、長い企業経験の後、高校の校長をしています。6月ごろに卒業生が帰ってきて、大学をやめると言います。あれほど行きたいと言っていたのに。そういう生徒がかなり出てきます。ニューカマーを受け入れる大学のシステムはどうなっているのか。もったいない話です。

高度な専門性を過度に尊重することが今日の高校教育に大きな影を落としています。企業と連動して即戦力を求め、「何ができるのか」を問う方向に社会全体が行ってしまった。ゼネラリストではなく、ス

ペシャリストがいいと。ゼネラルなことを初期に教えなければ駄目だというのが私の信念。教養課程復権論にもろ手をあげて賛成したい。

——ほとんど結論が出たようですね。

高杉 「大学で物理をやりたい」と言ったら、高校の担任の先生に「それでは食えない。医学に進んだら」と言われた。反発して物理へ進んだ。そのせいか、目的意識は持っていて、専門科目はわりとよく勉強しました。

教養科目の中で印象に残っているのは犬養孝先生の万葉集の授業です。すごく面白くて。僕は、自分で実感しないと納得しないタイプ。犬養先生は歌がつくられた場所に行くんです。地形とかを見て、きつとこんなことがあったのではないかと話される。すごく良かった。

当時、学部の試験は、午後全部を使っていました。図書館に行こうと何をしようと勝手。先生はいなくなって、勝手に考える放任システムでした。講義で先生が黒板の端から端まで1本の線を描いて帰ってしまったりとか。大学とはそういうところかと妙に感じしました。不思議だなあ、すごいなあ。最初はばかくさいと思っても、そこに何かあるのかしらと考える。講義はこんなことをやっているんだということを見せてくれるところで、あとは自分で何とかすればいい。そんな考え方でした。今とは随分違います。

▼人としてのベースになる

泉谷 入局してきた新人の教育をやってきた経験から教養って何か、受け入れる立場で考えてみました。

一つは、社会人としての実践的能力を身につける素地です。大学のさまざまなカリキュラムで体系的な情報が入ってきて、脳を耕しているんだなど。





木村智彦氏

大学で何でもしようと思わないほうがいい。
長い人生の圧倒的な部分を占める企業は
教育装置でもある。

もう一つは、多様性を受け入れることができる幅
広さです。さまざまな価値観・風土に接することで、
種をまいて広げていく。大学教育の主要な部分では
ないでしょうか。企業に入ってしまうと、一つの価
値観をどうしても押し付けられたりしますから。教
養は一生かかって身につけるものです。危機に臨ん
で自らの出処進退をどうするか。人間としての懐の
深さをどうやって養っていくか。心の幅をどう持た
せるか。違う生き方を提示することは社会や家庭で
も必要ですが、大学にも役割を担ってほしい。高校
で耕し、大学で広げ、社会で深める。そういう分担
があつていい。

——企業では文系が大きな顔をしています。

木村 今の若者は、いとも簡単に解決策を考えてき
ます。問題解決能力はある。しかし問題を設定する

能力では首をかしげざるを得ない。ベースとなるの
は、その課題設定能力です。体全体に流れている滋
養みたいなもので、そここそが教養です。

企業経営のトップは概して人事・財務・労政の出
身が多い。理系としてはくやしければ、文系の連
中は面白いですよ。学校の成績は分らないけれど、
トータルとして幅の広さや価値観の多様さは文系の
強さを認めざるをえない。それにしても生徒の理系
ばなれは深刻です。

教養の有無とは、一言でいえば、ポテンシャルを
どこまで高めているかということ。目には見えない
潜在的な能力です。

大学の入試科目が減ってきて、高校の必修科目が
極めて減っています。京大・阪大・神戸大に何人入
れるか。保護者や生徒が望むことに高校側としては
応える必要がある。幅の広さやリベラルアーツが高
校教育で少なくなっているとしたら、大学入試のシ
ステムと方法に影響されているということになりま
す。できる限りのことはしています。

▼解はたくさんあるのに

高杉 5教科7科目を課しているのは、そういう幅
広い教育をしてくださいというメッセージです。ど
んなテーマでもいいから、考えるくせをつけてほし
い。考えるくせをつけて大学に来ていただく、何
かあつても必ず対応できます。大学は考えるところ
です。思い続けるとその思いは必ず実現します。

企業に入つて失敗するのはやはりまずい。一方、
大学は失敗を許す場です。大学4年間で十分失敗を
して、自分なりに考える。苦労したり考えたりする
ことが将来きつと役に立ちます。

阪大に来る学生は高校までは優秀で通つていて、
怒られることもなければ、挫折の経験もない。そう

という人が大学で授業を受けて分からなかったりすると、「適性がなかった。他大学を受けなおそう」となる。説得しても頑として聞かない人が多い。かたくなです。考えるくせがついていないのではないかと。考えるとは何か。一つでも二つでも三つでも違う考え方がないと気づくことです。今の学生は一つの答えしかない。直結型が一番危険です。若い研究者や学生でも、ぶつかるとそこで逆戻りします。そうじゃなくて、五つぐらいを思い浮かべて、それらを平等に考える。そうすれば、一番を選べます。それでも駄目ならまた別を考える。

予測どおり行かないことは必ず出てきます。そのときにやるのがいくつ出るのが重要なところ。大学では、そこを広げてもらって多様な価値観をもってもらおう。いろんなことがあつてその中から適切なものをバイアスなく選んで進んでいける。そういうことを目指したい。

高校までは、価値観がかなり一様です。いい成績を取って大学に入るといふもので、しかもいい成績とは出来高制です。1時間のうちに何点取れるかということですから。でも実際には、10分で答えの出る人もいるし、1日かかっても答えの出ない人もいます。分からなくても心に留めていると、そのうち分かる 때가来る。昔は、忍耐強かったり打たれ強かったりして、知らず知らずにやってきたと思う。それが今の学生には苦痛なようです。

木村 おっしゃる通りです。教員たちが共通して言うのは、物事の本質を教えるために高校教師になったということです。ところが今や、教育が「技」になってしまった。解を求める技たるや、すごいものがあります。けれどもその過程や本質については訓練されていない。考える力が身につけていないのです。

▼大学入試の影響が高校に

——解は一つで、決められた時間にできるだけ多く解けばいい。そういうことの集約が大学受験です。大学受験を変えれば、小・中・高がかなり変わるのでは。

高杉 その通りです。解き方がいくつもある問題や、記述式の問題の導入など、受験生に考えてもらう問題を出すよう努力しています。

泉谷 最終的に答えは一つかもしれないけれど、あかも考えられる、こども考えられる。山頂は一つでも登り方はいくつもある。そういうことを考える過程は、知的欲求を満たしてくれます。たかが数字なのに数学の答えが「美しい」と感じる。そういう感覚は、大学受験の時にしか味わえなかった。大学受



泉谷八千代氏

教養は一生かかって身につけるものです。
危機に臨んで
自らの出処進退をどうするか。
人間としての懐の深さを
どうやって養っていくか。
心の幅をどう持たせるか。

験のあり方をすべて否定するわけではありません。そのプロセスでいい経験もしました。

高杉 おっしゃる通り。僕らのころは、特に数学の教え方もそういう感じだった。

木村 入試の問題づくりが大きな影響を与えています。物事をじっくり考えることを求めるのであれば、出題もそういう方向にしなければ。大学入試のあと高校教師は問題をまず見る。最大の関心事です。その入試のシステムが変わってくれば、高校教育に大きな影響を与えます。大学定員と大学進学希望者数が2007年には逆転します。大学入試システムが大きく変わる分水嶺が近づいていると思います。

高杉 大阪大学の入試問題は、基本的なことを高校で学んでいればできる問題。過度に難しくはなく、良問といつも言われています。

泉谷 中1の時、なぜ数学の勉強をするのか先生にじっくり尋ねました。納得する答えは出ませんでした。が、勉強するうちに「無駄にはならない」と気づきました。最後には、数字に美を見いだす自分がいた。とば口では分からないけれど、とりあえずやってみる。そんなチャンスをいろいろ提示していくのも教育の役割では。

▼柔らかな専門家を育てる

—教養教育は今どうなっていますか。

高杉 大学教育の柱の一つである専門教育のレベルを大阪大学は保っています。消化不良になるぎりぎりのところで頑張っています。高い目標を掲げて、それに向かって努力する。そして大学院につなぐ。これが基本です。

もう一つの柱が教養教育です。「柔らかな専門家を育てる」と宮原秀夫総長は言っていて大学院まで通じた教育目標として教養・国際性・デザイン力を掲

げています。学部目標としては、まとめて「対話力」の養成と言っています。対話力とは、コミュニケーションのときに相手の文化的バックグラウンドを理解して話せるという意味です。いろんな価値観を持つことが異分野・異文化の人と話をできる素地をつくることになります。そこをどうつけていくかが重要。こんな科目がなんの役に立つのかという疑問もあるでしょうが、いろんなことを学ぶのはいろんな人と対話するためです。雑多な知識を関連付けることによって、知識が知恵に変わります。

「あなた方は社会のリーダーになってください」とあえて言っています。私の言うリーダーは、無理やりみんなを引っ張っていく指導者ではありません。いろんな人を理解して自分の考えをみんなの中で主張していける人という意味です。

どんなテーマでもいいから、
考えるくせをつけてほしい。
一つでも二つでも三つでも
違う考え方があると気づくことです。



高杉英一 大学教育実践センター長

泉谷 対話力というのは面白いと思います。採用面接のとき、卒論の内容をかみくだいて説明してくれる学生がいます。テーマの大事さが分かって、説得力があります。その研究室と社会とのかわりも見えてくる。そういう人が欲しい人材です。目の前の研究に自ら興味を持ち、他人にかみくだいて説明できる。そういうことが対話力でしょう。

阪大生はうまいですよ。面接の達人のようなマニユアルトークではなく、朴訥でも説得力がある。急に問われても、目をキラキラ輝かせて。いい学生はこう育つのだなと。

▼知的教育に加え現場体験を

高杉 我々の科目群には、有無を言わず食べさせ「定食」と自由に選べる「アラカルト」がありません。対話力をキーワードにバランスよく組み替えていこうとしています。

もう一つは1年生からやっているゼミです。目的は、高校までの学びと違うことを理解してもらい、大学の学びに慣れてもらうこと。一流の研究者の背中を見て、触れ合いの中で学んでいただく。10年以上前からやっていて、学生の評価はすごくいい。

泉谷 自分を高めたいという方を今の学生は就職面接でします。大事なことです。何か違うなと思っていて。考えてみると、利己的なんです。利他ではない。世のため人のためになりたいという利他的な精神が今の教育の中で抜け落ちていきます。

知的教育とシンクロしたフィールドワークが大学に必要だと感じます。ポランティアや介護の経験など、いやなことでもいいことも含めて生身の人と接して、それに知識が加わって初めて実のある教養になるのでは。

卒業生としてお願いしたいことがあります。ジャーナリズムの世界に阪大卒業生がすごく少ない。経済社会の役割を果たしていれば他はいいやというところがあるのでは。経済社会だけでなくジャーナリズムにも卒業生を送りこんでいただきたい。

▼ポテンシャルの高さがポイント

木村 踏み込んだ発言をします。大学で何でもしようと思わないほうがいい。長い人生の圧倒的な部分を占める企業は教育装置でもある。企業が求めているのは、幅の広い、ポテンシャルの高い人材です。

高校と同じで大学でも教育改革の原点は教員改革ではないですか。本当の意味で学生に対峙し、学問の面白さを伝え、夢を語り、志を育てるような視点が要ります。やっていらっしやると思うけれど。高校教員の嘆き節の最後は、大学人は自らを改革すべきだということ。改革の自身がどうも高校側に伝わってこない。

——パラサイトシングルやニートがいて、片方に1400兆円という膨大な個人資産がある。お金持ちだから我慢する必要もない社会になってしまった。そこに病理が出てきています。

泉谷 自己肯定しかしてこなかったから、他者から否定されることに耐性がありません。

木村 多様な価値観を受け止める器量や幅の広さは必要なこと。ところが、豊かさゆえの精神的弛緩と慎みのなさも広がっている。「気楽なのが一番。しんどいことはもうええねん。要領よく」と。

学をもって性を養うべし。教育の原点はそこにあります。時間はかかるが、それしかない。一気にはいかなけれど、みんなのベクトルが向けば大きな力になります。そのキーワードは教養教育。知に触れることです。

▼社会のリーダーが育つように

高杉 高校までとは違う価値観を大学で分かっていた。社会に出てからではなく、大学で挫折の経験をしてほしい。違った価値観のもとでもちゃんと生きていける力をつけるために。ゼミなどを通じて人と人との触れ合いがそれを可能にします。

森精機の森社長（株式会社森精機製作所 森雅彦社長）に講義していただいた時、社員を奮い立たせる言葉はなにか質問しました。「自分だけの幸福はありえない。周りが幸福になってこそあなたも幸福になる。そのためにあなたは頑張るんです」という言葉でした。それが本当の社会のリーダーではないか。そういう意味で阪大生にはリーダーになってほしい。

阪大ニューズレター対談集の刊行にあたって

阪大ニューズレター対談集の刊行にあたって

阪大ニューズレターは、1998年に第1号を発売して以来、8年間にわたり大阪大学の研究成果や教育研究活動の現状を社会に発信してきました。阪大ニューズレターの発刊は、「社会と大学の相互理解を築く」という大阪大学の広報活動理念にもとづきスタートしたもので、在阪企業、地元産業界との連携強化のための研究情報の提供や、関西経済界、近隣自治体との連携・協力を意識した企画編集に努めてきました。

特に企業、産業界、経済界などのトップの方々や、学者、知識人の方々などをゲストに迎え阪大総長とトークするコーナーは、大学のトップがその考えや大阪大学の取り組みを社会にアピールすると同時に、学外からの意見や要望を大所高所から聴くまたない機会ともなっています。今改めて読み返してみても、ゲストの方々の言葉の端々には、大阪大学に対する信頼感、期待感、熱い思いが込められており、時がたつても色あせることのない新鮮さを感じられ

ます。このため、後々までも貴重なメッセージとして伝えることが大学の責務だと考え、今回「対談集」という形で残すことにしたものです。

国立大学は法人化という大きな節目に立ち、その真価が問われようとしています。大阪大学も世の中の変化を肌で感知しつつ、常に前向きに社会の期待に応えるよう努力していきたくと考えています。そして、その一手段として、今後も阪大ニューズレターを通して社会にメッセージを送り続けたいと思います。

最後に、これまでの対談、座談会にあたって、ゲストの方々には多事多忙の中をご出席いただき、改めてお礼申し上げますとともに、発刊当初から阪大ニューズレターの取材、編集にご協力いただいている毎日新聞総合事業局に感謝申し上げます。

2006年3月 阪大ニューズレター編集担当

大阪大学総務部評価・広報課長

松本紀文



- 大阪大学 公式ホームページ
<http://www.osaka-u.ac.jp>
- 阪大ニューズレター・バックナンバー
<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/press/newsletter/index.html>

研究成果を積極発信

来月から企業向けニューズレター

大阪大は、日頃の活動 まで不十分だった外産への 研究成果を学外へ広く 情報発信を行ってこ して いる。その一環として、 来月に創刊する「ニ ューズレター」は、年 4 回の発行、最新の 研究成果や継続 中の研究を紹介 するほか、結集 記事などで大学 の現状を詳しく レポートする。

「ニ ューズレター」は、 計 1 万 1,000 部を 発行し、約 4, 500 社の企業や 地方自治体など に送る。

また、研究者 組織は約 200 0 人以上の助手 以上の教育に關 する情報や、手 と大学のホー ム ページを連携 させ、企業や 研究者に直接 情報発信が可 能なようにする ことも、大阪大 阪大総務課は「し かり、国で最も 優れた研究・ 教育機関の一つ である」と誇り ている。

【取材 担当】

キャンパスライフ

企業向けのPR誌創刊に最後の詰めをするスタッフ

● 1998年8月17日付毎日新聞



Handai NEWS Letter
阪大ニュースレター 対談集 1998-2005
「社会と大学、知の交流」

2006年3月31日発行

編集・発行——大阪大学総務部評価・広報課
〒565-0871 吹田市山田丘1番1号
TEL 06 - 6877 - 5111
<http://www.osaka-u.ac.jp>

印刷・製本——毎日新聞総合事業局

「地域に生き世界に伸びる」——大阪大学

